

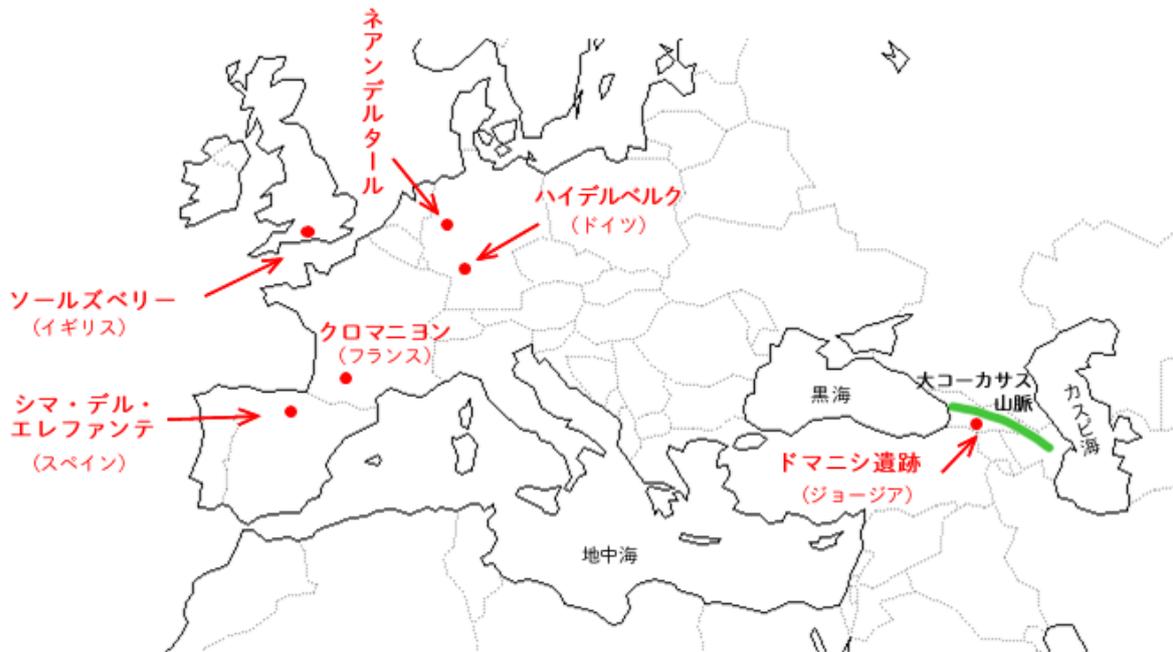
第 2 節 概説

1. 人類の出現

人類がまだ文字を使用していなかったこともあり、文字による記録や資料が存在しない時代を**先史時代**と呼び、**歴史時代** (**有史時代**) と区別する。欧州では何百万年も前から人類が生息しており、最古の文字 (**線文字 A**) が古代ギリシア人によって考案されたのは紀元前 1550 年頃であるため (312 頁参照)、先史時代は極めて長く続いたことになる。

人類の種は古い順に**猿人**、**原人**、**旧人**、**新人**に分けられる。その内、**猿人**はアフリカでのみ生息していたのに対し、**原人**はこの大陸から他の大陸に拡散した。なお、1869 年、**スエズ運河** (全長約 193km) が完成し、アフリカとアジアは切断されることになったが、それまでは、ヨーロッパも含め、3 大陸はつながっていた。人類の祖先はエジプト北西部にあるスエズ地峡から小アジアを経由し、ヨーロッパに移動したと考えられている⁹⁹⁵。

カスピ海西岸のジョージア・ドマニシ遺跡では約 185 万年前の原人 (ホモ・ゲオルギクス) の骨が発見されており、これはアフリカを除くと世界最古の原人の化石である。なお、EU はジョージアをヨーロッパの国に分類しているが、大コーカサス山脈の南麓にあるため、アジアに属するという見方もある (8、15 頁参照)。このような観点から、スペイン北部のシマ・デル・エレファンテで発見された約 110~120 万年前の原人の化石がヨーロッパ最古とされることも少なくない。



アフリカに留まっていた原人の一部は**旧人**に進化した。旧人も他の地域に移動しており、ドイツ南西部の文化都市ハイデルベルクでは約 50 年前のものと推測される旧人の骨が見つかった。発見された場所にちなみ、この旧人は**ハイデルベルク人**と呼ばれているが、20 万年前頃までに**ネアンデルタール人**に進化した。なお、ネアンデルタールとはドイツ西部にある小さな谷⁹⁹⁶で、この旧人の骨が発見された場所である。

約 4~3 万年前、ネアンデルタール人は絶滅する一方、アフリカに留まっていた旧人 (ハイデルベルク人) は現在の人類 (現生人類) とほぼ同じ体型や知能を持つ**新人**に進化した。彼らは、遺骨がフランス南西部のクロマニヨンで発見されたため、**クロマニヨン人**と呼ばれている。この新人がヨーロッパに出現したのは約 4 万年前頃で、ネアンデルタール人絶滅の一因になった。

⁹⁹⁵ Andrew Curry, Wer waren die ersten Europäer?, in <https://www.nationalgeographic.de/wissenschaft/2019/07/wer-waren-die-ersten-europaer>

⁹⁹⁶ ネアンデルタール (Neandertal) の「タール」(Tal) とはドイツ語で「谷」という意の名詞である。

先史時代、欧州には4度、氷期（氷河期）が訪れており、1万4000年前頃まで北ヨーロッパと中央ヨーロッパの大部分は氷で覆われていた時代があった。そのため、アフリカから移動してきた人類が北欧で生活することはなかったと考えられている。狩猟民の彼らは悪天候や寒さから身を守るため洞窟の中に住み、石器を用いて狩猟を行っていた（石器時代）⁹⁹⁷。

なお、氷期、グレートブリテン島（イギリス）と大陸は地続きであり、分離したのは9000年前である⁹⁹⁸。前5000～前4000年頃になると農業が行われるようになった。それには氷期が終わったことだけではなく、**オリエント**（メソポタミア、エジプト）⁹⁹⁹で発達した農業が欧州に伝わってきたことが大きく影響している。農耕の発展とともに石器も進化した。また、巨大な石を用いた建造物がヨーロッパ各地で建てられるようになる。中でもイギリス南部のソールズベリーに残されている**ストーンヘンジ**（Stonehenge）が有名であり、この巨石群は英国を代表する観光スポットの一つにあたる。このストーンサークルは、紀元前3000年前から、1500年という長い年月をかけ、段階的に大きくなっていったと考えられているが、何のために建てられたかは分かっていない¹⁰⁰⁰。



イギリス・ソールズベリーに現存するストーンヘンジ（Stonehenge）

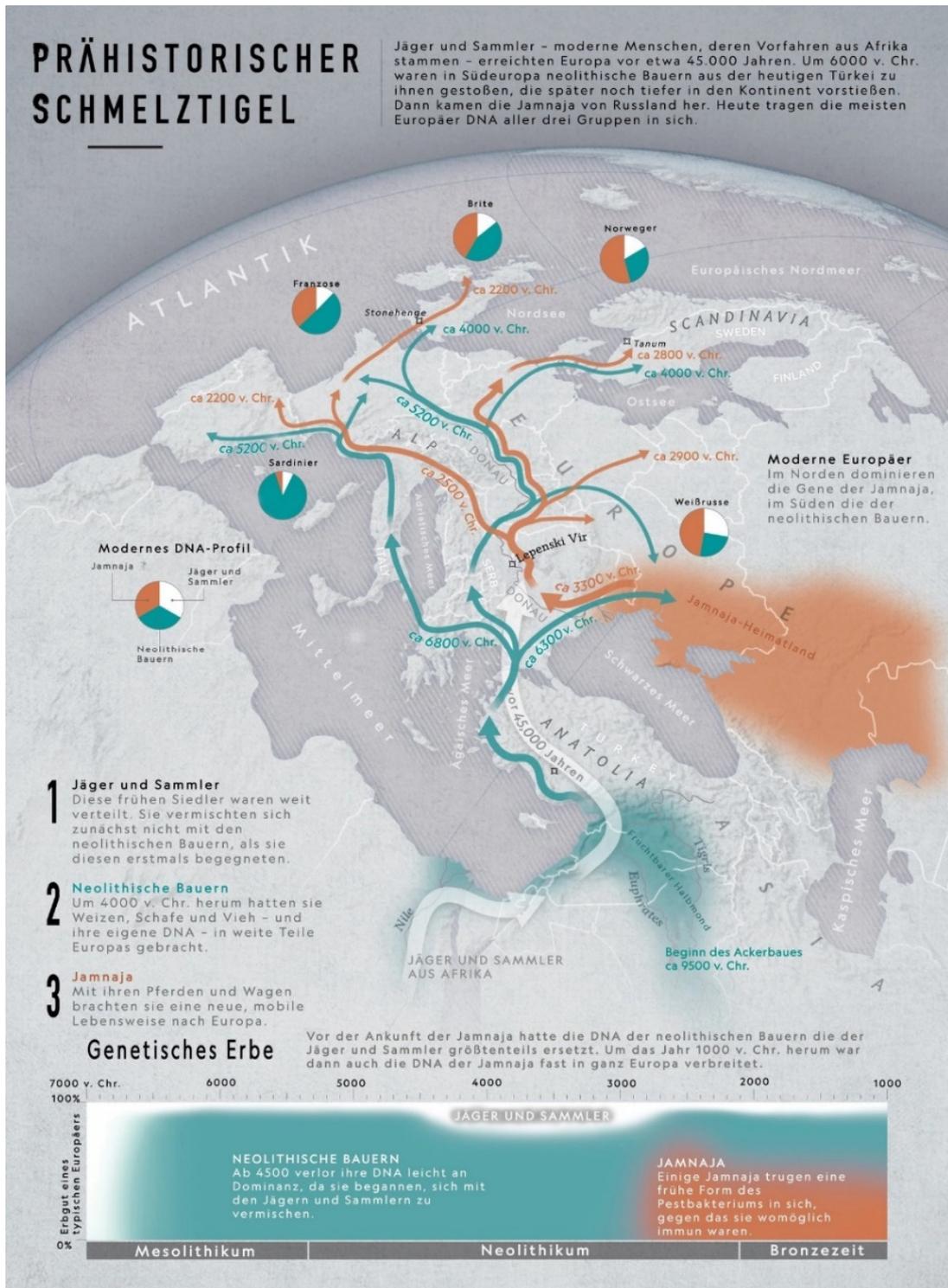
⁹⁹⁷ F・ドルーシュ、木村尚三郎（監修）、花上克己（訳）『ヨーロッパの歴史』（東京書籍 1994年）31～32頁参照。

⁹⁹⁸ See I. De Groote, M. Lewis & C. Stringer, Prehistory of the British Isles: A tale of coming and going, BMSAP (2017), in <https://doi.org/10.1007/s13219-017-0187-8>. See also Nora McGreevy, Study Rewrites History of Ancient Land Bridge Between Britain and Europe, in <https://www.smithsonianmag.com/smart-news/tiny-islands-survived-tsunami-almost-separated-britain-europe-study-finds-180976430/>

⁹⁹⁹ **オリエント**（orient）はラテン語の「日の出」（oriens）に由来する語で、古代ローマ人はイタリア半島より東にある地域をオリエントと呼んだ。これにはギリシアも含まれるが、現在は「東洋」、つまり、ギリシアよりも東にあるアジアを指すことが多い。アフリカ北東部にあるエジプトもオリエントに含まれ、エジプトやメソポタミアで発祥した文明をオリエント文明と呼ぶ。なお、オリエントの対義語は「オクシデント」（Occident）である。

¹⁰⁰⁰ 世界遺産オンラインガイド「ストーンヘンジと関連する記念建造物群」（<https://worldheritagesite.xyz/contents/stonehenge/>）

下の図は、紀元前 4500 年頃、現トルコ領からヨーロッパへ移動し始めた人々のルートを示したものである。彼らはそれ以前にヨーロッパに住んでいた人類とは異なり、農耕ではなく、狩猟を行い暮らしていた。なお、ヨーロッパ人の祖先は単一ではなく、複数のルーツを持つと考えられている¹⁰⁰¹。



先史時代の人類の移動¹⁰⁰²

前 3000 年頃、石器時代から銅器時代が変わった。この頃、黒海やカスピ海の北部のステップ（草原、53 頁参照）には「ヤムナ」と呼ばれる銅器文化圏が存在し、広域で放牧が行われていた。後に人々は四方に分散するが、インド方面またはヨーロッパの方に移動した人々の言語には共通性があり、「インド＝ヨーロッパ語族」という統系が設けられている。

¹⁰⁰¹ Curry, op. cit.

¹⁰⁰² 画像出典 Curry, op. cit.

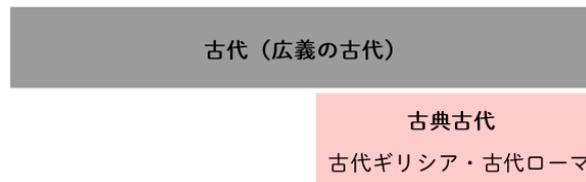
研究によると、インド・イラン語派の言語¹⁰⁰³とヨーロッパの言語（190 頁参照）の起源は同じであり、印欧祖語と呼ばれる言語より派生した¹⁰⁰⁴。なお、ヨーロッパの言語はインド・イラン語派の言語よりも数が非常に多く、さらにケルト語派、ゲルマン語派、イタリック語派、バルト・スラブ語派に分かれる。

この概念は言語群に関するものであり、民族を指しているわけではない。後者の意では「インド＝ヨーロッパ語系の民族」または「印欧語族に属す言語を話す人々」と言う。なお、19 世紀、この民族はアリア人と呼ばれ、セム語（ヘブライ語とアラビア語）系の人種と区別されるようになった¹⁰⁰⁵。

◎ 古典古代

先史時代ないし原始時代が終わってから中世が始まるまでの時代区分を**古代**と呼ぶ。この時代はメソポタミアやエジプトで文明が発祥した紀元前 4000 年頃に始まり、西ローマ帝国が消滅する 476 年まで続いた。東ローマ帝国は 1453 年まで存続するが、西ローマの消滅によって、ローマの歴史は終わり、古代も終わる。なお、6 世紀、東ローマ皇帝のユスティニアヌス 1 世は部分的にローマの再統一を実現したが、この「新ローマ」も彼が 565 年に亡くなると崩壊する（326 頁参照）。また、1453 年まで存続する東ローマ帝国もギリシア化が進み、ローマとしての性質は失われたため、古代は彼の死とともに終わったと捉える立場もある¹⁰⁰⁶。

欧州で最も古いギリシアの歴史も古代史に含まれる。ヨーロッパ人は古代ギリシアとローマの時代を「**古典古代**」(Classical Antiquity/klassische Antike)と呼び、その他の古代と区別するのが一般的である。この歴史用語が示す通り、ヨーロッパの「古典」は古代ギリシア・ローマで形作られた（125 頁参照）。なお、その時代



を「古代」とし、古代オリエントの時代も含めた時代区分を「広義の古代」として捉えることもある¹⁰⁰⁷。

グレコ・ローマン (Greco-Roman) の時代をその他の古代と分けるのは、ヨーロッパとオリエントの歴史を分けるためである。つまり、古代ギリシア・ローマの歴史は、ギリシアやイタリアという国の歴史としてではなく、ヨーロッパの歴史として捉えられている。もっとも、ほとんどの国は古代ギリシア・ローマの歴史に関わっていない。諸国に共通のヨーロッパ史は 18 世紀に始まったと捉えることもできる¹⁰⁰⁸。

¹⁰⁰³ インド・イラン語派の言語にはアッサム語、ベンガル語、ネパール語、ペルシア語、クルド語等、インドやイラン等、多数の言語が属する。この点について、後藤俊文「インドのことばとヨーロッパのことば」阿子島香（編）『ことばの世界とその魅力』（東北大学出版会 2008 年）117～163 頁を参照されたい。

¹⁰⁰⁴ Universität Zürich, Die indoeuropäische (oder indogermanische) Sprachfamilie, in <https://www.adfontes.uzh.ch/tutorium/die-deutsche-sprache-in-den-quellen/deutsch-im-kontext/die-indoeuropaeische-oder-indogermanische-sprachfamilie>; John Novembre, Die Wiege des Indoeuropäischen, in <https://www.spektrum.de/magazin/1359258>

日本語はインド・ヨーロッパ語派に属さず、日本語族という独自の統系が設けられているが、琉球語と合わせて日琉語族とすることも多い。この点について、折口信夫『日琉語族論』青空文庫 POD（2015 年）を参照されたい。

¹⁰⁰⁵ この点について、ホロコースト百科事典「アリアという言葉の起源」(<https://encyclopedia.usmmm.org/content/ja/article/aryan-1>) を参照されたい。

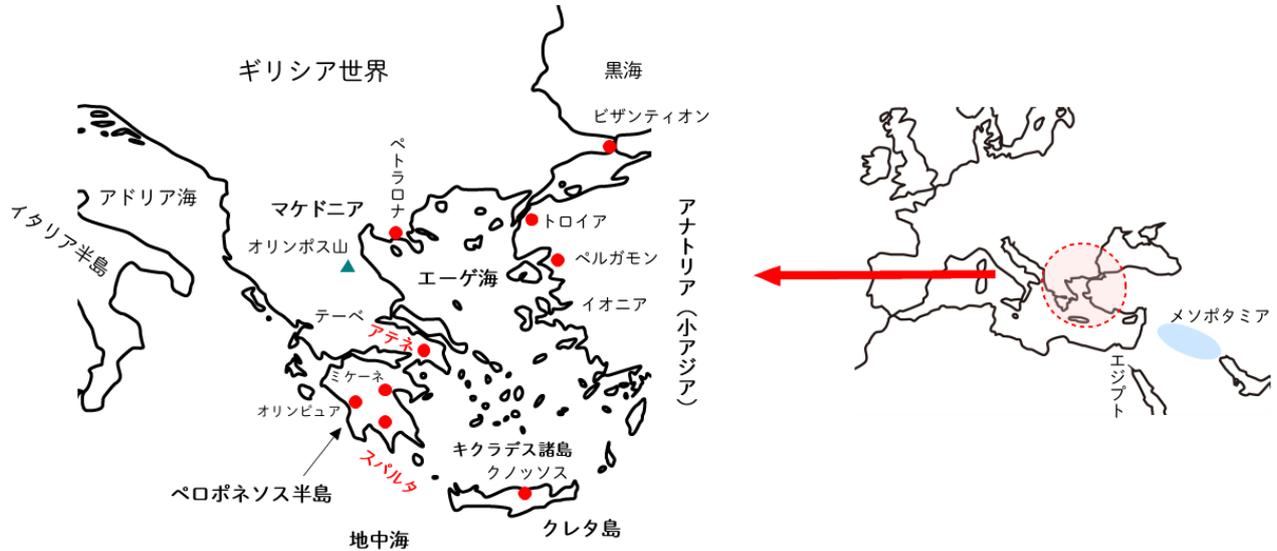
¹⁰⁰⁶ Alexander Demandt, Geschichte der Spätantike: das Römische Reich von Diocletian bis Justinian 284-565 n. Chr., C. H. Beck 2007, pp 164-180.

¹⁰⁰⁷ ドイツ語では広義の古代を Altertum と呼び、古代ギリシア・ローマ時代の Antike と区別する。

¹⁰⁰⁸ Wolfgang Schmale, Geschichte der europäischen Identität, APuZ 1-2/2008, pp. 14-19, 16.

2. 文明の誕生と古代ギリシア

紀元前 4000 年～前 3000 年頃、世界最古の文明がメソポタミアやエジプトで成立した。この東洋文明はエーゲ海域に広まり、欧州最古の文明を誕生させた。つまり、ヨーロッパの文明はオリエントの影響を受けながら、両地域の接点で生まれている。



前 2500 年頃になると、オリエント文明の影響を受けながら、ギリシア本土でも文明が開花した。そこで作られた青銅器・鉄器、陶器、文字、装飾や埋葬の習慣等はヨーロッパ文明の源泉となり、各地に広まっていく。「ヨーロッパ」という概念もギリシア神話より生まれており (2 頁参照)、「アジア」ないし「オリエント」との違いが明確に意識されていた。

古代ギリシア人は、紀元前 15 世紀頃より説話を語り継いできた。『ギリシア神話』として知られる物語は、実際には、それよりも古い時代からエーゲ海域で信じられてきた伝説を集めたものであり、ギリシア以外にも、多くの地域が神話の舞台になっている。エーゲ海東岸 (小アジア) に位置する**トロイア**はその一つであり、神話によると、ギリシア人との戦争が発生しているが、実証されていない (注 1012 参照)。

前 8 世紀半ばになると、彼らはその南方に位置する**イオニア地方**に進出し、植民市を築いた。なお、**ペルガモン** (316 頁参照) は、それから 500 年が経過した**ヘレニズム時代**に栄えた古代都市である。この時代、小アジアからインド西方にまで達する広い地域はギリシア化され、ギリシア語が共通語として使用されていた。

前 15 世紀～	前 8～前 4 世紀	前 4～前 2 世紀	前 2 世紀～後 4 世紀
ギリシア神話の時代	→ ポリスの成立	→ アレクサンドロス帝国・ヘレニズム時代	→ 古代ローマの時代
	植民市の建設		

古代ギリシアを象徴する神殿が建てられ、哲学や文学が発展したのは紀元前 5 世紀以降のことであるが、それらは「古典」として、ヨーロッパ文化の基盤を形成している (129 頁参照)。

なお、西洋文明・文化の源流を生み出した古代ギリシアとは一つの国ではなく¹⁰⁰⁹、エーゲ海を囲む地域であった。つまり、現在のギリシア (正式名称はギリシア共和国) の領土だけではなく、トルコ西部も含まれ、ギリシア人はエーゲ海の東岸にも植民市を設けている (411 頁参照)。彼らはこの地域を「アジア」と呼んだが、アジアは我が国をも含む広大な大陸である。そのため、後世、エーゲ海の東岸は「小アジア」と、また、1923 年にトルコが建設されると、「アナトリア」と呼ばれるようになった (5 頁参照)。

¹⁰⁰⁹ バルカン半島最南部のギリシア地方の 8 割は山地であり、平地が少ないため、多数の都市国家が各地に成立した。

1) エーゲ海域における文明の成立

エーゲ海域では約 40 万年前より人類が生息しており、ギリシア北部のペトラルナ洞窟では旧人類の頭蓋骨が見つっている。なお、紀元前 8 世紀、各地にポリス（都市国家ないし共同体）を建設したのは、この住民ではなく、前 3000 年頃、バルカン半島北部から南下してきた民族と考えられており、住民は彼らによって滅ぼされた¹⁰¹⁰。

西洋文明の源泉を作った古代ギリシア人はどこからやってきたのか、また、どのような人種であったかという点について学説は分かれているが、彼らは、前 3000 年頃、バルカン半島北部から南下してきたという説が有力である（注 1010 参照）。インド＝ヨーロッパ語系のこの民族はペロポネソス半島北部のアカイアに定住したため、**アカイア人**と呼ばれており、ギリシア本土からエーゲ海域に移住し、**イオニア人**や**アイオリス人**に分化した。なお、古代ギリシアの都市国家（ポリス）を代表する**アテネ**はイオニア人によって建設された。

前 1200 年頃になると、他の民族も南下してきた。彼らはペロポネソス半島南部のドーリアに定住したため、**ドーリア人**と呼ばれており、先住民を征服し、**スパルタ**を建設した。彼らによって鉄器が持ち込まれると、古代ギリシアは青銅器時代から鉄器時代が変わった。

なお、遺骨を検査した結果、クレタ島でミノア文明を築いた人々は別の民族であることが分っている¹⁰¹¹。つまり、彼らはギリシア本土で文明（ミケーネ文明）を開花させたギリシア人ではない。エジプトより移動してきたと考えられていた時代もあるが、DNA 検査によって否定されている。

また、同じ頃（前 3000 年頃）、エジプトやメソポタミアから青銅器の製法が伝わると、エーゲ海域でも文明が発祥した。この海域で生まれた青銅器文明は**エーゲ文明**と呼ばれるが、以下の 4 つの文明ないし文化圏に分けられる。

	文明が成立した地域	成立・発展した時期
キクラデス文明（キュクラデス文明）	キクラデス諸島	前 3000 年～前 2000 年
トロイア文明（トロイ文明）	トロイア（トロイ） ¹⁰¹²	前 2600 年～前 1200 年
ミノア文明（クレタ文明）	クレタ島	前 2000 年～前 1100 年
ヘラス文明（ヘラディック文明） 後のミケーネ文明（ミュケナイ文明）	ギリシア本土	前 2500 年～前 1050 年 (前 1600 年～)

これらの文明の内、いち早く開花したのは**キクラデス文明**である。「文明」ではなく、「文化」と呼ばれることもあるが、その名称は発祥地である諸島に由来する。エーゲ海に浮かぶキクラデス諸島（前頁の地図参照）は古代ギリシアの聖地で

¹⁰¹⁰ Max-Planck-Gesellschaft, Alte DNA enthüllt Herkunft von Minoern and Mykenern, in <https://www.mpg.de/11421333/>. また、庄子大亮「古代ギリシアとヨーロッパ・アイデンティティ」谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』（山川出版社 2003 年）32～55 頁を参照されたい。

¹⁰¹¹ Max-Planck-Gesellschaft, ibidem.

¹⁰¹² エーゲ海域東部の**トロイア（トロイ）**は、アジアとヨーロッパ、エーゲ海と黒海の接点にあり、この地域の政治・文化の中心地として栄えたが、324 年にローマ皇帝の**コンスタンティヌス 1 世**が**コンスタンティノープル（ビザンティオン）**を建設すると、交通の要衝から外れて衰退し、廃墟となった。現在はトルコ領である（323 頁参照）。この地は紀元前 1200 年頃、東征したギリシア人（アカイア人）とトロイア人の間で起きた**トロイア戦争**の舞台となったことでも知られている。ヨーロッパ最古の詩人とされる**ホメロス**（前 8 世紀頃）の叙事詩『イリアス』は、この戦争を題材とする。それは架空の物語ないし神話として捉えられていた時代もあったが、1870 年、**ハインリヒ・シュリーマン**（1822～1890）によって城跡や財宝が発掘され、トロイア文明の存在が明らかになった。ただし、トロイア戦争が起きたことまで証明されているわけではない。

なお、この戦争で敗れたトロイアの英雄**アエネアス**は西方に逃れ、イタリア半島中央部にたどり着くと、その地の女王と結婚した。そして、新しい都市を築くが、彼の末裔が古代ローマを興したとされている（319 頁の注 1028 参照）。

あるデロス島や、ミコノス島、ミロス島等、200以上の島嶼からなる。なお、ギリシア彫刻を代表する「ミロのヴィーナス」は、この諸島の西端にあるミロス島で発見されているが、キクラデス文明期ではなく、2000年以上後のヘレニズム時代（紀元前2世紀頃、316頁参照）に制作されたものである。

この諸島では新石器時代から青銅器時代における集落の跡や壁画が見つまっている。中でも墳墓から発掘された大理石像が有名で、シンプルなフォルムは20世紀の美術に大きな影響を与えた（右の画像参照）。

キクラデス文明は1000年近く栄えたが、**クレタ島**で**ミノア文明**が発展すると衰退していった。

クレタ島はエーゲ海と地中海を隔てている島で、今日でもギリシア領の最南端に位置する。また、エーゲ海域では突出して大きく（8,336km²）、兵庫県とほぼ同じ広さである。ギリシア神話の最高神**ゼウス**はこの島で生まれたとされており、この島に「ヨーロッパ」という地域名の由来になる王女**エウロペ**を誘拐し、3人の子を儲けた（2頁参照）。



キクラデス文明期の群像
(ドイツ Badisches Landes-museum 所蔵)

青銅器時代、この島は交易の要衝になる。この経済発展を背景に欧州最古の国家が成立し、紀元前2000年頃、北岸の**クノッソス**に王宮（クノッソス宮殿）が建てられた。宮殿は無数の部屋や複雑な構造を特徴としており、ギリシア神話によれば、地下には容易に脱出できない迷宮があった。

ヨーロッパ最古の文字（**線文字 A**）もこの島で考案された。1900年、イギリス人の**アーサー・エヴァンス**は、クノッソスでこの文字が刻まれた粘土板を発掘しているが、まだ解読されていない。なお、ギリシア人は**線文字 B**も使用しており、それは1953年に解読されている¹⁰¹³。

クレタ島で発祥した文明は、この島を治めていた**ミノス王**の名にちなみ、**ミノス文明**と呼ばれ、高名な王の下で発展したが、前1100年頃、突然消滅した。ギリシア本土から南下してきたアカイア人（古代ギリシア人）に滅ぼされたという説や、火山の噴火が遠因になったという説が主張されているが、原因は解明されていない。

◎ **ダイダロス (Daidalos) と息子のイカロス (Ikaros)**

ギリシア神話には**ダイダロス**と**イカロス**という人間の親子が登場する。父親のダイダロスは職人や発明家としてアテネで名を揚げていたが、殺人を犯した罪で追放されると、クレタ島へ渡り、ヨーロッパ最古の王朝に仕えた。そして、王の奴隷との間にイカロスを儲ける。

国王の**ミノス**は最高神**ゼウス**の子であり（2頁参照）、数々の伝説を残す偉大な君主であったが、海神**ポセイドン**との約束を破る失態を犯す。この不義理に激怒した海神が王の妃に呪いをかけ、牡牛に恋をするよう仕向けたところ、彼女は牛と交わり、牛頭を持つ怪物を産んでしまった（右の画像参照）。**ミノタウロス**と名付けられた、この化け物が成長し、手に負えなくなると、ミノス王はダイダロスに迷宮を造らせ、閉じ込めることにした。そして、怪物に与える生け贄の子供をアテネに献上させていたが、アテネの王子**テーセウス**は、このしきたりを廃止するため、生け贄になりすまして迷宮に入り、怪物を退治した。



ミュロン『ミノタウロス』
紀元前5世紀

ダイダロスは迷宮からの脱出方法を王子に教えたかどで息子のイカロスと共に幽閉されることになるが、翼を作って脱出する。その後、ダイダロスは逃亡先のシチリア島で工人として名を馳せる一方、イカロスは父の注意を忘れて太陽に近づき過ぎたため、**蠟**で固めていた翼がもぎ取れ、海に落下したとされている。『イカロスの落下』（Musée Antoine Vivenel 所蔵）



¹⁰¹³ エヴァンスはクレタ島で**線文字 B**（**ミケーネ文字**）が刻まれた粘土版も同時に発見しており、後に、ギリシア・ミケーネ遺跡でも発見された。この文字は線文字 A よりもシンプルで、それを基に考案されたと解されている。1953年、イギリス人のマイケル・ヴェントリスが線文字 B の解読に成功し、それはギリシア語を記すための文字であることや、都市国家（ポリス）が成立する前のギリシアの様子が判明した。

2) ギリシア本土における文明（ミケーネ文明）の盛衰

① ヘラス文明（ヘラディック文明）

紀元前 2500 年頃、ギリシア本土でもヘラス文明（ヘラディック文明）が成立した。なお、「ヘラス」とは「ギリシア」という意味のギリシア語であり、ギリシア人は祖国を「ヘラス」と呼ぶ。これに対し、「ギリシア」という呼称はラテン語の「グラエキア」（Graecia）に由来する。

② ミケーネ文明（ミュケナイ文明）

前 1600 年頃、ヘラス文明は大きく開花し、ギリシア南部のミケーネ、ティリンズ、ピュロスに王国が建設された。特に、ミケーネでは巨大な獅子門や城塞を持つ王宮が建設されていたことがハインリヒ・シュリーマンの発掘調査（1876 年）によって分かっている。また、この時代には、ギリシア本土でも文字（線文字 B）が使用されるようになり、発見された文字資料を解読した結果（注 1013 参照）、王は農民より貢納を取り立てていたことが判明した（貢納王政の発達）。

なお、ギリシア本土で前 1600 年以降に発展した王朝文明はミケーネ文明（ミュケナイ文明）と呼ばれ、それ以前のヘラス文明（ヘラディック文明）と区別されている。

前 1400 年頃、ミケーネ王国を建てたアカイア人はクレタ島に建てられていた王国を攻略し、エーゲ海域で覇権を握った。また、黒海への進出を意図し、トロイアを征服する（310 頁の注 1012 参照）。

このように大きく発展したミケーネ文明であったが、前 13 世紀、宮殿はことごとく炎上し、崩壊した。その後、王宮が再建されることはなく、ミケーネ文明は消滅するが、文明が消え去った理由は分かっていない。バルカン半島北部から遅れて侵入してきた戦闘的な民族（ドーリア人）に征服されたとする説や、前 13 世紀から前 12 世紀にかけて東地中海に侵入してきた「海の民」の攻撃を受け、衰退したという説、また、内部抗争、気候変動ないし自然災害、飢饉等を理由として滅びたとする説が主張されている¹⁰¹⁵。



ミケーネの獅子門¹⁰¹⁴

3) 暗黒時代とポリスの建設

ミケーネ文明が崩壊した理由だけではなく、崩壊後、400 年間の状況は詳しく分かっておらず、ギリシアは暗黒時代に入る。なお、暗黒時代とは文字による記録や史料が少なく、実態が解明されていない時代を指し、古代ギリシアが滅亡したわけではない。むしろ、ドーリア人が鉄器を持ち込んだことによって青銅器時代から鉄器時代になり、生産性は向上したと推測される。また、政体は王政から貴族政に変わり、前 8 世紀までにはポリスと呼ばれる都市国家ないし共同体が各地で形成されるようになったことが分かっている¹⁰¹⁶。その数は 1000 を超え、それらが統一されることはなかった（前掲の注 1009 参照）。ポリスの形態は様々であったが、その多くでは市民が直接、政治や国防を担い、現代における官僚制度や軍隊のような組織は存在しなかったと考えられている¹⁰¹⁷。住民は市民と人格を否定された奴隷に分かれていた。平均的な市民は奴隷を 2~3 名、所有し、家事は彼らによって行われた。

ポリスの代表格であるアテネでは、前 5 世紀中頃から前 4 世紀にかけて直接民主制¹⁰¹⁸や学問・文化が発展し、古代ギリ

¹⁰¹⁴ 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Löwentor_Mykene.jpg 画像は著者により切り抜かれてある。

¹⁰¹⁵ See Karl-Wilhelm Welwei, Griechische Geschichte, Von den Anfängen bis zum Beginn des Hellenismus, Ferdinand Schöningh 2011, p. 39.

¹⁰¹⁶ Joseph Maran, Licht auf ein dunkles Jahrhundert, in https://www.uni-heidelberg.de/presse/ruca/ruca2_2002/maran.html

¹⁰¹⁷ Ibidem.

¹⁰¹⁸ 民主主義が発展したのは平民が力を付けたからに他ならないが、彼らは兵士となってペルシア戦争に参加し、勝利に貢献した。なお、アテネでは成人男子のみが政治に参加する資格を有し（直接民主主義）、女性、子供、奴隷には参政

リシアを象徴する存在になる (129 頁参照)。なお、この都市国家はアカイア人から分派したイオニア人によって建設されている。これに対し、ドーリア人は**スパルタ**を興し、独特な軍国体制と厳しい教育制度を築いて力を付けると、アテネと共にギリシア世界を掌握した。

4) 植民市開拓とアテネの繁栄、マケドニアによるギリシア世界の統一

前 750 年頃より、ギリシア人は人口増による土地不足を解消するため、また、地中海上の交易路を確保するため、イタリア半島南部やシチリア島に植民市を築き、ギリシア文化をもたらした。現ナポリ (下の地図では Napolis)、タラント (Taras)、シラクサ (Syracuse) 等にはギリシア神殿が建てられるようになり (319 頁の注 1031 参照)、後にラテン人 (ローマ人) との交流も生まれる。なお、古代ローマは前 753 年に発足した。

後にローマ帝国や東ローマ帝国の都となる**ビザンティウム** (Byzantium) は前 667 年頃、メガラと呼ばれるポリスの住民によって建設される。



ギリシアの植民市 (前 750～前 550 年) ¹⁰¹⁹

ギリシア人はフランス南部やイベリア半島東部にまで進出しており、交易の発展によって手工業が栄え、武器の調達が可能になると、市民は重装歩兵 (ホプリタイ) として国防を担うようになった。こうして発言力を強めていった彼らは統治者である貴族に地位の改善や参政権を要求するに至る。前 6 世紀、ギリシア 7 賢人の一人である**ソロン**は市民の要請を受入れ、貧富の差を解消するとともに、平民にも官職への道を開く改革を行った。その後、ソロンの親族の**ペイシストラトス**が僭主政を敷くが、彼の死後、**クレイステネス**によって民主政の基盤が築かれた。この政治原理は、前 5 世紀、「地上のゼウス」と賞賛された**ペリクレス**の治世下で発展し、後世、ヨーロッパ全体の基本的価値と目されるようになる (142 頁参照)。

ギリシア人がエーゲ海の東岸、つまり、小アジアに進出すると、**ペルシア帝国 (アケメネス朝)** と衝突し、その脅威に晒されるようになったが、前 500 年から半世紀に亘り続いた**ペルシア戦争** (411 頁参照) で勝利を収めると、民主主義や文化がさらに発展し、古代ギリシアは最盛期を迎える。特に、**デロス同盟**¹⁰²⁰を率いてペルシア軍を駆逐した**アテネ**は

権が与えられていなかった。民主主義を意味する“democracy”はギリシア語の demokratia を語源とするが、これは “demos” (人民) と “kratia” (権力) が組み合わさってできた語である。

¹⁰¹⁹ 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Greek_Colonization_Archaic_Period.svg

¹⁰²⁰ **デロス同盟**とは、前 478～前 477 年、ペルシア帝国の再襲来に備え、結成されたポリス間の連合体であり、アテネが主導権を握った。その名称は重要な組織がデロス島に設置されたことに由来するが、後にアテネに移され、ペリク

前述したペリクレスの下で大きく繁栄し、古代ギリシアを象徴する文化を生んだ。敵軍に破壊された**アクロポリス**も「地上のゼウス」の命により再建された（アテネの文化について、129 頁を参照されたい）。



レオ・フォン・クレツェ (Leo von Klenze) 『アクロポリスの再建とアレオパゴスの丘』(1846 年制作)

古代ギリシアの都市国家は**アクロポリス**と呼ばれる丘を防衛の拠点とし、守護神を祀る神殿を建設した。中でもアテネのアクロポリスが有名で、この丘に建てられた**パルテノン神殿**（上掲の絵画の右寄りの建物）はヨーロッパを代表する建造物の一つである。

当初、この神殿や他の建物は木造であったが、第3次ペルシア戦争でペルシア軍に破壊されると、戦後、石造で再建された。なお、上掲の絵画は19世紀中頃に描かれているが、紀元前5世紀に建てられたパルテノン神殿には青や赤の彩色が施されていたと考えられている¹⁰²¹。

15世紀中頃、ギリシア地方がオスマン帝国に支配されると、この神殿はイスラム教の礼拝堂に変わった。また、17世紀後半、オスマン帝国とヴェネツィア共和国との間で戦闘（451 頁参照）が発生したときは弾薬庫として使用された。火薬の爆発によって神殿は大きな損傷を受け、屋根は残っていないが、20世紀末頃より修復工事が行われている。



パルテノン神殿 (2006 年)

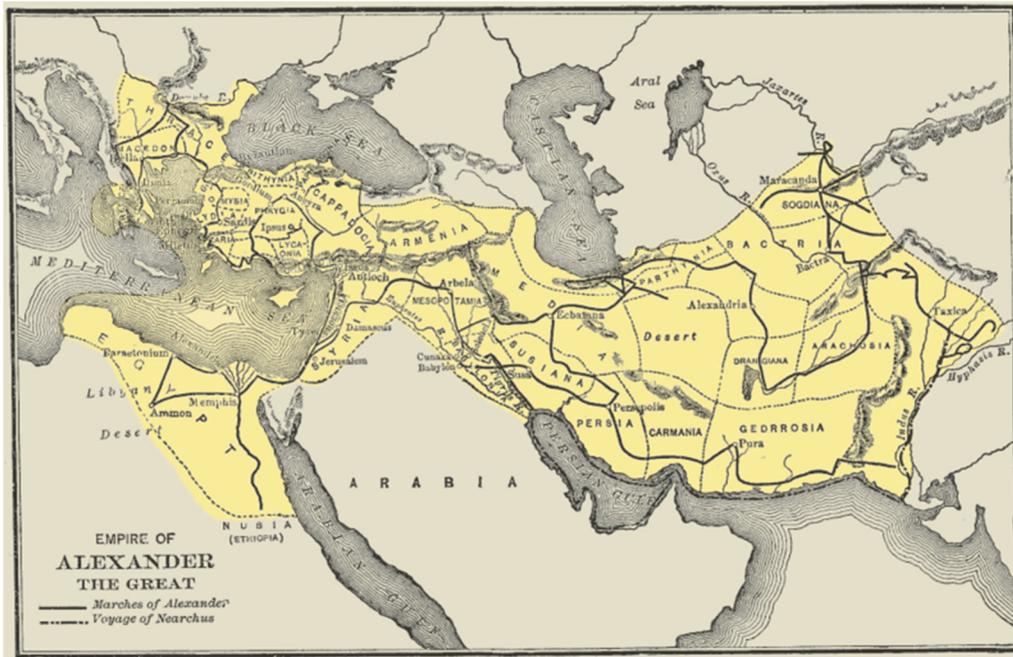
しかし、アテネの黄金期は長く続かなかった。前431年、その繁栄に脅威を抱いた**スパルタ**がアテネに攻撃をしかけると、ギリシア世界を二分する**ペロポネソス戦争**が勃発する。アテネはこの内戦に敗れ、ギリシア統一の夢を挫かれることになるが、衰退したのはアテネだけではなく、30年近く続いた戦争でギリシア世界全体が衰えていった。

レスの時代にはアテネ帝国へと変貌する。これに脅威を抱いたスパルタは他のポリスと共に**ペロポネソス同盟**を結成し、対抗した。

¹⁰²¹ Nikolas Zois, The Parthenon in Color: Shades of the Amazons, in <https://www.greece-is.com/the-parthenon-in-color-shades-of-the-amazons/> もっとも、円柱は白色だったと考えられている。

このような状況下、ギリシア北辺にあった**マケドニア王国**が勢力を増し、前 338 年、国王のフィリッポス 2 世はギリシア本土を攻略した。翌年、彼はスパルタを除く全ポリスと**コリントス同盟**を結成し、その盟主になる。こうしてギリシア統一が実現し、フィリッポス 2 世はペルシア討伐に乗り出すが、前 366 年、それを実施する前に護衛に暗殺された。

フィリッポス 2 世の野望は息子の**アレクサンドロス大王 (アレクサンドロス 3 世)** に引き継がれることになり、前 330 年、大王はペルシア討伐に成功した。これを機に小アジアやメソポタミア地方はギリシア化されていく。20 代前半の若き王はさらに東へと兵を進め、インダス川流域にまで及ぶ広大な「アレクサンドロス帝国」を築いたが (下図参照)、帝国は 10 年も絶たないうちに幕を下ろす。前 323 年、大王が後継者を指定することなく突然亡くなると、部下の間で争いが起き、巨大な帝国は分裂した (412 頁参照)。



George Willis Botsford (アレクサンドロス大王が築いた帝国の領域)

帝国領の南はエジプトにまで達しており、ギリシア化される。他方、北はバルカン半島北部やコーカサス山脈に達していない。

◎ マケドニア王国 (古代マケドニア 前 640 年頃～前 168 年)

マケドニア王国 (古代マケドニア王国とも呼ばれる) は古代ギリシアの北辺にあった王国で、ギリシア人または彼らの影響を強く受けていた非ギリシア人によって建てられた。ポリスの一つではなく、厳密には、古代ギリシアとは異なるが、現代のギリシア人はマケドニアを自国の歴史の一部として捉えている。

なお、マケドニア王国は、冷戦終結後の 1991 年、旧ユーゴスラビアから独立した**マケドニア共和国**とは異なる。後者は古代ギリシアとは関わりのない南スラブ人が建てた国であるため、その独立後、ギリシアは「マケドニア」という国号の使用を「歴史の盗用」として批判するようになった。25 年近く続いた両国の争い収めるため、2019 年 2 月、国号に「北」が付き、**北マケドニア共和国**になる (92 頁参照)。

マケドニア王国の領土は時代によって変わったが、その中心地は常にギリシア北方の平原にあった。記録に残っている最初の王はペルディッカス 1 世で、彼は前 640 年頃、マケドニア平原を占拠した。

前 500 年に勃発したペルシア戦争 (411 頁参照) で、マケドニアはギリシアではなく、ペルシア (アケメネス朝) の側に立っていたが、アルケラオス王は方針を変更し、ギリシアの側についた。彼の下でマケドニアは発展するが、前 399 年、暗殺されると、内戦状態に陥る。前 4 世紀中頃、国内を平定したフィリッポス 2 世はカイロネアの戦い (前 338 年) でアテネ・テーベ同盟軍を破り、ギリシア本土の制圧にも成功した。

フィリッポス 2 世の子であるアレクサンドロス大王は宿敵ペルシア (アケメネス朝) を倒すと、インダス川流域まで遠征し、大帝国を築いた。しかし、前 323 年、大王が 33 歳の若さで急死すると、後継者間で抗争が繰り返され、アレクサンドロス帝国は分裂する (412 頁参照)。

前 168 年、王国は古代ローマ (共和政) との戦いに敗れて滅亡し、約 20 年後、その領土にはローマの属州が建設された (注 1026 参照)。

◎ アレクサンドロス大王 (Alexandros III, Alexander the Great)



マケドニア王国の**アレクサンドロス 3 世** (アレクサンダー大王、在位前 336～前 323 年) はギリシア、小アジア、エジプトを含むオリエント世界だけではなく、イラン、アフガニスタン、パキスタンにもまたがる大帝国を築き、アジア西部やアフリカ北部にギリシア文化を広めた。

3 世はマケドニア王であるフィリッポス 2 世と王妃オリュンピアスの間に生まれているが、両親の仲は悪く、母親からはギリシア神話の最高神ゼウスが父親だと言いつけられた。他方、父親のフィリッポス 2 世は教育熱心で、アテネから哲学者の**アリストテレス**を招き、指導させた (130 頁参照)。大王は 16 歳になるまで、この偉大な哲学者の教えを受けている。フィリッポス 2 世は息子のために学校も建てているが、アレクサンドロスは国外追放となった母親に連れられ、父親の元を離れて過ごす時期もあった。

前 336 年、父親が暗殺されると、アレクサンドロスは 20 歳で即位した。父の遺志を継いでペルシア討伐に乗り出すと、前 333 年、イツソスの戦いでペルシア軍を撃破する。敗走した敵将のダレイオス 3 世はユーフラテス川以西の領土の割譲と巨額の賠償金の支払いを内容とする講和を持ちかけるが、大王は受け入れなかった。同年 10 月、ガウガメラの戦いでダレイオス 3 世が率いるペルシア軍を撃退すると、インド方面に向け兵を進めた。

前 326 年、大王はインダス川流域を制したが、部下が反対したため、インド中央部に攻め入ることはできなかった。前 323 年、メソポタミア地方のバビロン (336 頁の地図参照) に戻ると、その地を新都に指定した。大王はさらなる遠征を計画するも、熱病にかかり、この新都で 32 年の人生を終えることになる。

5) ヘレニズム時代 (前 336 年～前 30 年)

前 323 年、アレクサンドロス大王が病に倒れると、後継者争いが起き、帝国は分裂した (412 頁参照)。大部分の地域には大王の家臣の**セレウコス**が王国を建設し、この国は**セレウコス朝シリア**と呼ばれるようになる。他方、エジプトには将軍の**プトレマイオス**によって**プトレマイオス朝エジプト**が建てられた¹⁰²²。何れもギリシア人が治める国であり、ギリシア語やギリシア文化が広まった (190 頁参照)。ギリシア神話はエジプトやシリアの信仰に大きな影響を与えている。このギリシア化を**ヘレニズム** (Hellenism) と言うが、古代ギリシア人は自らを「ヘレネス」 (Hellenes) と、また、自分達が住む地域を「ヘラス」 (Hellas) と呼んでおり¹⁰²³、これらの単語より、後世、「ヘレニズム」という概念が生まれた。

その考案者であるドロイセン¹⁰²⁴は、アレクサンドロス 3 世が即位した前 336 年からプトレマイオス朝が滅びた前 30 年までの約 300 年をヘレニズム時代と呼んだ。この時代、アテネやスパルタ等の都市国家はマケドニアに支配され、衰退する。古代ギリシアの特徴である民主主義も影を潜め、王政が支配的になる一方で、ポリスや民族の枠にとらわれない**世界市民主義** (コスモポリタニズム、317 頁参照) が出現した。また、古代ギリシアの学門・芸術は小アジア、メソポタミア、エジプトに広まり¹⁰²⁵、さらなる発展を遂げた。ミロのヴィーナス、ラオコーン、ペルガモンの大祭壇等、古代ギリシアを象徴する彫刻や祭壇等はヘレニズム時代に小アジアで制作されたものである。それらは伝統的なギリシア彫刻と比べると、繊細かつ情熱的で、複合的な要素を持っている (412 頁参照)。これはオリエント (特に古代エジプトやバビロニア) の文化と融合したからであり、オリエントの影響を受けたギリシア文化を**ヘレニズム文化**と呼ぶ。

¹⁰²² アレクサンドロス大王の祖国マケドニアには古参の武将アンディゴノスが王国 (**アンディゴス朝マケドニア**) を建設し、アテネ、スパルタ等のポリスも支配した。しかし、前 215 年に始まったマケドニア戦争 (317 頁参照) で古代ローマに敗れ、前 168 年、滅亡した。前 148 年、その領土はローマの属州となる。

¹⁰²³ ギリシアの公式名称はギリシア文字では Ελληνική Δημοκρατία、ローマ字 (英語) では Hellenic Republic と記し、古代ギリシア時代に同じく、「ヘレン」 (Hellen) に派生する語を用いているが、「ヘレン」とはギリシア神話に出てくる英雄で、ギリシア人の祖とされている。なお、「ギリシア」はラテン語の「グラエキア」 (Graecia) に由来する。

¹⁰²⁴ ヨハン グスタフ・ドロイセン (Johann Gustav Droysen 1808～1884 年) はドイツ (プロイセン) の歴史家である。

¹⁰²⁵ アテネは学門の中心地になるが、後にエジプトの**アレクサンドリア**にその地位を奪われることになる。ナイル川の河口に位置する、この都市は、前 331 年、アレクサンドロス大王によって建設された。大王が自らの名を付けた都市の中で最も繁栄し、ヘレニズム文化・学門の中心地になる。とりわけ、「**ムセイオン**」と呼ばれる博物館や図書館が建設されたことで知られている。この点について、モスタファ＝エル＝アバディ (松本慎二訳) 『古代アレクサンドリア図書館 よみがえる知の宝庫』中公新書 (1991 年) を参照されたい。



ペルガモンの大祭壇の一部



ラオコーン

前 215 年、マケドニア（アンディゴス朝マケドニア）が古代ローマに攻撃をしかけると、3 次に亘る**マケドニア戦争**が始まった。当時、ローマはカルタゴと交戦状態にあり（第 2 次ポエニ戦争、24 頁参照）、マケドニアはカルタゴと同盟を組み、ローマと対戦した。アレクサンドロス大王の祖国は後にセレウコス朝シリアとも同盟を結び¹⁰²⁶、戦ったが、前 168 年、ローマに滅ぼされた。勢いに乗ったローマはギリシアの都市国家（アカイア同盟）を倒し、前 148 年、旧マケドニアと共にローマの属州とする。こうして、ギリシア地方はローマの支配下に入るが、文化的にはギリシアがローマを支配し、信仰を含む様々な分野でローマに大きな影響を与えた（130 頁参照）。とりわけ、ギリシア語の修得はローマ人の教養として重視された。

前 63 年、セレウコス朝は古代ローマに滅ぼされた。プトレマイオス朝も、前 30 年にはローマに倒され（注 1036 参照）、ヘレニズム時代は幕を下ろす。もっとも、現トルコ、中東、イラン等のギリシア化はイスラム勢力が進出する 7 世紀まで続いた。パレスチナ地方に住んでいたユダヤ人もギリシア語を母語としたため、1～2 世紀、『新約聖書』（264 頁参照）はギリシア語で編纂されている。

◎ コスモポリタニズム（世界市民主義）と禁欲主義

都市国家がマケドニアに征服される以前、ギリシア人は国家への帰属意識が強かった。このような状況を捉え、アリストテレスは人間を「ポリスの動物」と呼んだが、アレクサンドロス大王がインダス川西岸にまで達する広大な世界帝国を築く一方、ポリスが衰退すると、人々は自らを「**世界市民**」（コスモポリテース）と捉えるようになった。アリストテレスの孫弟子にあたるディオゲネスは出身地を訪ねられると、特定の国を挙げず、「世界市民」（kosmopolitês）と答えた¹⁰²⁷とされている。

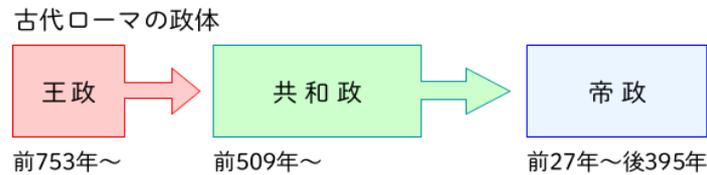
ヘレニズム時代、アテネは哲学の中心地として「世界各地」より人々が訪れた。すでに前 4～3 世紀、プラトンは禁欲を賢者になるための「徳の訓練」としたが、前 3 世紀にはゼノンが理性によって感情を制し、不動心に達する**禁欲主義**を説いた。彼の学派は**ストア派**と呼ばれ、「ストイック」の語源となる。これは後にキリスト教に影響を及ぼすが、ヘレニズム期には、感覚に基づく穏やかな快楽を肯定する**快楽主義**（**エピクロス派**）も発展した。

¹⁰²⁶ マケドニアとセレウコス朝シリアの同盟結成はギリシアの脅威となり、諸ポリスが古代ローマに支援を要請すると、前 200 年、**第 2 次マケドニア戦争**が勃発した。前 196 年、戦いを制したローマはポリスに独立を保障し、撤退する。前 171 年、マケドニアが攻撃をしかけ、**第 3 次戦争**が勃発するが、前 168 年、マケドニアは戦いに敗れ、滅亡した。なお、この戦争中、ギリシアの都市国家はローマと同盟関係にあったが、戦後、ローマがギリシア支配に乗り出すと、両者は対決するようになる。諸ポリス（アカイア同盟）はコリントを中心に戦ったが、前 146 年、敗退し、その属州となって支配された。

¹⁰²⁷ Diogenes Laërtius, The Lives of Eminent Philosophers, Book VI, passage 63.

3. 古代ローマによるギリシア文化の継承とヨーロッパ支配

ヨーロッパ文化の源泉（古典）を生み出した古代ギリシアは、イタリア半島やイベリア半島を含む地中海世界や黒海に進出し、多くの植民市を建設したが（313 頁参照）、紀元前 4 世紀には弱体化し、前 148 年、古代ローマの属州となる。しかし、ギリシア文化は生き続け、ローマ人に影響を与えた。彼らがヨーロッパ各地に領土を広げると、それを通じ、ギリシア文化も広まっていく（130 頁参照）。



欧州の地理的・文化的一体性は古代ローマによって確立されたが、その長い歴史は、前 753 年、イタリア半島中西部（現在のローマ市）に王国が建設されたことで始まった。発足から 250 年が経過した頃、政体は**王政**から**共和政**に変わる。貴族と平民が共に国政を担った共和政期、ローマは半島全域を支配するようになった。また、カルタゴを倒して地中海の覇権を握ると（24 頁参照）、イベリア半島、ギリシアを含むバルカン半島、小アジア、中東、アフリカ北部に進出するが、これらの地域の植民地支配と奴隷の搾取を通じ、ローマは帝国へと変貌した。なお、第 1 次ポエニ戦争でカルタゴ軍を破り、獲得したシチリア島が最初の属州となる。これは北イタリアを属州とするよりも早い（320 頁参照）。

前 27 年に始まった**帝政**期、ローマは植民地をさらに獲得し、版図を広げたが、現在のロシア領の 4 分の 1 程度であった。それでも領土は広大であり、統治は容易ではなかったため、また、ゲルマン人の侵入に対処するため、分割して複数の皇帝が治めるようになる。その後、一時的に一人の皇帝が全域を治めることもあったが、395 年、最終的に東西分割が確定する。なお、内乱や対立によって**分裂**したのではない。ローマ人も分裂とは捉えておらず、「東ローマ」や「西ローマ」という呼称は後世、作られたものである。

◎ 古代ローマとローマ帝国

王政期、共和政期、帝政期のローマをまとめて「**古代ローマ**」（Ancient Rome）と呼ぶ。前 27 年に帝政が開始されると、一般に「ローマ帝国」と呼ばれている国が出現するが、ローマ人は“Senātus Populusque Rōmānus”（**SPQO**）という国号を使用しており、これは「ローマの元老院と人民」という意である。つまり、「帝国」という語は使用されていない。むしろ、共和政を示す国号である。実際に、帝政初期の頃、皇帝は人民の一人であり、元老院と共同で国を治めていた。

なお、紀元前 1 世紀前半、キケロが政治家として活躍していた時代には“**Imperium Romanum**”という呼称が広く使用されていた。これは「ローマ帝国」と訳すこともできるが、そのような意ではなく、「ローマの支配権」ないし「ローマの支配権が及ぶ領域」を示す語である。また、当時、帝政はまだ始まっていなかった。

帝国とは複数の国や民族を従える国であり、君主政ではなく、共和政が採用されている場合もある（366 頁参照）。初代皇帝はまだ出現していないが、ローマ帝国はすでに共和政の中期（紀元前 3 世紀前半）に成立していた。

◎ イエスの誕生とキリスト教の創始

帝政初期の前 7～前 4 年、ユダヤ属州でイエスが生まれ、歴史やヨーロッパの姿を大きく変えることになる。当時、帝国内ではギリシア神話やその影響を受けたローマ神話が広まっていたが、キリスト教は都市部を中心に浸透していく。一般に、ローマは異教にも寛容であったが、3 世紀中頃、皇帝崇拝が強化されると、それに従わないキリスト教徒は過酷な迫害を受けた。弾圧にも拘わらず、多くの者に支持されたキリスト教は、313 年、帝国から公認され、ヨーロッパの宗教としての性質を帯びるようになる。380 年には帝国の国教に指定されるまでになったが、15 年後、400 年に亘る帝国の歴史は幕を下ろした。もっとも、ローマで発展した宗教は現在でも欧州全体に甚大な影響を与え続けている（109 頁および 148 頁以下参照）。

1) 王政

伝説によると、王国は、前 753 年、古代ギリシアから逃れてきた英雄の末裔によって建設された¹⁰²⁸。「ローマ」という名称は建国者であるロムルスに由来する。なお、彼には双子の弟がいた。出生後、二人は権力者である大叔父によって川に流されるが、狼の乳を飲み、キツツキが運ぶものを食べ、生きながらえた。後に王家に戻されるが、成長すると新しい国の建設をめぐる争うようになり、兄は弟を殺害したとされている¹⁰²⁹。

兄のロムルスには息子がいたが、元老院¹⁰³⁰は彼ではなく、ローマに縁のない部族(サビニ人)から次代の王を選んだ。前 616 年、ローマはエトルリア人に占領され、彼らに王位を奪われたが¹⁰³¹、北はケルト人、南はギリシア人の侵入によってエトルリアが衰えると、前 509 年、ローマは王を追放した。

2) 共和政

その後、権力を握ったのは貴族(パトリキ)であった。彼らは執政官(コンスル)や元老院の議員となって国を動かす。また、平民(プレプス)が参加する兵員会も統制した。しかし、平民は重装部兵となって国防や軍備を担い、発言力を高めると、前 367 年、貴族と実質的に同じ身分を獲得するに至った(リキニウス法)。また、前 287 年、彼らが参加する平民会は元老院の承認を得ることなく法を制定することが可能になる(ホルテンシウス法)。

共和政期、ローマは小さな都市国家から世界帝国へと変わっていった。前 338 年、イタリア半島中西部を(219 頁参照)、また前 270 年頃、半島全域の制圧に成功すると、海外への進出が始まる。宿敵となったのはシチリア島の西部¹⁰³²を支配していたフェニキア人であったが、3 次に亘る**ポエニ戦争**で、この海洋民族を撃退すると、地中海における覇権を手に入れた(24 頁参照)。そして、ヒスパニア、アフリカへと版図を広げていった。東方では、マケドニアやギリシアを屈服させ、属州とした。さらに、小アジアに進出し、奴隷や物資の供給源とする。

その後、新興の騎士身分(エクイテス)が中心になって商業が発展すると、植民地支配と奴隷制を柱とする帝国の特徴が現われるようになる。富を蓄えた上層民は下層民を抱え込み、**クリエンテラ**と呼ばれる主従関係を築いた。これによって一種の政治・社会組織が形成され、クリエンテラ間の対立が生じる。

この抗争で頭角を現したのが**ユリウス・カエサル**(英語名はジュリウス・シーザー)である。彼は巧みな話術や人脈を生かし、前 61 年、ヒスパニア(現在のスペイン)総督になる。翌年にはローマに戻り、当時の第一人者である**ポンペイウス**、資産家の**クラッスス**と**三頭政治**を行った。また、前 58 年から 7 年間、**ガリア**に遠征し、その全域を平定した。

¹⁰²⁸ 古代ギリシア時代、エーゲ海北東部にはトロイア王国が建てられていたが、ギリシアとの戦争に敗れ消滅した(310 頁の注 1012 照)。王国の英雄アエネアス(アイネイアース)は西方に逃れ、イタリア半島中部に辿り着くと、その地の王女と結婚し、新しい都市を築いた。二人の息子は**アルバ・ロンガ**と呼ばれる王国(都市国家)を建設しており、後にローマを興したロムルスも、この王家の出身である。See Andreas Bendlin, Romulus, Der Neue Pauly, Enzyklopädie der Antike, Band 10, Metzler 2001, pp. 1130–1133, 1130.

なお、アエネアスはトロイア王イーロスの孫と女神アフロディーテ(99 頁参照)の間に生まれたとされている。そのため、アフロディーテは「全ローマ人の母」にあたるが、ローマ神話上、この女神はヴィーナス(ヴェヌス)と呼ばれており(131 頁参照)、ヴィーナスが民族の母として崇拝された。特に、カエサルの実家であるユリウス家はアエネアスの息子を祖とするため、ヴィーナスは一族の太祖でもあり、紀元前 1 世紀半ば、カエサルは首都ローマに女神を祀る神殿(Temple of Venus Genetrix)を建立している。

¹⁰²⁹ ロムルスの父親は軍神のマルス(マーズ)で、未婚の母親は彼に襲われ、ロムルスを授かったとされている。See Titus Livy, translated by Aubrey de Séincourt, The Early History of Rome, Books I–V of The History of Rome from Its Foundation, Penguin Classics 2002, p. 9.

¹⁰³⁰ 元老院という機関名は貴族(氏族や部族)の長老がメンバーであったことに由来する。

¹⁰³¹ エトルリア人が半島中部で勢力を誇っていた当時、ギリシア人は半島南部に多数の植民市を築いていた。彼らが入植した地域は「**マグナ・グラエキア**」(Magna Graecia「大ギリシア」という意)と呼ばれ、交易で繁栄したが(313 頁参照)、前 3 世紀前半、ローマに支配される。なお、スパルタの植民市であったタレントゥム(現ターラント)は、前 280 年、マケドニアのピュロス王の支援を受け、ローマ軍を倒すが、王が引き揚げると弱体化し、前 272 年、敗退した。他の植民市はすでにローマに服従していたため、これによってローマはイタリア半島制覇を達成するが、半島南部でギリシア文化に触れ、その影響を強く受けるようになる。

¹⁰³² なお、シラクサを含む島の東部にはギリシア人の植民市が築かれていたが、ポエニ戦争期、ローマは島全体を支配するようになった。

◎ ガリア

古代ローマはケルト人(ガリア人)の居住地をガリアと呼んだ。右の地図中の①～④の地域やイタリア北部がそれにあたり、当初、イタリア本土とはルビコン川とアルノ川を直線で結んだ線で分けられていた(次頁の地図参照)。ローマは、前3世紀下旬、第2次ポエニ戦争の際、この境を越えて遠征し、アルプス山脈より南の地域を攻略した。前203年、この地域は属州ガリア・キサルピナになるが、帝政初期(前43年頃)にはイタリア本土に編入され、属州とはみなされなくなった。



- ① ガリア・ナルボネンシス
 - ② ガリア・アクィタニア
 - ③ ガリア・ルグドゥネンシス
 - ④ ガリア・ベルギカ
- ローマの属州

前2世紀後半、ローマはアルプス山脈を越えて進出し、南仏(現プロヴァンス)を制すと、前121年、属州ガリア・ナルボネンシスを建設した(65頁の注200参照)。前1世紀中頃、カエサルはこの属州の総督となる。前58年、現スイス地方からケルト人(ヘルウェティイ族)が侵入してきたため、兵を挙げたカエサルは、ガリア北部の制圧にも乗り出す。遠征は7年にも及んだが、前51年、ウェルキンゲトリクス¹⁰³³に率いられたケルト軍を倒すと、ガリア全域を支配下に置いた。

前25年頃、初代皇帝アウグストゥスはガリアに新たに三つの属州を建設した。円形劇場や水道橋等、古代ローマを象徴する建造物が各地に出現し、特に南部の諸都市でローマ化が進んだ。ローマ化されたガリアないしケルト人の生活・思想や言語等をガロ=ローマ文化と呼ぶ¹⁰³⁴。

前53年、クラッススの戦死によって三頭体制が崩れると、残された2名は対立するようになった。こうした中、元老院はイタリア半島に匹敵するほど広大なガリアを制圧したカエサルに危機感を覚えるようになり、軍隊を解散して帰国するよう命じた。ポンペイウスがこの命令を支持すると、カエサルとの対立は決定的になる。宿敵を倒すため、カエサルが軍を解散することなく、ルビコン川(ルビコーネ Rubicone)を渡ってローマに入ると¹⁰³⁵、ポンペイウスはギリシアに逃れた。カエサルが後を追うと、ポンペイウスは小アジアを通り、エジプト(プトレマイオス朝、412頁参照)に避難したため、カエサルはエジプトへ遠征する。彼はそこでクレオパトラ7世と結ばれ、女王をエジプトの内乱から救った¹⁰³⁶。



前47年、カエサルは、ポントス、アフリカ、ヒスパニアへと転戦し、ポンペイウス派の残党を撃滅した。翌年、ローマへ帰還すると、盛大な凱旋式を挙げている。

¹⁰³³ ウェルキンゲトリクス (Vercingétorix 前72～前46年) はアルヴェルニ族の出身で、ケルトの諸部族をまとめた父親の跡を継ぎ、20歳で首長になった。諸部族を統率して抗戦したが、前51年、アレシア(現ディジョン近郊)の戦いで敗れ、捕虜になると、前46年、カエサルによって処刑された。フランス人の中で彼は最初の英雄と目されており、コミックの『アステリックス』は彼を題材にしている。See René van Royen and Sunnya van der Vegt, Asterix, Die ganze Wahrheit (Asterix en de waarheid, 1997), C. H. Beck 1998, p. 131.

¹⁰³⁴ Helga Botermann, Wie aus Galliern Römer wurden, Leben im Römischen Reich, Klett-Cotta 2005.

¹⁰³⁵ 当時、ローマとガリアはルビコン川(ルビコーネ川)とアルノ川(Arno)を結んだ線を境として分けられており、ローマの軍隊であっても、この川を渡ってローマに入るとは禁じられていたが、カエサルは、ポンペイウスを倒すため、この決まりを守らずにローマに進撃した。この故事になぞらえ、重大な決断や行動をすることを「ルビコン川を渡る」と言う。なお、後世、ルビコン川と呼ばれる川はなくなり、カエサルはどの川を渡ったのが争われるようになった。そのため、1933年、ムッソリーニによってフィウミチーノ川(Fiumicino)がルビコン川として指定されることになった。歴史上、大河となるが、全長約30km、幅は広いところでも5mの小川である。

¹⁰³⁶ なお、カエサルの後継者となるオクタウィアヌスとの戦い(アクティウムの海戦)に敗れ、前30年、クレオパトラが自殺すると、プトレマイオス朝は滅び、エジプトはローマに併合された。

前 46 年、カエサルは共和政の伝統に反して 10 年任期の独裁官に就き、前 44 年には、それを終身にした。彼は立法活動、救貧事業、植民市建設、暦法改革 (270 頁参照) 等に従事し、大きな功績を残すが、権力の集中は共和政の存続を脅かすことになる。そのため、前 44 年、共和派のマルクス・ユニウス・ブルーティス (ブルーティス) やカッシウス等によって暗殺された。

3) 帝政 (ローマ帝国)

その後、三頭政治が復活するが、カエサルの甥のオクタウィアヌスが権力を独占した。こうして元首政が始まったが、数年後、彼が共和政への復帰を宣言すると、元老院は歓喜し、前 27 年、彼に「尊厳なる者」を意味する「アウグストゥス」の称号を与えた。これによってオクタウィアヌスは実質的にローマ帝国の初代皇帝となり、**アウグストゥス帝**と呼ばれるようになる。なお、8 月を指す英単語の August は、この初代皇帝の名に由来する¹⁰³⁷。彼はクレオパトラ 7 世が女王の座にあったエジプトを始めとするオリエント、さらにはブリタニア (現在のイングランド) やゲルマニア (現ドイツ) 南西部にまで勢力を拡大した。その後、5 人の皇帝が統治した約 200 年間 (96~180 年) は異民族の侵入を受けず、帝国各地の都市が繁栄したため、「**パックス・ロマーナ**」、つまり、「ローマの平和」と呼ばれている。

◎ 五賢帝

帝政初期の 96~180 年に相次いで皇帝となった①ネルウァ、②トラヤヌス、③ハドリアヌス (279 頁参照)、④アントニヌス・ピウス、⑤マルクス・アウレリウスの**五賢帝**は、最後のマルクス・アウレリウスを除くと世襲制をとらず、元老院議員の中から有能な人物を後継者に選び、自らの養子とした。こうして元老院との協力関係も生まれ、統治は安定した。

五賢帝の時代は「**パクス・ロマーナ**」(Pax Romana)、つまり、「ローマによる平和」の後期にあたり、ローマは外敵がなかったこともあり、概ね平和と繁栄を享受することができた。また、古典文化が各地に広がり、帝国内のローマ化、都市化が進んだ。この平和はキリスト教の普及にも貢献した。

トラヤヌス帝の在位中、帝国の版図は最大になったが (566 頁の地図を参照されたい)、階層分化、財政負担の増大等、衰退の兆しはすでに現れていた。

帝政に移行した後も元老院や民会は存続した。また、皇帝はローマ市民によって選ばれ、市民を統治するという共和政の理念に合致する政体が維持された。つまり、実質的には共和政であった。アウグストゥス帝は自らを「プリンケプス」、つまり、「市民の中の第一人者」と呼んだが、彼の考えに基づく元首政を「プリンキパトゥス」と言う。これに対し、カエサルは権力を実質的に独占し、元老院や民会の形骸化を進めていたため、共和政の存続を望む者によって暗殺された。

なお、皇帝が全ての権力を掌握し、専制を敷くようになったのは帝政の後期であり、これは「3 世紀の危機」(322 頁参照) を乗り越えるための手段であった。**ディオクレティアヌス帝** (在位 284~305 年、234 頁参照) は帝国を再建するため、「**ドミヌス**」、つまり、「主」である皇帝が実権を握る制度を導入しており、この専制君主制を「**ドミナートゥス**」と呼ぶ。

帝政期のローマは地中海世界の全域を支配した。ヨーロッパ大陸ではライン川とドナウ川が北の国境とみなされ、ライン川沿いには、1 世紀末頃、二つの属州が建設された (74 頁参照)。同様に、ドナウ川沿いにも属州が築かれたが、2 世紀初め、トラヤヌス帝はこの川を越えて遠征し、現ルーマニア地方を制すと、属州ダキアとして支配した (566 頁参照)。

なお、ローマは、43 年、グレートブリテン島南部の制圧に成功し、属州ブリタニアを設けた。五賢帝の一人であるアントニヌス・ピウス帝 (在位 138~161 年) は、142 年、島の北部に長城を築き、異民族 (カレドニア人¹⁰³⁸) の侵入に備えており、これが帝国の北限となる (499 頁参照)。

¹⁰³⁷ 彼は 9 月に生まれているが、8 月に皇帝に即位したため、8 月に自らの名を付けた。なお、7 月にあたる July はユリウス・カエサルに由来する。

¹⁰³⁸ 古代ローマ人は現スコットランド地方を**カレドニア**と呼び、ブリタニアと区別した。本文中で述べたように、ローマはカレドニアを支配することができず、この地域に住んでいたカレドニア人は彼らの敵となる。ローマが衰退すると、アイルランド島北部にいたスコット人が移住してきて、11 世紀頃、スコットランド王国を建てた。シェークスピアの戯曲『マクベス』は、11 世紀中頃の国王マクベス (在位 1040~1057 年) を主人公にした作品である。

◎ テトラルキア (4分統治)

広大な領土の統治は容易でなかったため、395年、ローマは東西に2分されるが、すでにその100年前より4分割して治められるようになっていた。286年、ディオクレティアヌス帝は重要性の高い帝国東部の統治に専念するため、西部を担当する共同皇帝を置いた(なお、ここでの東部と西部は後の東西ローマの領域と一致しているわけではない)。また、それぞれに副帝を一人ずつ任命し、4人の正副皇帝で帝国領を分割して治めており、この4分統治をテトラルキアと呼ぶ。「尊厳なる者」を意味し、初代皇帝の呼び名にもなった「アウグストゥス」の称号は東方の正帝に用いられた。



ディオクレティアヌス帝の治世期の四分統治 (293~305年)

西方		東方	
正帝の本拠地	副帝の本拠地	正帝の本拠地	副帝の本拠地
メディオラーヌム (現イタリア・ミラノ)	アウグスタ・トレウェロルム (現ドイツ・トリーア)	ニコメディア (現トルコ・イズミット)	シルミウム (現セルビア・スレムスカ)

※ ローマは帝都ではなくなる。他方、コンスタンティノープルが新しい都になるのは330年以降である。

4) ローマ帝国の衰退と東西分割 (分裂)

180年、五賢帝の時代が終わると、帝国の共同体としての性質は完全に失われ、階層の分離が顕著になった。その一方で、外征が限界に達し、奴隷の枯渇や市場の縮小という状況が生じる。また、皇帝を頂点とする特権層による搾取体質は健全な経済発展を阻害し、都市の中産層は没落した。さらに、帝国内の権力闘争、ゲルマン人やササン朝ペルシアの侵入(260年、ウォレリアヌス帝は小アジアでペルシアとの戦いに敗れ、捕虜になった)、疫病の発生もあって、3世紀に入るとローマの衰運は決定的になる。多数の軍人皇帝が相次いで即位し、領土が三つに分裂した状態¹⁰³⁹は「3世紀の危機」と呼ばれている。

前出のディオクレティアヌス帝は専制君主制(ドミナートゥス)や四分統治(テトラルキア)を導入し、帝国の再建を図った。自らを神格化し、皇帝崇拜¹⁰⁴⁰を強化した彼は、それに従わなかったキリスト教徒を迫害した最後の皇帝として

¹⁰³⁹ 帝国はローマ帝国、ガリア帝国(260~274年)、パルミラ帝国(270~273年)の三つに分裂した。

¹⁰⁴⁰ 帝国の権威を回復するため、3世紀中頃、ローマは市民にローマの神々への祭儀や皇帝崇拜を義務づけている。

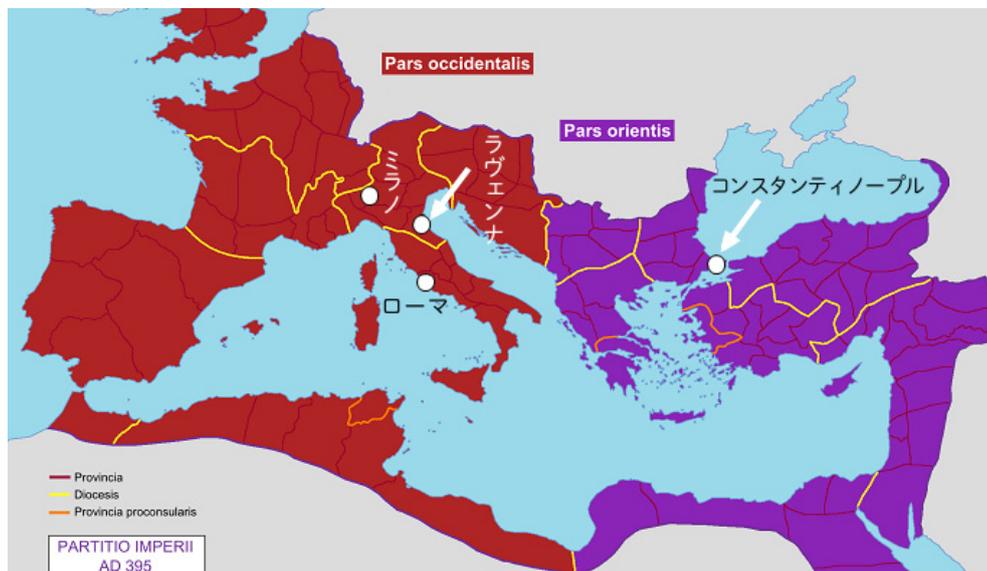
も知られており、その退位から 8 年後 (313 年)、**コンスタンティヌス 1 世** (在位 306~337 年) によってキリスト教の信仰が許されるようになった (235 頁参照)。

当時、コンスタンティヌス 1 世は西の正帝であり、キリスト教を公認する**ミラノ勅令**は、東の正帝リキニウス (在位 308~324 年) と共同で出されている (165 頁の注 479 参照)。しかし、リキニウスがキリスト教の弾圧を再開すると、彼を処刑し、324 年、単独の皇帝になった。また、その頃、ギリシアの旧植民市**ビザンティオン**の再建に着手すると、330 年、ヨーロッパとアジアの接点に位置するこの都市を新しい都に指定し、宗教面に続き (キリスト教の公認)、帝政上の大転換をもたらした¹⁰⁴¹。この都市は彼によって「新ローマ」(Nova Roma) と名付けられたが、定着せず、彼の死後、その名にちなんだ**コンスタンティノープル**が正式な名称となる。

皇帝が遷都を決定したのは、コンスタンティノープルはアジア大陸や黒海に面し、交易上の利点があったためであるが、こうして帝国の比重はイタリア半島からバルカン半島へ、しかも、その東端に移っていく。なお、337 年にコンスタンティヌス帝が亡くなると、後継者争いが起き、帝国は分裂した。後に東西で皇帝が擁立され、分割統治が復活する。

379 年、属州ヒスパニア (スペイン、483 頁参照) 出身の**テオドシウス**が東方の皇帝として即位すると、帝国は最終章を迎えることになる。383 年、彼は長男のアルカディウスを東方の共同皇帝に指名したが、同年、西方で内戦が起きると、それに乗じて西方でも権力を握った。彼は 391 年まで、メディオラーヌム (現ミラノ) に滞在し、西方皇帝**ワレンティニアヌス 2 世**の後見役を務めている。翌年、2 世が死去し、元老院議員の**エウゲニウス**が後任に選ばれると、次の年 (393 年)、**テオドシウス**帝は若干 8 歳の次男**ホノリウス**を西方の皇帝に推挙し、兵を挙げた。そして、394 年秋、内戦を制すと、息子の後見人となり、西ローマでも権勢を振った。

こうして、テオドシウスによる帝国全域の支配、つまり、東西ローマの再統一が実現するが、彼は 395 年 1 月に急逝したため、この状況は 4 ヶ月しか続かなかった。前述したように、生前、彼は長男のアルカディウスを東方の共同皇帝として、また、次男の**ホノリウス**を西方の皇帝として即位させているが、彼の死後、この分割統治が定着し、東西ローマが再び統合することはなかった。



ローマ帝国の東西分割 (395 年)

¹⁰⁴¹ 330 年、コンスタンティヌス帝は首都をコンスタンティノープルに遷したと説明されることが多いが、実際にはそれが決定されただけで、330 年の時点では首都機能を果たしていなかった。381 年、テオドシウス帝がこの新都で公会議が招集した時点でも、帝都として整備されていなかったが、395 年、ローマが東西に分離すると、文字通り東ローマの主となる。なお、コンスタンティヌス帝が遷都を意図していたか疑われている。See Karl Leo Noethlich, Strukturen und Funktionen des spätantiken Kaiserhofes, in Aloys Winterling ed., Comitatus, Beiträge zur Erforschung des spätantike Kaiserhofes, De Gruyter 1998, pp. 13-50, 26

領土の分割は、ヨーロッパ大陸ではバルカン半島北西部のドリナ川 (Drina 全長約 486km、324 頁参照) を基準に行われた結果¹⁰⁴²、4 分割統治時に比べ、「西」の領土が大分広くなり、現オーストリアやスロベニア、また、パンノニアやダルマツィアは西ローマ帝国領となる。なお、現在、ドリナ川の大部分はセルビアとボスニア・ヘルツェゴビナの国境を形成しており、クロアチアとの国境付近でサヴァ川 (Save) に合流している。

分割統治は初めてではなく、ローマ人はこれを帝国の分裂として捉えていなかった¹⁰⁴³。そのため、国号は変更されていないが、帝国が再統一されることはなかったため、後世、「分裂」という見方が生じた。もっとも、一方が他方から分離・独立したわけではなく、テオドシウス帝が指定した分割統治が定着したに過ぎないため、厳密には「分割」である。以後、ヨーロッパは東西で異なる歴史を歩むことになる。キリスト教も東西で異なる発展を遂げ、後に東西に「分裂」した。なお、これは「分割」ではない (232 頁参照)。



セルビアとボスニア・ヘルツェゴビナの国境を形成しているドリナ川 (Drina 全長約 486km) ¹⁰⁴⁴

395 年、ローマ帝国はこの川を基準に東西に「分割」された。なお、その約 450 年前、第 2 次三頭政治 (前 43～前 32 年) が敷かれていたときも、支配領域はこの川を基準にして分けられており、オクタウィアヌスはその西側を、アントニウスは東側とエジプトを治めた。北アフリカの属州はレピドゥスの所轄となる。

¹⁰⁴² アフリカ大陸ではアラエ・フィラエノルム (Arae Philaenorum) が東西の境になった。

¹⁰⁴³ Alexander Demandt, *Magister militum*, in *Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft (RE)*, Supplementband XII, Metzler 1970, pp. 553–790, 727.

¹⁰⁴⁴ 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Drina_river_canyon_1.jpg

4. 東西のローマ帝国

1) 西ローマ帝国 (395～476年)

395年の分割後、古代ローマ発祥の地であるイタリア半島、共和政期に取り込んだヒスパニア、カエサルが平定したガリア、アルプス山脈の北方や西方、また、帝政初期に属州としたブリタニアは**西ローマ帝国**の領土になる。しかし、ゲルマン人の侵入が相次ぎ、領土は次々と奪われていった。なお、彼らの中には合法的に帝国内に入り、または、捕虜ないし人質として連れてこられ、力を付けていく者もいた。皇帝に雇われ、他のゲルマン人の侵入から帝国を守る役割を果たす者もあり、全てのゲルマン人が侵略者であったわけではない(222頁参照)。

初代皇帝の**ホノリウス**は、すでに393年、西方の皇帝として即位していたが、395年1月の時点でも、まだ10歳の少年であったため、**ステイリコ**が後見人になる。ステイリコはテオドシウス帝(ホノリウスの父親)の下で名を揚げたゲルマン人の武将である。彼は娘をホノリウスに嫁がせて皇帝の義理の父親になるとともに、ゲルマン人を撃退し、名声を高めていったが、408年、それに脅威を感じた者によって処刑された。その後、ホノリウスは皇帝としての資質を持っていなかったこともあり、離反者が増えていく。属州ブリタニアでは、407年、コンスタンティヌス3世が対立皇帝として立てられており、翌年、共同皇帝として承認された。こうして、ホノリウスの権威はさらに弱まり、西ローマ帝国が早期に滅びる一因になる。

帝都は、東西に分割される前の時点で、ローマからメディオラーヌム(現ミラノ)に遷されていたが、402年、ラウエンナ(現ラヴェンナ)に変わった。これはゲルマン人の侵攻に備えるためであったが、彼らによって度々、劫略されている。

410年、ホノリウスは属州ブリタニアを放棄し、大陸の防御に力を入れることにした(500頁参照)。また、ゲルマンの一派の西ゴート人と同盟を組み、イベリア半島に侵入したゲルマン人を撃退するが、取り戻した領土には、西ゴート人が王国を建設したため、帝国領の回復は果たせなかった(484頁参照)。

西ローマはその後もゲルマン人に攻め入れられ、衰弱していく中、476年、ゲルマン人の傭兵を率いていた**オドアケル**¹⁰⁴⁵がクーデターを起こし、(まだ15歳前後の)ロムルス・アウグストゥス帝を退位に追いこんだ。こうして西ローマは僅か80年で消滅する。その後、西ヨーロッパの各地では新興国が台頭していくが、古都ローマで発展した文化やキリスト教はこの地域に影響を与え続けた(568頁参照)。

なお、西ローマ帝国を崩壊に追いやったオドアケルは、その後、イタリア半島に王国を建設したが、493年、ゲルマン人の一派である東ゴート人に滅ぼされた。その後、彼らが興した王国も、555年、東ローマ帝国に倒され、消滅した。

2) 東ローマ帝国・ビザンツ帝国 (395～1453年)

テオドシウス帝の死後、旧ローマ帝国の東部では彼の長男のアルカディウスが単独の皇帝となり、帝都は引き続き、**コンスタンティノープル**に置かれた。

西方ではゲルマン人が台頭し、西ローマ帝国が早々に滅びると、東ローマは古代ローマを承継する国としての認識が強まる。実際に、東ローマ皇帝は「西」でも主権を行使するようになり、508年には、ガリアを制したフランク国王のクロヴィス1世に「アウグストゥス」の称号を与え、「西」を治める執政官(コンスル)に任命した。また、ローマ・カトリック教会を自らの統制下に置いた。

帝都コンスタンティノープルはギリシア地方の北辺に位置し、アテネからは直線距離で600kmあまり離れているが、対岸の小アジアを含め、領土の大半はギリシア語圏にあり、東ローマはその影響を強く受けた。7世紀に入ると、ギリシア化がさらに進展し、ローマ固有の「ラテン性」は失われる。キリスト教も皇帝を頂点に据え、その保護を受けながら、西方とは異なる発展を遂げた(232頁参照)。

◎ ビザンツ帝国

後世、ギリシア化が進んだ後の東ローマ(7世紀中頃から消滅するまでの帝国)は、古代ローマとの連続性を否定し、両者の違いを明確にするため、「**ビザンツ帝国**」と呼ばれるようになった。つまり、「ローマ」という語が国号から排除さ

¹⁰⁴⁵ オドアケルの出自は分かっていないが、ゲルマンの傭兵隊長を務めていたと推測される。井上文則「第2章第4節」服部良久・他編『大学で学ぶ西洋史 古代・中世』(ミネルヴァ書房 2006年8月)124～134頁(134頁)。

れている。新しい名称は帝都コンスタンティノーブルの旧称に由来するが¹⁰⁴⁶、そのラテン語音訳の「ビザンティオン」(Byzantiŏn 古語ギリシア語では Βυζάντιον) に照らし「ビザンティン帝国」と記されることもある。なお、「コンスタンティノーブル帝国」と呼ばれることはない。

帝国は自国を「ローマ人の王国」(Βασιλεία τῶν Ῥωμαίων/Res Publica Romana) と呼んでおり、古代ローマとの連続性を認めていた。「東ローマ」や「西ローマ」という呼称も後世、生み出された概念であり、当時のローマ人は国が二つに分離したとは考えていなかった。ギリシア地方に住む人々も、自らをギリシア人ではなく、ローマ人と捉えており、「ギリシア化された東ローマ」という史観には問題がないわけではない¹⁰⁴⁷。また、ビザンツ帝国の存続期にも争いがある¹⁰⁴⁸。

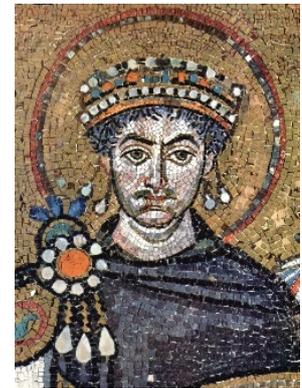
◎ ユスティニアヌス帝による領土回復 (6世紀中頃)

6世紀前半、東ローマ皇帝のユスティニアヌス1世(大帝、141頁参照)は失われた帝国領(西ローマ帝国領)の回復に乗り出すと、旧帝都ローマを含むイタリア半島、シチリア島、北アフリカ、イベリア半島の一部の奪還に成功した。これによってローマ帝国は部分的とはいえ復活するが¹⁰⁴⁹、長続きせず、1世の死後、そのほとんどが失われた。こうしてローマ帝国は完全に消滅し、残されたのはギリシア化されたビザンツ帝国のみとなる。なお、古代という時代区分は西ローマ帝国の消滅(476年)ではなく、ユスティニアヌス1世の死去(565年)によって終わり、中世に変わったと説明されることもある(注1048参照)。

ユスティニアヌス帝の時代、彼が促したこともあり、現ポーランド西部によりスラブ人が南下し、バルカン半島のスラブ化が始まった(539頁参照)。



ユスティニアヌス1世が82歳で亡くなった当時(565年)の東ローマ帝国の版図¹⁰⁵⁰



ビザンティン美術(モザイク画)によるユスティニアヌス1世

¹⁰⁴⁶ 16世紀、ドイツ人のヒエロニムス・ヴォルフ(Hieronymus Wolf)が「ビザンツ」または「ビザンツ帝国」(Bizanz/Byzantinisches Reich)という概念を考案し、広まったとされている。Christian Hütterer, Ein Imperium sichtbar machen, in <https://www.wienerzeitung.at/h/ein-imperium-sichtbar-machen>

なお、ヴォルフがこの概念を設けた頃、東ローマの消滅からすでに1世紀が経過していた。また、彼はビザンツを「帝国」と呼んでいたわけではない。ドイツ語の“Reich”の訳に関して、527頁を参照されたい。

¹⁰⁴⁷ See Anthony Kaldellis, The case for East Roman Studies, Arc Humanities Press 2024.

¹⁰⁴⁸ See Mischa Meier, Ostrom - Byzanz, Spätantike - Mittelalter, Überlegungen zum „Ende“ der Antike im Osten des Römischen Reiches, Millennium 9, 2012, pp. 187-254.

¹⁰⁴⁹ ユスティニアヌス帝は、ゴート戦争(535~555年)でイタリア半島を支配していた東ゴート王国を倒し、半島を獲得した。この王国の首都はローマではなく、半島北東部のラヴェンナに置かれていたが、東ローマ帝国は、584年、この都市に総督府を設置し、ローマを含む半島各地を治めた。

¹⁰⁵⁰ 画像出典 <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:4KJUSTINIAN.png>.

◎ 中東における領土の喪失（7世紀）

6世紀後半には北方よりアヴァール人もドナウ川を越えて侵入してきた。7世紀前半には帝国東部をペルシア（ササン朝）に攻め入れられ、一時、シリアやエジプトを占領される（412頁参照）。

610年頃、アラビア半島でイスラム教が成立し（116頁参照）、聖戦（ジハード）が開始されると、帝国はシリア、キリスト教の聖地エルサレムを含むパレスチナ、エジプトを失った。さらに、674～678年と717～718年には2度に亘り、コンスタンティノープルを包囲されるが、帝都の防衛に成功した（413頁以下参照）。

◎ ブルガリアの独立（681年）

7世紀後半、トルコ系遊牧民族の**ブルガール人**がバルカン半島に定住するようになる。彼らはスラブ人と同化しながら勢力を強め、ブルガリア帝国を建設すると、東ローマ帝国から独立し、マケドニア、アルバニア、セルビア、ルーマニアにまたがる広い地域を東ローマから奪った。その結果、8世紀、ローマの領土はバルカン半島の沿岸部と小アジアのみとなり、存亡の危機に晒される。しかし、9世紀中頃にはイスラム（アッバース朝、415頁参照）勢力が分裂・弱体化したため、東方の脅威はなくなり、国力を回復することができた。その頃に始まったマケドニア朝の時代（867～1056年）、ビザンツ帝国は最も繁栄し、スラブ人に対する支配を強化した。1018年にはブルガリアを滅ぼすが、12世紀後半になると衰弱し、1185年、ブルガリア（**第2次ブルガリア帝国**）の再独立を許す。セルビアやハンガリーも独立を達成した結果、ギリシア文化圏というビザンツ帝国の特徴はさらに強まった。

◎ 十字軍遠征期（11世紀末～13世紀後半）と帝国の消滅（1453年）

11世紀後半になると、イスラム勢力が帝国領の小アジアに進出し、王朝（ルーム＝セルジューク朝）を建てた。これに脅威を感じたビザンツ皇帝がローマ教皇に援軍を要請すると、西ヨーロッパのキリスト教徒によって**十字軍**が編成される。1099年、キリスト教徒は450年の長きに亘り占領されていた聖地エルサレムの奪還に成功するが、約90年後、聖地は再び異教徒に占領されることになり、領地回復を目指す遠征が繰り返された（417頁参照）。

十字軍部隊の多くはバルカン半島を通り、陸路で小アジアや聖地エルサレムへ向かっており、騎士や民衆の相次ぐ進入・駐留によって東ローマは荒廃した。13世紀初めには首都コンスタンティノープルが第4次十字軍に占領され、皇帝はニケーア（現トルコのイズニク）に逃れるという事態が発生する。1204年、**ラテン帝国**東ローマは一旦、消滅するが、1261年、ミカエル8世はコンスタンティノープルを奪回し、帝国を復活させた。しかし、皇帝の権限は弱く、封建化が進む。また、セルビア王国やオスマン帝国の外圧に晒されるようになり（422頁参照）、1370年には、オスマン帝国に進貢する状態にまで衰弱する。1453年、このイスラム帝国に首都を攻略され、滅亡した。なお、最後の皇帝コンスタンティノス11世パレオロゴスは敗死したと考えられている¹⁰⁵¹。

1000年を超える存続期間、東ローマ帝国は東欧のスラブ人（226頁参照）にキリスト教を広めるとともに、イスラム勢力の侵入を抑えた。こうして欧州の伝統・文化を維持する傍ら、西方とは異なる文化を発展させた。東西ヨーロッパの文化の違いは、現在でも宗教面で色濃く残っている。なお、11世紀半ば、つまり、帝国が最盛期を迎えたマケドニア朝の末期、東方教会はローマ教会との関係を絶った（252頁参照）。その後、皇帝は度々、東西両教会に和解を促しているが、帝国が崩壊し、その圧力から解放された正教会はローマ・カトリック教会と合意を白紙に戻した（256頁参照）。

¹⁰⁵¹ Marios Philippides and Walter K. Hanak, *The Siege and the Fall of Constantinople in 1453*, Routledge 2011, p. 100.

5. 西ヨーロッパにおけるゲルマン人の台頭

◎ 中世ヨーロッパ

西ローマ帝国の消滅から東ローマ帝国の消滅まで、つまり、476年から1453年まではヨーロッパの**中世**にあたる（異なる見解について、348頁参照）。1000年近く続いたこの時代区分、ローマ帝国で成立したキリスト教は欧州全土に広まり、この地域のアイデンティティが形成されていく。ほぼ全てのヨーロッパ人はキリスト教徒であり、宗教は人々に大きな影響を与えたが、教会は常に絶大な権勢を誇っていたわけではなく、世俗の君主と争い、敗れることもあった。なお、ヨーロッパが東西に分断され、戦火を交えることはなかったが、教会は東西に分裂した。

12世紀に入ると、キリスト教が広まる前の「グレコ・ローマン文化」が再評価されるようになり、ルネサンスが開花する。これを支えたのはギリシア語の文献を翻訳し、保存していたイスラム教徒（アラブ人）であるが、イベリア半島で彼らはキリスト教徒との戦いに敗れた。これに対し、バルカン半島では彼らが東ローマを倒し、中世は幕を下ろす。

◎ 中世盛期（中世中期）

西ヨーロッパの激変、すなわち、西ローマ帝国の崩壊で始まった中世、西ヨーロッパはさらに大きく変わった。とりわけ、その半ばにあたる11世紀中旬から13世紀中旬にかけて農業が発展し、人口が大幅に増えた。これは同時に商業を活性化させ、自治権を持った都市、つまり、自由都市を成立させた。西欧で大聖堂（63頁参照）や大学が建設されるのもこの頃である。

それと同時に諸地域で王権が強化されていった。特に、北欧に住んでいたノルマン人は南下して、フランス西部、イングランド、南イタリアを占領し、王国（公国）を建てた（223頁参照）。これは当時、また脆弱であったフランス国王の権威を弱めることになったが、12世紀後半には王権が強化されていく。また、教皇の呼びかけに応じて**十字軍**が編成され、西欧の騎士が東欧や中東に遠征すると（417頁参照）、イベリア半島でもイスラム教徒から領土を回復する運動が高まった（484頁参照）。これらの現象が見られた1050～1250年を**中世盛期**ないし**中世中期**と呼び、中世初期や中世後期と区別されるが、これは西ヨーロッパに限定した時代区分であり、東ヨーロッパにはあてはまらない。

13世紀半ば、西欧の発展は止まり、中世盛期は終わった。次世紀の前半（1315～1317年）には黒死病や大飢饉が発生し、人口は大幅に減少した。

395年にローマが東西に分割される前から、ゲルマン人は帝国の脅威になっていた。その約20年前、大移動を開始した彼らは、特にヨーロッパの西部で勢力を付け、西ローマ帝国の発足後は、その領内に幾つか王国を建設した（221頁参照）。これによって皇帝の権威はさらに弱まり、476年、ゲルマン人の傭兵部隊を指揮していた**オドアケル**に廃位を言い渡された。その後、オドアケルはゲルマン人の王を名乗り、イタリア半島に王国を興したが、493年、他のゲルマン部族（東ゴート人）の長である**テオドリク**に滅ぼされた。ゲルマン名家出身の彼は幼い頃、人質として東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルに送られ、ローマ式の教育を受けて育った。東ローマ皇帝の要請を受け、イタリア半島に攻め入り、オドアケルを倒すと、半島に新しい王国（**東ゴート王国**）を建てるが、この王国も長くは存続せず、555年、東ローマ皇帝の**ユスティニアヌス1世**に滅ぼされた（326頁参照）。

西ローマ帝国 → オドアケル王国 → 東ゴート王国 → 東ローマ帝国 → ランゴバルド王国 → フランク王国

ユスティニアヌスの死後、半島は再びゲルマン人（その一派のランゴバルド人）に占領され、568年頃、ランゴバルド王国が建てられたが、774年、**フランク王国**に倒された。なお、フランク王国もゲルマン人が建設した国であった。800年、国王の**カール**が教皇からローマ皇帝の冠を授けられると、ローマ帝国は復活し、後に**神聖ローマ帝国**と呼ばれるようになる（432頁参照）。また、フランスやドイツといった西ヨーロッパ諸国の原型が作られていく。以下では、西ローマ帝国の消滅後に発足したゲルマン国家の内、西欧の発展に大きな影響を与えたフランク王国について説明する。

5.1. フランク王国の建設

西ローマ帝国の消滅から5年が経過した481年、ゲルマン人の一部族のフランク人はガリア北西部（現在のフランス北西部、ベルギー、オランダ東部、右下図の赤い地域）に**フランク王国**を建設した。つまり、王国の歴史はヨーロッパの西方で始まるが、その後、四方へ領土を拡大し、全盛期の9世紀初旬には今日のフランス、ドイツ、イタリア北部を含む広い地域を支配するようになる。なお、「フランス」という国号は「フランク王国」に由来する。

France (フランス)	正式な国名は République française (フランス共和国)
franc (フランク)	↑ franc の変形



西ヨーロッパを広い範囲で支配したフランク王国は各地の部族を束ねる手段としてキリスト教を利用した。また、新たに獲得した領土では原住民をこの宗教に改宗させ、王国としての統一性を保った。特に、ユトランド半島（デンマーク）の南に位置するザクセン地方を制圧し、先住民をキリスト教に改宗させたことが知られている（次頁参照）。王国はキリスト教を広めるだけでなく、教皇を他のゲルマン人の攻撃から守る役割も果たした。その領土である**教皇領**は国王**ピピン**（在位期751～768年）より寄進された領土を起源とする。

宗教以外の分野でも王国は古代ローマの影響を受けていたが、ゲルマン特有の制度も存在した。例えば、自由民は有力者（主人）の館に住み、衣食を与えられる一方で、戦役や護衛で主人に仕える義務を負う**従土制**はゲルマン社会の特徴であった。主人から土地を与えられることはなかったが、これに古代ローマ末期の**恩貸地制**¹⁰⁵²が結合し、**封建制**、すなわち、封主（領主）は封臣（農民）に土地を与える一方、封臣は封主に仕える制度に発展した。なお、この制度の下、各地に有力な封主が出現し、王権を弱めることになった。

フランク人は**サリカ法典**¹⁰⁵³という独自の法規範も持っていた。女子による土地の相続を認めないこの法律は女性の王位継承を否定する根拠となり、14世紀以降、ヨーロッパ諸国で王位継承問題を引き起こすことになる¹⁰⁵⁴。

フランク王国は、①481年における建国から751年に**ピピン3世（小ピピン）**が即位するまでの**メロヴィング朝**と、②その即位から消滅する10世紀末までの**カロリング朝**に分けられる。なお、9世紀中頃、フランク王国は三つに分割されるが（後述参照）、カロリング朝はそれぞれの王国で存続した。

1) メロヴィング朝

ゲルマン人には三位一体説を否定するアリウス派が広まったが、フランク王国を建設した**クローヴィス1世**¹⁰⁵⁵は、アタナシウス派（235頁参照）に改宗し、ローマ・カトリック教会と密接な関係を保ちながら勢力を拡大していった。版図はガリアの北部から南西部にまで達したが、王の死後、領土はサリカ法典に従い、4人の息子達の間で分割相続されることになる。各分国では豪族が台頭し、内紛が繰り返されたため、7世紀後半、王国の立て直しを図り、宮宰職が設けられると、この家臣が実権を握るようになった。特に、**カール・マルテル**は現フランス西部における戦闘（732年の**トゥール・ポワティエ間の戦い**）でイベリア半島から侵入してきたイスラム教徒を撃退し、名を揚げた。751年11月、息子の**ピピン3世（小ピピン）**がすでに実権を失っていた国王を廃し、新しい王として即位すると、メロヴィング朝は滅び、カロリング朝に変わった。

¹⁰⁵² **恩貸地制**とは土地を有力者に寄進することで有力者の保護下に入り、その土地を有力者から借りて使用するという制度である。

¹⁰⁵³ Knut Jungbohn Clement, Forschungen über das Recht der Salischen Franken vor und in der Königszeit, Verlag von Theodor Hofmann, 1879, pp. 240-241. なお、「サリカ」は法典を編纂したフランク人の支族サリー人を指している。

¹⁰⁵⁴ 1316年、フランス国王のルイ10世（カペー朝）は男子の跡継ぎを残さず亡くなった。王にはジャンヌと呼ばれる娘がいたが、王弟のフィリップ5世は、ジャンヌが実の娘であるか疑わしいことや、サリカ法典を持ち出して彼女の王位継承に異議を述べ、自ら即位した。なお、1322年、フランスのシャルル4世（カペー朝）が**男子の嗣子**を残さず死去したため、後継者争いが発生し、**百年戦争**に発展する（337頁参照）。18世紀中頃にはオーストリアで、マリア＝テレジアの家督相続が争われ、ヨーロッパ大戦を引き起こした（451頁参照）。

¹⁰⁵⁵ 「クローヴィス」(Clovis) は代々のフランス国王の名前として使用された「ルイ」(Louis) の由来となる。

王族出身でなかったピピンは即位ないし新王朝樹立の正統性を得るため、教皇の権威を利用したが、教皇ザカリアスも東ローマ帝国やその他の勢力に対抗するため、ピピンの支援を必要としていた¹⁰⁵⁶。それを得るため、「聖なる父親」はピピンの即位を承認する。次代の教皇ステファヌス2世は、754年、ピピンをローマ貴族（パトリキ）に叙し、パリのサン＝ドニ大聖堂まで出向き、祝福した。後世、これはフランス国王の戴冠式と捉えられるようになる。

ピピンがカロリング朝を創始した751年、東ローマ帝国がラヴェンナに設置していた総督府（注1056参照）はランゴバルド王国に攻略された。この王国は、さらに聖都ローマへの侵攻を企図するようになったため、教皇がピピン3世に援護を要請すると、ピピンは、754年、イタリア半島に遠征し、王国からラヴェンナ地方を奪った。756年、彼はこの地方を東ローマ帝国に戻さず、教皇に寄進しており、これが教皇領の起源となる（119頁参照）。

2) カロリング朝

ピピンによって開かれたカロリング朝の時代、フランク王国はキリスト教としての性質を強めた。とりわけ、ピピンの長男の**カール1世（カール大帝）**は、774年、教皇を脅かしていたランゴバルド王国を倒し、その領土を「聖なる父」に寄進した。また、30年にも及ぶ北ドイツ遠征の末にザクセン地方¹⁰⁵⁷を制すと、ゲルマン神話を信仰していた人々をキリスト教に改宗させた。これらの貢献により、カール1世は800年のクリスマスの日、教皇レオ3世よりローマ皇帝の冠¹⁰⁵⁸を授かっている。こうして国王は皇帝になるが、これには東方教会に対抗する教皇の思惑も込められていた。当時、東西の教会は対立しており（254頁参照）、東方教会を支えていた東ローマ皇帝に対抗する上でも、教皇は新しい皇帝を必要としていた。後世、カール大帝の戴冠を機に西ローマ帝国は復活した、または、**神聖ローマ帝国**が発足したと目されるようになる（525頁参照）。



画像出典：
Süddeutsche
Zeitung¹⁰⁵⁹

785年、カール大帝（左）はザクセン地方を治めていた**ヴィドゥキント（Widukind、右）**を屈服させ、ゲルマン人の居住地にキリスト教を広めた。彼の東征は宣教活動を兼ねた聖戦であった¹⁰⁶⁰。なお、カール大帝による強制改宗は完全に支持されていたわけではない¹⁰⁶¹。

¹⁰⁵⁶ 6世紀中頃、東ローマ皇帝のユスティニアヌス1世（大帝326頁参照）はイタリア半島を攻略すると、半島北東部のラヴェンナに総督府を設置し、半島の統治体制を確立した。8世紀、聖像崇拝をめぐる東西両教会が対立した際（254頁参照）、東方教会の守護者でもある皇帝はラヴェンナ総督府を通じ、教皇に圧迫している。その後、ランゴバルド王国がラヴェンナを奪い、カトリック教会の首長を脅かすようになったため、彼はピピンに助けを求めた。

¹⁰⁵⁷ なお、当時のザクセン地方は現在のドイツ・ザクセン州とは異なる（223頁の地図参照）。

¹⁰⁵⁸ 「ロンバルディアの鉄王冠」と呼ばれるこの冠について、572頁の注1584を参照されたい。

¹⁰⁵⁹ 画像出典 <https://www.sueddeutsche.de/wissen/karl-der-grosse-frankenkonig-1.1873759>

¹⁰⁶⁰ Peter Leusch, Ein Glaubenskrieger und Reformier, in <https://www.deutschlandfunk.de/karl-der-grosse-ein-glaubenskrieger-und-reformier-100.html>

¹⁰⁶¹ カール大帝は顧問で、神学者のアルクイン（Alkuin）から強制改宗を批判されている。後に、ローマ・カトリック教会も強制改宗を禁止するようになったが、従わない君主もいた。Wilfried Hartmann, Karl der Große, Kohlhammer 2010, pp. 162-163.

フランク王国の版図はカール大帝の統治下で最大になり、現在のドイツ、フランス、イタリア北部¹⁰⁶²、ペネルクス 3 国の領土に重なる広大な地域に広がった (571 頁の地図参照)。ただし、現フランス北西部の**ブルターニュ地方**は含まれていない。フランク王国を興したクローヴィス 1 世は、497 年、海に突き出したこの地域 (半島) を制しているが、併合せず、属国とした¹⁰⁶³。なお、フランク王国による統制は緩く、クローヴィス 1 世の跡を継いだキルデベルト 1 世が 558 年に死去すると、宗主権は放棄された。600 年頃、この地域には**ブリトン王国**が建てられ、799 年、カール大帝に滅ぼされるまで存続した。彼もその東部に**辺境領**を設置するのみで、自国に編入していない¹⁰⁶⁴。

また、フランク王国の勢力はイベリア半島の内部にまで及ばなかった。それは、当時、半島はイスラム教徒に占領されていたためであるが (484 頁参照)、カール大帝は半島北部から異教徒を追い出すと、この地域に多数の**辺境領**を設置し、侵入に備えた。それらを合わせて**スペイン辺境領** (Marca Hispanica/Spanische Mark 571 頁の地図参照) と呼び、その内の一つである**バルセロナ辺境領**は、987 年、フランク王国から独立し、**カタルーニャ君主国**となる (490 頁参照)。

5.2. フランク王国の三分割

領土は息子達の間で分割して相続するというフランク族の慣習法 (サリカ法典) に従い、カール大帝の孫¹⁰⁶⁵の世代 (843 年)、王国は東・中・西の三つに分割された (右の地図参照)。ローマ皇帝の地位やイタリア半島、また、フランク王国の主要地は**中フランク**に引き継がれたが、後述するように、この王国は脆弱で、最も早く消滅する。

1) 東フランク王国、ドイツ王国と神聖ローマ帝国の発足

ライン川やアーレ川¹⁰⁶⁶を境とし、その東部には**東フランク王国** (843~919 年) が建設された。その領土は現在のドイツ領と重なり、ドイツの原型になる。なお、870 年、**メルセン条約**に基づき、中フランク王国の所領の一部が加わった (右の地図参照)。

911 年、カール大帝の家系であるカロリング朝が断絶すると、ドイツ人の中から王が選出されるようになる。詳しくは、現ドイツ中央部のフランケン地方を治めていたコンラート 1 世が新しい王に選ばれた。919 年、ザクセン公のハインリヒ 1 世が跡を継ぎ、**ザクセン朝**を開くと、東フランクはドイツ人が王を務めるドイツ



12 世紀半ば、ローマ・カトリック教会は強制改宗を禁止するが、異教徒への弾圧は、その後も諸国で行われた。その顕著な例として、15 世紀末頃、スペインのカトリック両王がユダヤ人を改宗させたケースが挙げられる。

¹⁰⁶² カール大帝の治世期、イタリア半島の中南部にはスポレート公国やベネヴェント公国が建てられていた。両公国はランゴバルド王国に属していたが、この王国はカール大帝によって倒されている。

¹⁰⁶³ 当時、ブルターニュ地方にはグレートブリテン島から移住してきたケルト人 (ブリトン人) が住んでおり、彼らは 5 世紀初頭、西ローマ帝国から独立していた (220 頁参照)。

¹⁰⁶⁴ なお、843 年、フランク王国は三つに分割された。その内の一つである西フランクは、845 年、ブルターニュと戦ったが、敗れている。その後、この地域はノルマン人 (デーン人) に脅かされるようになり (223 頁参照)、952 年には**ノルマンディー公国**に服したが、980 年、ブリトン人はその支配から解放され、**ブルターニュ公国**を興した。

その後、ブルターニュ公国はイングランドとフランスの係争地と化す。公国の獲得を狙ったフランス国王のフランソワ 1 世は、1514 年、ブルターニュの公女クロードと結婚し、1524 年、彼女が亡くなると、1532 年、ブルターニュをフランスに編入した。

¹⁰⁶⁵ カール大帝には息子が数人いたが、一人 (ルードヴィヒ 1 世) しか生き残らず、彼が土地を相続したが、彼には息子が 3 人いたため、843 年、ヴェルダン条約に従い、3 分割されることになった。

¹⁰⁶⁶ アーレ川はスイス中部より流れ出し、同国北部でライン川に合流する。

王国としての性質がさらに強まる。なお、当初、ザクセンはフランク王国領に含まれておらず、カール大帝が度重なる遠征の後に獲得したドイツ北部にある地域である (330 頁参照)。

次代のオットー1世 (大帝、在位 936~973 年) は独立心旺盛の諸部族を押えて王権を維持するには教会の支えが必要と考えた。その協力を得るため、彼は司教や修道院に領土や裁判・関税権、さらには称号 (爵位) を寄進した¹⁰⁶⁷。また、周辺の諸侯から攻め入られた教皇ヨハネス 12 世を救った。これに感謝した教皇は、962 年、オットー1世にローマ皇帝の冠を授けている。これを機に**神聖ローマ帝国**が発足し¹⁰⁶⁸、歴代のドイツ王は教皇との連携や北イタリアの統治を重視するようになった結果、ドイツ地方には数多くの国 (領邦) が建てられ、諸侯が権勢を振るうことになる。神聖ローマ帝国はそれらを緩やかに束ねる組織として、1806 年まで存続した (534 頁参照)。なお、ドイツ地方には中世より多くの領邦国家が存在してきた歴史に即し、ドイツは現在でも地方が多くの権限を握る連邦制の国である (197 頁参照)。

神聖ローマ皇帝と教皇の関係は常に良好であったわけではなく、オットー1世も彼に帝冠を授けたヨハネス 12 世と対立するようになる。後者は、ローマで権力を掌握していた貴族 (アルペリーコ 2 世) の息子で、955 年、父親の威を借り、若干 18 歳で教皇になった。オットー1世は皇帝の地位を得るために彼を利用したに過ぎず、戴冠の翌年、教皇と対立すると、廃位を言い渡した。

※ 皇帝と教皇の争いについて、334 頁以下参照

2) 中フランク王国とイタリア王国の発足

東西二つのフランク王国の間には**中フランク王国** (中部フランク王国とも呼ぶ。843~855 年) が建てられ、ネーデルラント (現オランダ、ベルギー、ルクセンブルク)、ブルゴーニュ (ブルグント、535 頁参照)、プロヴァンス、北イタリア等を領土とした。つまり、フランク王国の主要地、特に、ライン川沿いの地域、アーヘン、ローマ等の都市は中フランク王国に属すが、そのために国土は南北に長くなり、王国は多くの民族を抱えることになった。

その統治は困難であったため、初代王で、神聖ローマ皇帝を兼ねたロタール1世 (在位 817~855 年) の死後、領土は三つに分割された。①イタリア北部は長子のルートヴィヒ2世 (ロドヴィコ2世) に、②東西フランクに挟まれた地域は次男であるロタール2世に、③プロヴァンス (65 頁の注 200 参照) は3男のシャルルに与えられた。

こうして中フランク王国は僅か 12 年で消滅し、855 年、イタリア北部には**イタリア王国**が成立する。この国の王が神聖ローマ皇帝を兼ねたが、924 年、断絶した。帝位が復活したのは、962 年、東フランク王国のオットー1世が即位した時である。

東西フランクに挟まれた地域を与えられた**ロタール2世** (在位 855~869 年) は自らの領土を**ロタリンギア** (Lotharingien ロタールの王国の意) と名付けた。10 世紀後半、この地域は南北に分割されることになるが、現在でも、その南部は、ロタリンギアにちなみ、**ロートリンゲン** (仏語では**ロレーヌ**、532 頁および 594 頁参照) と呼ばれている。他方、北部は 12 世紀末、現ベルギー、オランダ南部、ドイツ南西部 (ケルン、アーヘン、トリーア等の諸都市) に分裂した。



プリウム条約による中フランクの分割 (855 年) ¹⁰⁶⁹

- 桃：イタリア
- 紫：プロヴァンス (Provece)
- 橙：ロタリギア (Lotharingien)

¹⁰⁶⁷ その見返りとして、オットー1世は教会より高位の聖職者の叙任権を得、聖職者を国家行政に登用した (334 頁参照)。

¹⁰⁶⁸ それよりも早い 800 年のカール大帝の戴冠時に神聖ローマ帝国は成立したとみる立場もある (524 頁参照)。

¹⁰⁶⁹ 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Vertrag_von_Prüm.svg (画像は著者により切り抜かれている)

ロタール2世の死後、彼の叔父にあたる東西フランクの両王はロタリングアを分割し、自らの国に併合するが(870年のメルセン条約)、880年、リブモント条約に従い、東フランク王国領に変わった。

3) 西フランク王国とフランス王国の発足

フランク王国の西部、つまり、現在のフランス地方には**西フランク王国**(843~987年)が建てられたが、王権は弱く、**ノルマン人**(デーン人、223頁参照)の侵入に苦しめられた。

※ フランドル伯の創設し、国境を警備させた点について、473頁を参照されたい。

10世紀初頭にはパリが包囲される状況にまで悪化したため、西フランク国王のシャルル3世は、911年、大西洋沿岸地域を彼らに与え、部族の長**ロロ**を**ノルマンディー公**に叙した。彼が封土に**ノルマンディー公国**を建設したことになみ、フランス北西部の沿岸地帯は現在でも**ノルマンディー**と呼ばれている。なお、公国の建設によって西フランク国王の権威はさらに弱まり、ブルゴーニュ(535頁参照)、フランドル、プロヴァンスといった地域では封建領主が台頭した。

987年、カロリングの家系が途絶えると、パリ伯の**ユーグ・カペー**(右の画像)が国王に選出され、**カペー朝**が開かれた。これを機に、西フランク王国は**フランス王国**と呼ばれるようになる。この王朝でも国王の権威は弱く、とりわけ、**アンジュー伯**の後塵を拝した。なお、このフランス貴族は、1154年、イングランド王を倒し、新しい国王となる(501頁参照)。その領土にはイングランドとフランス西部が含まれ、言わば皇帝として君臨したが(224頁の地図参照)、フランス国内では貴族の一人であり、国王の家臣であった。もっとも、その権勢は国王よりも強く、ノルマンディーを含む遙かに広い地域を支配した。



ユーグ・カペー
シャルル・ド・スチューベン作
『ユーグ・カペー』(1837年)

このような特殊な状況が変わるのは13世紀に入ってからである。イングランド王のリチャード1世(獅子心王)はアンジュー伯、つまり、フランス貴族であり、フランスで育ったことから、国王の**フィリップ2世**とは旧知の仲であり、両者は共に十字軍に参加するが(419頁参照)、遠征中に不和になり、一足早く帰国したフィリップ2世は旧友の所領を奪った。また、次のイングランド国王(ジョン)からノルマンディーを奪還し、フランス国王の権威を高めた。一時はロンドンを占拠し、「カペーの奇跡」と呼ばれる現象をもたらすまでになったため(460頁参照)、フィリップ2世は初代ローマ皇帝のアウグストゥスになみ、Philippe-Augusteと呼ばれた。



フィリップ2世
Louis-Félix Amiel 作
“Philippe II dit Philippe-Auguste, Roi de France (1165-1223)”
(1837年)

5.3. 十字軍の遠征

西ヨーロッパに成立したゲルマン人の国々は争いを繰り返す一方、11世紀末以降、教皇が提唱した**十字軍**に参加している。次世紀の半ば以降は諸国の君主が自ら出兵しているが、彼らの足並みは揃わず、キリスト教徒軍は大きな成果を挙げることはできなかった。

◎ **十字軍**の遠征について、417頁以下を参照されたい。

6. 王権の強化、君主と教皇の対立

6.1. 叙任権論争 ～ カノッサの屈辱 ～

東フランク王国で王の権威が強まったのも、カロリング朝が終わり、ザクセン朝が始まってから、つまり、東フランク王国がドイツ王国としての性質を帯びようになってからであるが、各地で諸侯が勢力を誇っていた（バイエルン公やフランクエン公等）。ザクセン朝を開き、後に神聖ローマ皇帝にもなる**オットー1世**（ドイツ王としての在位 936～973年、神聖ローマ皇帝としての在位 962～973年）は諸部族を統制する手段としてキリスト教を利用した。また、その一方、教会を味方に付けるため（または統制するため）、土地や租税の徴収権を司教や修道院長に寄進している。その結果、これらの聖職者は一種の封建領主となり、宗教に関わらない世俗の権力を持つようになった。他方、皇帝は献進の見返りとして聖職者の任命権（叙任権）を獲得すると、結婚して子孫を残すことのできない聖職者を諸侯に叙し、地方を治めさせた。このように地方の統治権を教会に移し（または聖職者を諸侯に選任し）、教会を支配することで国を治める方針を**帝国教会政策**（Reichskirchensystem）と言い、オットー1世はこの「制度」を積極的に利用したと言われるが、そのような捉え方は完全に支持されているわけではない¹⁰⁷⁰。当時、跡継ぎになれない諸侯の四男や五男等は聖職に就くことがあり、オットー1世も末弟をケルン大司教に叙している（596頁の注1640参照）。むしろ、諸侯の子息でなければ、高位の聖職者にはなれなかった。なお、現在、ローマ・カトリック教会は聖職者の妻帯を一律禁止しているが、当時は例外も認められていた（253頁参照）。

何れにせよ、皇帝による寄進や教会による叙任権の付与は政治と宗教の癒着だけではなく、聖職の売買を生むことになり、教会の墮落を招いた。11世紀後半、教皇の**グレゴリウス7世**（在位 1073～1085年）は組織を建て直すため、内部改革を進めるとともに、皇帝による聖職者の任命を批判した。1075年には叙任の禁止を**ハインリヒ4世**（ドイツ王としての在位 1054～1105年、神聖ローマ皇帝としての在位 1056～1105年、ザーリア朝）に言い渡し、彼が従わない場合は教会から破門すると脅したが、20代半ばの皇帝はそれにひるまず、聖職者の任命を止めなかった。むしろ、敵対心を露わにし、翌年の宗教会議でグレゴリウス7世の廃位を決定すると、対立教皇を擁立した。これに激怒した教皇は皇帝に破門を言い渡して応酬したため、争いは激化することになる。

当時、神聖ローマ帝国内では封建化が進み、皇帝に従わない諸侯が力を付けていた。皇帝破門の知らせを聞きつけた領主が反乱を起こし、苦境に立たされたハインリヒ4世は、1077年1月、教皇が滞在していた北イタリアのカノッサ城に赴き、城の前で王冠や装飾を身に着けず、裸足で赦免を求めたとされている。これを「**カノッサの屈辱**」と呼ぶが、破門が解かれると、皇帝は反撃に転じ、1080年6月、教会会議を開いて対立教皇を選出した。また、1084年には軍隊を派遣してローマを占領する。イタリア南部のサレルノに逃れたグレゴリウス7世は、翌年、失意の内に亡くなった。

◎ カノッサの屈辱（カノッサ参り）

1077年1月、神聖ローマ皇帝のハインリヒ4世は教皇より赦しを得るため、3日間、質素な修道衣を身にまとい、雪の上に素足で立ち尽くしたと説明されることがあるが、それは後世の脚色である¹⁰⁷¹。ドイツ人の民族意識やカトリック教会への批判が強まった19世紀後半、皇帝、つまり、ドイツ人は屈辱を受けたと捉える風潮が強まった。右の画像はその頃に描かれているが、皇帝は反抗的な態度をとり、教皇に屈していない。

なお、ドイツ語でこの史実は“Gang nach Canossa”（カノッサ参り）と呼ばれている。

Eduard Schwoiser (1826～1902年)
“Heinrich vor Canossa”

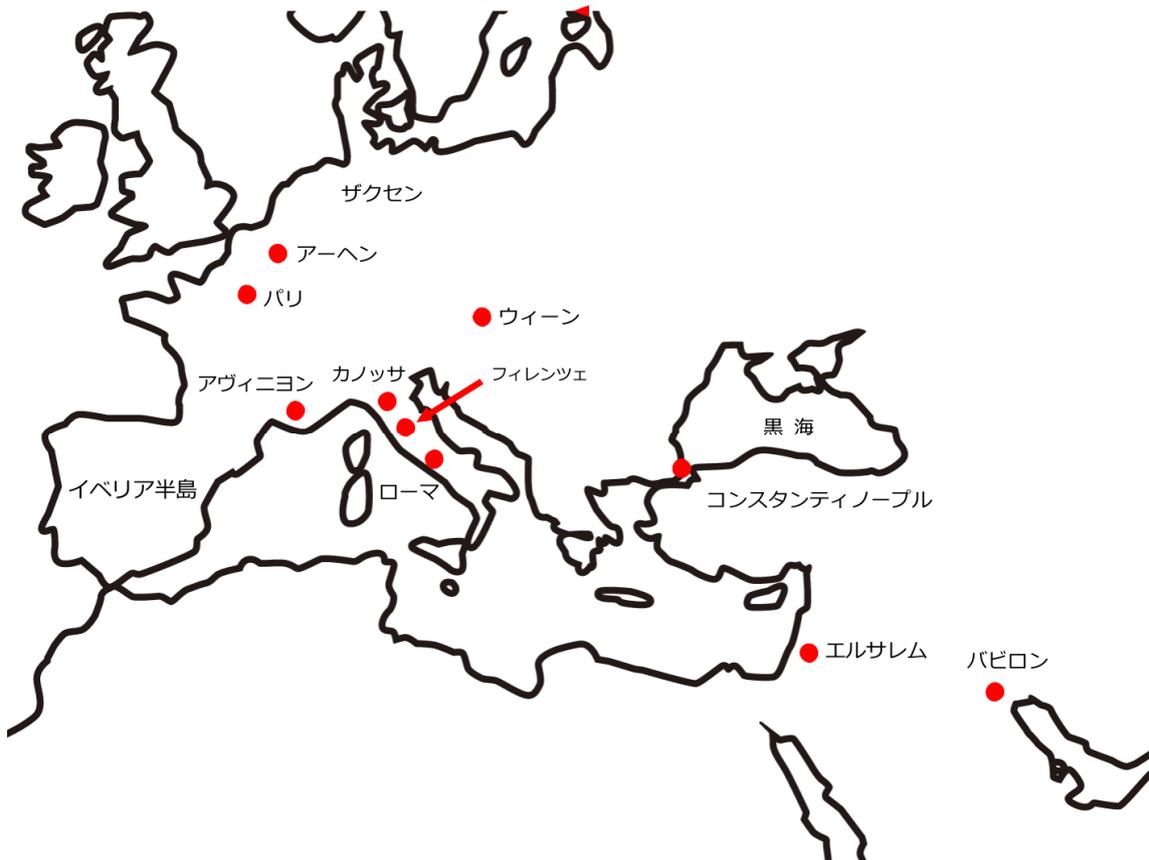


¹⁰⁷⁰ Timothy Reuter, The „Imperial Church System“ of the Ottonian and Salian Rulers. A Reconsideration, Journal of Ecclesiastical History, 33, 1982, pp. 347–374.

¹⁰⁷¹ Matthias Pape, „Nach Kanossa gehen wir nicht“, War Anastasius Grün (Graf Anton Auersperg) Bismarcks Stichwortgeber im Kulturkampf?, Lotte Kéry ed., Eloquentia copiosus, Festschrift für Max Kerner zum 65. Geburtstag, Thouet 2006, pp. 245–264.

二人の権力者の争いは1122年に**ウォルムス協約**が制定され、叙任権は教皇に、他方、司教領や修道院領に対する世俗的な支配権は皇帝に与えられるという本来の形で収まるまで、約半世紀に亘り継続した。なお、その間に皇帝や教皇は変わっている。また、協約締結に先立つ1095年、教皇のウルバヌス2世(在位1088~1099年)が十字軍の遠征を呼びかけると、西欧の騎士達が参加した(417頁参照)。これは教皇の権威を回復させるきっかけになる。

その後、教皇の権威は高まり、**インノケンティウス3世**(在位1198~1216年)の在位中の12世紀末、最盛期に達した。彼が第4次十字軍の遠征を呼びかけると、イベリア半島における**国土回復運動**(レコンキスタ、484頁参照)も活性化する。しかし、フランスで王権が強まると、今度はフランス国王が圧力を加えるようになり、教皇は神聖ローマ皇帝と対立していたとき以上に追い込まれることになった。14世紀初頭、**ボニファティウス8世**(在位1294~1303年)がフランス国王との抗争に敗れると、教皇の権威は凋落^{ちようらく}していく(336頁以下参照)。



◎ 11~15世紀のヨーロッパ

叙任権論争が熾烈になった11世紀、ローマ・カトリック教会は東方教会とも激しく対立し、1054年、教会は分裂した(252頁参照)。もっとも、ヨーロッパも東西に分裂し、戦争が行われていたわけではない。また、東ローマ皇帝と教皇が対立していたわけではなく、皇帝がイスラム教徒との戦いで援軍を求めると、教皇はそれに応じ、1099年、十字軍が編成された(417頁参照)。これは西欧でキリスト教の精神を高め、教皇は叙任権論争で失われた権威を回復する。しかし、その後、200年も続いた遠征が終わると、教皇はフランス国王に統制され、再び権威を失っていく(次頁参照)。また、英仏では**百年戦争**が勃発する。

東ローマ帝国を脅かしていたイスラム勢力(ルーム・セルジューク朝)は十字軍の攻撃を受けるも、反映し続けた。しかし、遠征が終わり、13世紀に入ると、東方からモンゴル帝国に攻め入れられ、衰退する。1308年に消滅すると、その領土内にオスマン1世が興した国が勢力を伸ばし、東ローマ帝国の新たな脅威となる(422頁参照)。

その頃、西ヨーロッパでは古代ギリシア、つまり、東欧の文化を再生する文芸運動(**ルネサンス**)が起き、イタリア半島を中心に発展する。なお、それに貢献したのは大量のギリシア語文献を翻訳して残っていたアラブ人(イスラム教徒)である。1453年、東ローマがオスマン帝国に滅ぼされると、その領土内にいたギリシア研究者はイタリア半島に逃れ、ルネサンスの発展に貢献した(340頁参照)。

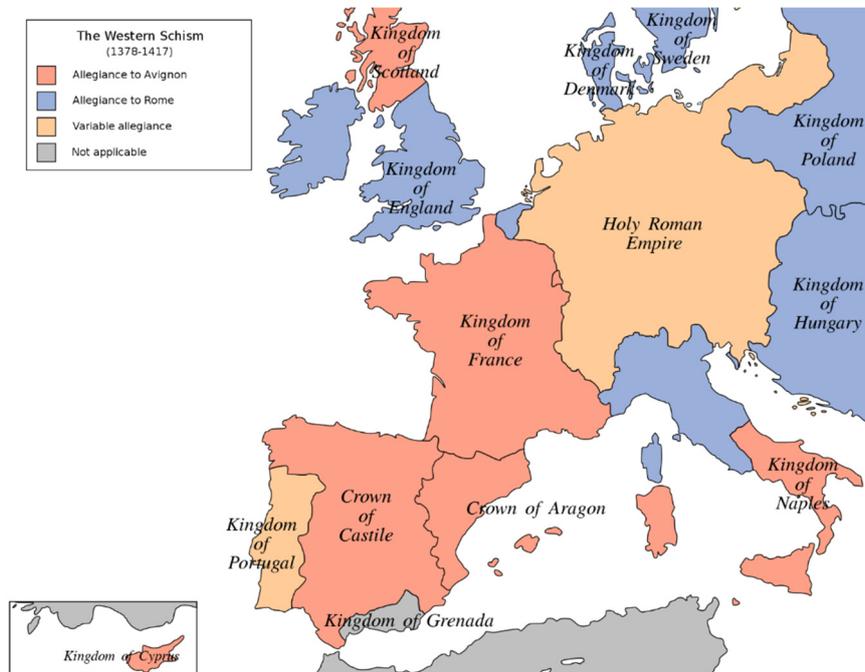
6.2. 教皇のバビロン捕囚、西方教会の大分裂 (大シスマ)

前述したように、ウォルムス協約によって叙任権論争が収まると、教皇は権威を回復することができたが、14世紀に入ると、今度はフランス王に統制され、ローマから南フランス・プロヴァンス地方にあるアヴィニヨン¹⁰⁷²に移住させられた。これを「アヴィニヨン捕囚」(1309～1377年)と呼ぶが、紀元前597年、ユダヤ人が新バビロニアの王に捕えられ、バビロンに連れて行かれた「バビロン捕囚」(282頁参照)になぞらえ、「**教皇のバビロン捕囚**」とも言われる。

発端となったのは教皇のボニファティウス8世(在位1294～1303年)とフランス国王のフィリップ4世(在位1285～1314年)の対立である。後者がイングランド国王との戦争(百年戦争)にかかる費用を調達するため、聖職者への課税を計画すると(359頁の注1119参照)、教皇は苦言を呈した。また、フランス国王が司祭を投獄すると、教皇は反発し、自らの権力の絶対性を主張するようになった。その結果、ローマ・カトリック教会の首長は国王の命によって監禁されることになる(1303年のアナーニ事件)。その心労から教皇は1ヶ月後に死亡したが、その後、教会内ではフランスの影響が強まり、フランス人が次の教皇(クレメンス5世)に選出された。1309年には教皇庁もローマからアヴィニオンに移される。後に続いた6人の教皇は何れもフランス人で、アヴィニオンで職務を遂行したことから、アヴィニオン教皇とも呼ばれた。

「聖なる父親」のローマ不在は教皇領の荒廃と聖職叙任の腐敗を招いた。そのため、ローマ帰還の要請が強まると、1377年、第7代アヴィニオン教皇のグレゴリウス11世(在位1370～1378年)はフランスの反対を押し切り、ローマに戻った。これによって約70年間、続いた教皇のバビロン捕囚は終了するが、これは教会分裂の始まりであった。

ローマに帰還したグレゴリウス11世が翌年(1378年)、逝去すると、イタリア半島出身の大司教が後任に選出され、ローマ市民を喜ばせたが(245頁参照)、新教皇のウルバヌス6世(在位1378～1389年)は教会改革を性急に行おうとしたため、フランス人枢機卿(教皇に次ぎ、権威のある聖職者)の怒りを買う。彼らの多くはローマを去ると、教皇選挙を無効とみなし、クレメンス7世(在位1378～1394年)を擁立した。また、教皇の住まいを再びアヴィニオンに移す。なお、クレメンス7世はフランス人であった。アヴィニオンの教皇はフランス、スペイン(当時はまだカスティリヤ王国とアラゴン王国、485頁参照)、ナポリ、スコットランドに支持される一方、イングランド、ポーランド、ハンガリー、デンマーク、スウェーデン等はローマ教皇を支持したため、教会は分裂し、教会や教皇の権威を失墜させることになる。1378年に始まる教会の大分裂を「大シスマ」(Grosses Schisma)と呼ぶ(他のシスマについて、256頁参照)。



西欧における教会の大分裂 (大シスマ) ¹⁰⁷³

¹⁰⁷² 当時、アヴィニオンはフランス領ではなく、ナポリ王国に属していた。1309年から99年間、教皇(7人のアヴィニオン教皇と2人の対立教皇)が居を構えたアヴィニオンには文化的価値の高い建造物や物品が多数、残されているため、2006年、「アヴィニオン歴史地区：教皇宮殿、大司教座の建造物群及びアヴィニオン橋」としてUNESCOの世界文化遺産に登録された(247頁の画像参照)。

¹⁰⁷³ 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Western_schism_1378-1417.svg

このようにして生じた西方教会の危機を克服するため、パリ大学の学者を中心に様々な案が出されたが、両教皇の反対により、何れも実現しなかった。また、大分裂の終焉を望んだ高位の聖職者や神学者等は、1409年、イタリアのピサで教会会議を開き、第3の教皇アレクサンデル5世を選出したものの、在職中のローマ教皇を退位させることができなかつたため、「聖なる父親」が同時に3名、存在する状態に陥った。

それから約40年間、教皇が^{ていつ}鼎立する状況が続いたが、教会の危機は教会によって解決されることになった。当時、「公会議は教皇の上に立つ」「教皇も公会議の決定に従う」という理念が確立していたため、神聖ローマ皇帝ジギスムント(注1076参照)の圧力の下、ドイツ南部のコンスタンツで公会議が開催され(1414年11月～1418年4月、36頁参照)、教皇を一人に絞ることになった。なお、会議では枢機卿団に1票、また、公会議に参加する諸民族(ドイツ、フランス、イングランド、スペイン)にも1票ずつ与えられる方式が用いられた。会議を機にローマ教皇は自主的に退位する一方、それを拒んだピサとアヴィニヨンの教皇は公会議の場で罷免されることになる。1417年、公会議は新しい教皇マルティヌス5世を選出し、教会の大分裂を終わらせた。

◎ ウィクリフとフスの破門とフス戦争

コンスタンツの公会議ではイングランドの神学者ジョン・ウィクリフ(1330年頃～1384年)やボヘミアの神学者ヤン・フス(1370年頃～1415年)を異端とみなす決定も下された。当時、ウィクリフはすでに死亡していたが、『聖書』こそが真の教義であり、後世、書かれたものは破棄されなければならないと訴えていた。また、聖職者は富を貧者から強奪しているとし、教会の徴税権や贖宥状の販売に異議を唱えた¹⁰⁷⁴。これに共鳴したフスは教会批判を展開し、宗教改革の先駆けとなる。なお、このボヘミアの神学者はドイツ(神聖ローマ帝国)支配に抵抗する民族運動でも指導的役割を果たしており(当時、ボヘミアは神聖ローマ帝国に属していた点について、512頁を参照されたい)、地元ボヘミアの住民に支持されたフスはプラハ大学の学長にも選ばれている。

1410年、教会はフスに破門を言い渡した。また、4年後、フスを前出のコンスタンツ公会議に呼び出し、主張の撤回や改心を求めたが、彼は応じなかつたため、^{ふんけい}焚刑に処された。彼を支持するボヘミアの貴族や都市民の間で教会に対する非難が沸き起こる中、ボヘミア王¹⁰⁷⁵が教会に歩み寄ると、王に対する批判も強まった。さらに、ドイツ人との対立も激しくなったため、神聖ローマ皇帝のジギスムント¹⁰⁷⁶が「十字軍」を結成して鎮圧に乗り出すと、激しい戦闘に発展した。フス戦争(1419～1436年)と呼ばれるこの戦いは、ボヘミアの農民も参加して皇帝に抵抗したため、17年間、続いた。武力による平定を断念した皇帝がフス派の信仰を認めると、ようやく戦闘は収まるが、教会との対立は残った。約200年後、フス派が反乱を起こすと、**30年戦争**が勃発する(355頁参照)。

6.3. 百年戦争(1337～1453年)

ウィリアム1世(在位1066～87年)によるノルマン・コンクエスト以降(223頁参照)、イングランド王はフランス王の封臣としてフランス国内にも封土を持っていたが、カペー家のフランス王シャルル4世(在位1322～1328年)が嗣子なく死去すると、イングランド王エドワード3世(在位1327～1377年、ノルマン朝ではなく、プランタジネット朝、224頁参照)は、母親がカペー家の出身であることを理由に王位継承を主張した。フランスの貴族はこれを退け、シャルル4世の従兄のヴァロワ伯を新しい王に選出した。エドワード3世は一旦、これを受け入れたが、新国王(フィリップ6世、ヴァロワ朝の初代国王)が封土を没収すると反発し、王位継承を争うようになった。エドワード3世が海を渡ってフランスに攻め入ると、**百年戦争**が勃発する。なお、実際には100年を超えたこの期間、絶えず戦闘が行われていたわけではなく、和平が訪れた時期もあった。また、フランスの貴族の中にはイングランド王の側につく者もあり、フ

¹⁰⁷⁴ ウィクリフは「教皇のバビロン捕囚」が行われ、ローマ・キリスト教会や教皇の権威が失墜している1375年、『世俗の支配権について』を出版し、当時の教会の実態を批判している。1378年に教会が分裂すると、彼の批判は激しさを増した。

¹⁰⁷⁵ 当時のボヘミア王ヴェンツェル(ヴァーツラフ4世、ルクセンブルク朝)は、1376～1400年、神聖ローマ皇帝を兼ねていたが、失政を理由に廃位に追いやられた。

¹⁰⁷⁶ なお、神聖ローマ皇帝のジギスムント(ルクセンブルク朝、在位期1410～1437年)は、フス戦争が始まる直前(1419年)、異母兄のヴェンツェル(ヴァーツラフ4世、注1075参照)の跡を継ぎ、ボヘミア王にもなる。

ランスは激しい内戦状態に陥った点にも注意を要する。フランス国王を支援したジャンヌ・ダルクは国王と敵対したブルゴーニュ軍に捕らえられ、イングランド側に引き渡され、後に処刑された。

百年戦争は4期に分けることができ、第1期(1337～1360年)には、エドワード3世の長男であるエドワード(黒太子、502頁の注1435参照)が活躍し、フランス軍を破った。

第2期(1369～1380年)ではフランスが戦勢を回復し、1375年、和約が成立する。その後、散発的な戦闘が勃発したが、1396年に休戦協定が結ばれた。

第3期(1413～1428年)、イングランド軍がパリを占拠し(1420年)、フランス王のシャルル7世(在位1422～61年)は国内を転々とした。1428年、英軍はフランス王家の要地であるオルレアン¹⁰⁷⁷を包囲したが、ジャンヌ・ダルクがこの都市の解放に成功する。同年、彼女の助けを借りたシャルル7世は、フランス北部のランスで正式に国王として即位した。その後、国王はパリ奪還を図ったが、成功しなかった。また、1435年には英仏間で和約が成立したが、すぐに破棄され、第4次戦争が勃発する。

ジャンヌ・ダルク(1412～1431年)は百年戦争末期、フランスを危機から救い、当時、国内を転々としていたシャルル7世の即位に貢献した中世の少女である。神の命を受けたと確信した彼女はイギリス軍に包囲されていたオルレアンに行き、解放に成功した(1429年)。そのため、彼女は「オルレアンの少女」として称えられたが、ロレーヌ地方の出身である(596頁参照)。

オルレアン解放の翌年、ジャンヌ・ダルクは敵に捕えられると、ルーアンの教会法廷(魔女裁判、356頁の注1116参照)で異端と宣告され、同市の広場で火刑に処された。フランス国王のシャルル7世は身代金を払わず、ジャンヌ・ダルクを見殺しにしたとされているが、百年戦争終結直後の1455年、復権裁判を行い、彼女の名誉を回復した。また、19歳で死去してから約500年が経過した1920年、彼女は列聖を受け、フランスで最も崇拜されている聖人になる(274頁参照)。

右図：Jean Pichore 作

“Miniature ornant *Les vies des femmes célèbres* d'Antoine Dufour, ms. 17, folio 76 verso, Nantes, musée Dobrée, 1504-1506”



第4期(1436～1453年)、フランス軍は反撃に転じ、1436年、パリを奪還した。また、1450年にノルマンディー、1453年にボルドーを取り返す。その結果、大陸におけるイングランドの支配地は一掃され(ただし、ドーバー海峡に面するカレー¹⁰⁷⁸を除く)、百年戦争はようやく終わった。

実際には100年以上、続いた戦争によって農村は荒れ果て、領主制、つまり、封建制は衰退した。他方、戦争で勝利を収めた王の権威は高まっていく。

◎ 教皇のバビロン捕囚(アヴィニオン捕囚 1309～1377年)

百年戦争は十字軍の遠征(417頁参照)が終わった後に勃発しているが、開戦時、前述した教皇のバビロン捕囚はまだ続いており、教皇は住まいを南仏に遷されていた。フランスの財政は長引く戦争で疲弊したのに対し、教皇庁は地域の金融業や商業と連携し隆盛し、後世、「アヴィニオン」は世界文化遺産に登録された(注1072参照)。

¹⁰⁷⁷ オルレアンはフランス中央部にある都市で、パリに隣接するサントル＝ヴァル・ド・ロワール地域圏の首府である。パリからは南西に約130kmの距離にあり、首都への侵攻を防ぐ最後の砦とされていた。

¹⁰⁷⁸ カレーは百年戦争初期の1346年、エドワード3世が占拠して以降、大陸におけるイングランドの要地となり、その主要輸出品である羊毛を扱う港も設置された。フランスが奪回したのは1558年である。なお、1994年5月、カレーと英フォークストンの間で英仏海峡トンネルが開通し、11月には高速列車ユーロスターの運行が開始された。

6.4. 東ローマ帝国の消滅

百年戦争が終結した 1453 年、東欧では 1000 年以上に亘り存続していた東ローマ帝国（ビザンツ帝国）がオスマン帝国に滅ばされた。ブルガリア、ルーマニア、セルビア等はすでに 14 世紀末に攻略されており、バルカン半島はほぼ全域がイスラム勢力に支配されることになる（422 頁参照）。もっとも、キリスト教徒には信仰の自由が保障されていたため、南欧が過度にイスラム化されることはなかった（413 頁参照）。

なお、当時、モスクワ大公国はまだモンゴルに支配されていたが、1473、大公のイヴァン 3 世は最後の東ローマ皇帝の姪を妃に迎え、東方教会の承継を自負するようになる（263 頁参照）。

6.5. スペイン統一と国土回復運動（レコンキスタ）

フランスの南方に位置するイベリア半島では、1479 年、カスティリヤ王国とアラゴン王国が統合し、スペイン王国が誕生した（485 頁参照）。国王は敬虔なカトリック教徒であり、祖国統一の勢いに乗ったキリスト教徒は半島からイスラム教徒を追い出すことに成功する（国土回復、レコンキスタ）。なお、それが実現した 1492 年には¹⁰⁷⁹、イザベル女王の支援を受けたコロンブスが新大陸アメリカに到達している。こうして、ポルトガルに続き、スペインでも大航海時代の幕が開き、両国は海洋帝国としての地位を築いていった（486 頁以下参照）。



15 世紀のヨーロッパ¹⁰⁸⁰

なお、上掲の地図で神聖ローマ帝国は記載されていない。帝国の領域について、528 頁の地図を参照されたい。15 世紀、代々の神聖ローマ皇帝を輩出していたハプスブルク家（地図中の Habsburg）はオーストリア領ブルゴーニュ（Österreich-Burgund）、ボヘミア（Böhmen-Ungarn）、ハンガリー（Ungarn-Böhmen）を所領としていた。

デンマーク、スウェーデン、ノルウェーの 3 国はカルマル同盟を結成し、デンマーク国王が君主を務めていた（83 頁参照）。

¹⁰⁷⁹ なお、ポルトガルは、それよりも 250 年早い 13 世紀中頃、国土回復を実現していた（496 頁参照）。

¹⁰⁸⁰ 画像出典 https://www.euratlas.net/history/europe/1500/de_index.html#google_vignette

15 世紀のヨーロッパについて、Stadtverwaltung Königsberg in Bayern, Europa im 15. Jahrhundert, in <https://koenigsberg.de/regiomontanus/europa-im-15-jahrhundert> を参照されたい。

7. 古典の再生 (ルネサンス)

英仏が百年戦争を繰り広げ、西方教会は大分裂を引き起こしていた 14 世紀、イタリアの諸都市¹⁰⁸¹ではルネサンス (Renaissance) と呼ばれる文化運動が始まり、15～16 世紀にかけて隆盛した。ルネサンスは「再生」という意のフランス語であり、古代ギリシアやローマの文化、つまり、ヨーロッパの古典を理想とし (129 頁参照)、それを模範にしながら文芸活動を行うことを指す。なお、欧州の古典はキリスト教が広まる前に創出されており、それを再評価するルネサンスは宗教や教会の権威に囚われない精神活動であるが、キリスト教を古典と結びつける試みでもある。また、当時、主流であったゴシック様式 (222 頁の注 667 参照) から脱却し、新しい様式、つまり、ルネサンス様式を創造する文化運動であった。

ルネサンスは思想、文学、美術、建築等、多くの分野で発展したが、その先駆者とされる詩人のペトラルカ (1304～1374 年) は共和政ローマを賞賛するとともに、人間は自分で自分の運命を選び、自らの意志で行動できると説いた。彼の思想に象徴されるように、ルネサンス期は人間発見・精神探求の時代である。教会の権威から人間を解放するルネサンスの精神 (人文主義・ヒューマニズム、113 頁参照) は宗教改革や市民革命の理念に昇華した。その一方、絵画は教会の影響を強く受け、宗教をテーマにした作品が多数、制作されている (138 頁参照)。

なお、ルネサンス中期の 1453 年、東ローマ帝国はオスマン帝国に滅ぼされており、イタリア半島に逃れてきた古代ギリシア研究者はルネサンスの発展に貢献した。また、8～9 世紀、アラビア人 (イスラム教徒) は古代ギリシアの文献を翻訳して残しており、彼らの功績が古典の再生を支えた (415 頁参照)。

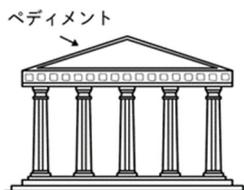
ルネサンス期、イタリアと呼ばれる国はまだ成立しておらず (369 頁参照)、イタリア半島には多数の都市国家が存在していた。半島北部の領主ないし名士 (特に、フィレンツェのメディチ家) は文芸を奨励し、特有の宮廷文化を生み出す。ミケランジェロ (1475～1564 年、153 頁参照) はこのようなパトロン¹⁰⁸¹の支援を受けた芸術家の一人であった。なお、彼やラファエロ (1483～1520 年) が設計・建造に携わった聖ピエトロ大聖堂 (251 頁参照) はルネサンス建築・芸術の最高傑作と評されている。

12 世紀、ライン川沿いにはゴシック様式の大聖堂が次々と建てられた (ケルン大聖堂、パリのノートル・ダム大聖堂について、63 頁参照)。この様式は尖塔、アーチを架けた飛梁、ステンドグラス等を特徴とするのに対し、ルネサンス期のフィレンツェでは、ゴシックに比べると簡素で、ギリシア建築をモデルにした左右対称の建築様式が考案され、その他の都市に広まっていった。ギリシア建築の特徴である「ペディメント」も好んで用いられた。

古典が尊重される中、ルネサンス後期の 16 世紀には「マニエリスム」と呼ばれる新しい様式が人気を博す。その代表格であるレドントーレ教会 (画像右) は「ペディメント」を複数持ち、古典の形式にこだわらない外観を呈している。なお、古代ギリシアの建築物でペディメントは一つしか使用されていない (314 頁参照)。



レドントーレ教会 (イタリア・ヴェネツィア)



柱の上に置かれる三角形の破風^{はふ}を「ペディメント」と呼ぶ。

¹⁰⁸¹ ジェノヴァ、ピサ、ヴェネツィア等の港湾都市 (海洋共和国、208 頁の注 632 参照) だけではなく、フィレンツェやミラノといった内陸都市が含まれる。中でも、フィレンツェはメディチ家の所領であり、ルネサンスの中心地となった。

前述したミケランジェロやラファエロと共に「ルネサンスの三代巨匠」の一人とされる**ダ・ヴィンチ** (1452～1519年) は『モナ・リザ』(左下)、『受胎告知』や『最後の晩餐』(139頁参照)といった名画を残した。彼は自然科学の分野でも優れた功績を挙げたため、「万能の天才」と呼ばれている。



『モナ・リザ』
ダ・ヴィンチ



『受胎告知』¹⁰⁸²
ダ・ヴィンチ

ルネサンスは古代ギリシア・古代ローマの文化、つまり、古典を復興させる精神活動であったが、彫刻や建築と異なり、絵画は残されていなかった。そのため、絵画は古典の影響を強く受けておらず、キリスト教をテーマにした宗教画が主流となる(138頁参照)。なお、ボッティチェリ(1445～1510年)の『ヴィーナスの誕生』のように、ギリシア神話を題材にした作品も制作された。

ところで、ルネサンスは、このような芸術分野に限定されるわけではない。そもそも、この文芸運動は思想や文学の領域で始まっており、キリスト教が広まる前の思想の再評価や、古代ギリシアの詩集の翻訳が盛んに行われた。その一方、当時のキリスト教の世界観を扱った作品もある。ルネサンス文学を代表する『神曲』がこれにあたり、14世紀初旬、フィレンツェの詩人**ダンテ**(1265～1321年)はこの叙事詩で、地獄、煉獄、天国の様子を描いている(煉獄について、258頁の注806参照)。16世紀初旬にはオランダ・ロッテルダム出身の人文学者**エラスムス**(1466～1536年)が『愚神礼讃』を著し、宗教改革期にあたる当時の教会や聖職者の偽善を批判した。

◎ エラスムス

今日、「エラスムス」(ERASMUS)はEUの教育奨励プログラムとして広く知られている。これは“EuRoPeaan Community Action Scheme for the Mobility of University Students”の頭文字を組み合わせた造語で、1987年、大学生の留学支援を目的として設けられた制度の名称である。その後、①域内の学校間の協力・協同や教員・生徒の留学を奨励する制度(Comenius)、②職業教育に関するプログラム(Leonardo da Vinci)等、様々な教育奨励プログラムが発足した。これらは「ソクラテス」(Socrates)の下で統括されていたが、2021年に廃止され、「エラスムス・プラス」に承継されることになった。なお、このEUの教育奨励・支援プログラムにはEU加盟国の他、ノルウェー、トルコ等が参加しており、スイスやロシアは提携国となっている。他方、2020年1月、EUから脱退したイギリスは「エラスムス・プラス」からも脱退した¹⁰⁸³。

このプログラム名の基になった**デジデリウス・エラスムス**(1466年頃～1536年)はオランダ・ロッテルダム出身の人文学者である(人文主義について、152頁参照)。なお、彼の生存時、ロッテルダムは神聖ローマ帝国に属していた。また、直接的な統治者はスペイン国王であり、オランダと呼ばれる国はまだ成立していない(54頁参照)。聖職者であった彼は『聖書』に基づく信仰の重要性を唱え、当時の教会を批判している。**宗教改革**を始めた**ルター**(350頁参照)は同時代の人物であり、エラスムスの影響を受けているが、ルターとは異なり、彼はカトリック教徒であり続けた。

¹⁰⁸² ルネサンス中期の1472～1475年頃に制作された『受胎告知』では、大天使ガブリエル(左)がマリアにイエスを身ごもっていることを伝える様子が描かれている。なお、この大天使はユダヤ教上の神の使いであるが、イスラム教を創始したムハンマドにも啓示を与えた(283頁参照)。つまり、1世紀前半に成立したキリスト教と、7世紀初旬に成立したイスラム教は共にユダヤ教を基盤にする。

¹⁰⁸³ See European Commission, Erasmus+, <https://erasmus-plus.ec.europa.eu>

ルネサンス期には、①活版印刷技術、②コンパス（羅針盤）、③火薬が発明され、後世に大きな影響を与えた。これらを「ルネサンス期の三大発明」と呼ぶ。それまで印刷には木版（文字や絵を彫り込んだ板）が利用されていたが、15世紀中頃、金属製の活字を利用した印刷技術が考案され、書物の大量生産が可能になった。これによって多くの人が『聖書』やルターの『九十五カ条の論題』を読むことができるようになると、宗教改革が進展する。また、コンパスは大航海時代を、火薬は大砲や鉄砲を生み出し、ヨーロッパ諸国の海外進出を後押しした。

8. 大航海時代

ルネサンス中期、いち早く国土回復を実現したポルトガルは海外へもいち早く進出する。1415年、アフリカ北岸のセウタ（77頁参照）をイスラム教徒から奪うと、**大航海時代**（15～17世紀）の幕が開き、アフリカ西岸に次々と交易の拠点が築かれていった。1498年、**ヴァスコ・ダ・ガマ**がインド航路を発見し、香辛料貿易¹⁰⁸⁴が確立すると、ポルトガルは黄金期を迎える（496頁参照）。

これは隣国スペインを刺激することになり、1492年、女王の支援を受け、航海に出た**コロンブス**がアメリカ大陸に到達した。こうしてスペインにも黄金期が訪れる（486頁参照）。植民地獲得に関する争いを避けるため、スペインとポルトガルは教皇に調停を依頼し、1493年、勢力の分界線（教皇子午線）を設けているが、翌年、独自にトルデシヤリス条約を制定し、世界分割について合意した。なお、1580年、ポルトガルはスペインに併合された。自治は認められていたものの、同国が主権を回復したのは1668年である（496頁参照）。

大航海時代が始まるまで地中海貿易で栄えていた北イタリアのヴェネツィアとジェノヴァはイベリア半島上の両国に投資し、間接的に大陸間貿易に関わる一方、オランダ、イングランド、フランス¹⁰⁸⁵は独自に海洋進出を果たし、アジアや北アメリカに植民地を建設した。

当時、オランダはスペインに属しており、信仰の自由を求め戦っていた（354頁参照）。イングランド（エリザベス1世）がオランダを支援すると、スペイン（フェリペ2世）は、かねてからイングランドの海賊行為に手を焼いていたこともあり¹⁰⁸⁶、世界最強を誇っていた海軍を派遣したが、壊滅的な敗北を喫した（1588年のアルマダ海戦、354頁参照）。なお、これを機に、イングランドは海外覇権をスペインから奪ったわけではない。16世紀初旬、同国やオランダはインド航路を開発し、スペインやポルトガルによる貿易の独占を打破していった。

	ポルトガル	スペイン	オランダ	イングランド
海洋進出の開始時期	15世紀初旬	15世紀末	16世紀初旬	16世紀前半
主な進出地	アフリカ北岸（セウタ）、アフリカ西岸 インド、ブラジル	中南米 フィリピン諸島	東南アジア（1602年、東インド会社） 北米（1621年、西インド会社）	北米 インド（1600年、東インド会社） オセアニア
著名な航海士	エンリケ航海王子 ディアス ヴァスコ・ダ・ガマ	コロンブス、マゼラン、ヴェスプッチ ¹⁰⁸⁷	ウィレム・バレンツ ディルク・ハルトフ アベル・タスマン	ジョン・カボット ヘンリー・ハドソン ジェームス・クック

¹⁰⁸⁴ 当初、ポルトガルはインドから香辛料を輸入していたが、後に、より高価な香辛料を東南アジアから輸入するようになる。スペインもこれに続いたが、17世紀、両国はオランダの東インド会社との競争に負け、市場から排除された。

¹⁰⁸⁵ フランスは、16世紀前半、ジャック・カルティエに北米探検を命じ、海外進出を開始した。次世紀の初旬、サミュエル・ド・シャンプランは、現カナダ・ケベック州に「ニューフランス」と呼ばれる植民地を建設している。

¹⁰⁸⁶ 16～17世紀、イングランドは他国の貿易船に対する拿捕・略奪を認めていた。中でも、フランシス・ドレークは、1577年頃、スペイン船を襲いながら世界各地を就航し、巨万の富を持ち帰ったため、エリザベス女王より爵位を授けられている。この点について、ドルーシュ編・前掲書 206頁を参照されたい。

¹⁰⁸⁷ フィレンツェ出身の**アメリゴ・ヴェスプッチ**はスペイン王室の支援を受け、幾度か新大陸に渡った。広大な大地を探検した結果、同世代のコロンブスが発見したのはアジアではなく、他の大陸であるという考えを発表すると、支持され、新大陸は彼の名で呼ばれるようになった。この点について、ドルーシュ編・前掲書 204頁を参照されたい。

諸国の海洋進出は政治的、宗教的（キリスト教の伝導）、経済的な理由（食糧の調達¹⁰⁸⁸、金銀や香辛料の取得）等、様々な理由に基づいて行われ、それまで経済面で劣っていたヨーロッパを世界中で最も裕福な地域に変えるきっかけとなる。また、資本主義の発展を促す契機にもなった。なお、諸国の繁栄は原住民の犠牲の上に成り立っており、鉄砲を持ち、戦術に長けていたヨーロッパ人は世界各地を支配し、その地に住んでいた人々を奴隷として働かせた。21世紀に入ると、大航海時代の申し子達は征服者ないし侵略者とみなされ、その功罪が問われるようになる（377頁参照）。

なお、上掲のイギリス、フランスだけではなく、ドイツ、イタリア、ベルギーも参加した「世界分割」は、大航海時代（15～17世紀）ではなく、19世紀後半から20世紀前半にかけて行われている。とりわけ、アフリカ大陸はヨーロッパ諸国によって植民地化されることになった（373頁参照）。オランダはこの世界分割に参加していないが、海外に植民地を持っていたことに変わりない（470頁参照）。

◎ 発見時代

「大航海時代」とは我が国で生まれた用語で、ヨーロッパでは「発見時代」(Age of Discovery) という語が用いられている¹⁰⁸⁹。ただし、発見された地域にはすでに人々が住んでいたため、「ヨーロッパ拡大の時代」(Age of European Expansion) という概念が新たに設けられた。欧州の面積は小さいため、この大陸上における諸国の領土も自ずと小さくなるが、アフリカ、アメリカ、アジアの広大な大陸で、本国以上に広い領土を獲得することで諸国は富を築いていった。

大航海時代の到来によって商業の中心地はルネサンスが発展したヴェネツィア、ジェノヴァ、フィレンツェといった北イタリアの港湾・商業都市（地中海沿岸）から、リスボン、セビリア、そして、アムステルダム、アントワープ、ロンドンといった海洋帝国の都市へと移っていった。

¹⁰⁸⁸ 14世紀、ヨーロッパ全域で黒死病（ペスト）が流行し、人口は3分の1に減ったが、14世紀末には収まり、次の世紀には人口が増えた。食糧を確保するため、ポルトガルは海外に進出する。大航海時代がこの国で始まった理由について、フレデリック・ドルーシュ編『ヨーロッパの歴史』（東京書籍 1994年）196～197頁を参照されたい。

¹⁰⁸⁹ 合田昌史「第2章 総論 大航海時代と『長い一六世紀』」南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵『新しく学ぶ西洋の歴史 — アジアから考える —』（ミネルヴァ書房 2016年）33～35頁（33頁）を参照されたい。

【補説】中世・近世の世界図

中世に作成された世界図はラテン語で「マッパ・ムンディ」(Mappa mundi) と呼ばれている。地理的に正確ではないが、当時のキリスト教的世界観が表現されており、聖地エルサレムが中心に置かれた。地図の上半分はアジア、下半分の右側はアフリカ、左側はヨーロッパという構成になっている。これからも分かるように、上方は東であり、北ではない。

下の画像は1300年頃、ドイツ北部にあるエプストルフ修道院(Kloster Ebstorf)で作成されたと考えられている世界図を再現したもので、中世に創作されたものとしては最も描写が細かい。直径約3.5mの円の中には534の都市(地図の中央に位置するのは聖地エルサレム)、500の建物、160の川、60の島等が描かれている¹⁰⁹⁰。この世界図には、キリスト教が大きな影響力を持っていた中世の思想が反映されており、イエスの体を陸地とする。非常に小さいが、地図の中央上部には神の顔、左右両側には手のひら、また、中央下部には両足を見て取ることができる。

なお、マッパ・ムンディは1000点近く残されているのに対し、古代ギリシアや古代ローマの時代に作成された地図は見つかっていない。



エプストルフの世界図 (1300年頃)

¹⁰⁹⁰ Jürgen Wilke, Die Ebstorfer Weltkarte, Bielefeld 2001, p. 11 (footnote 14).

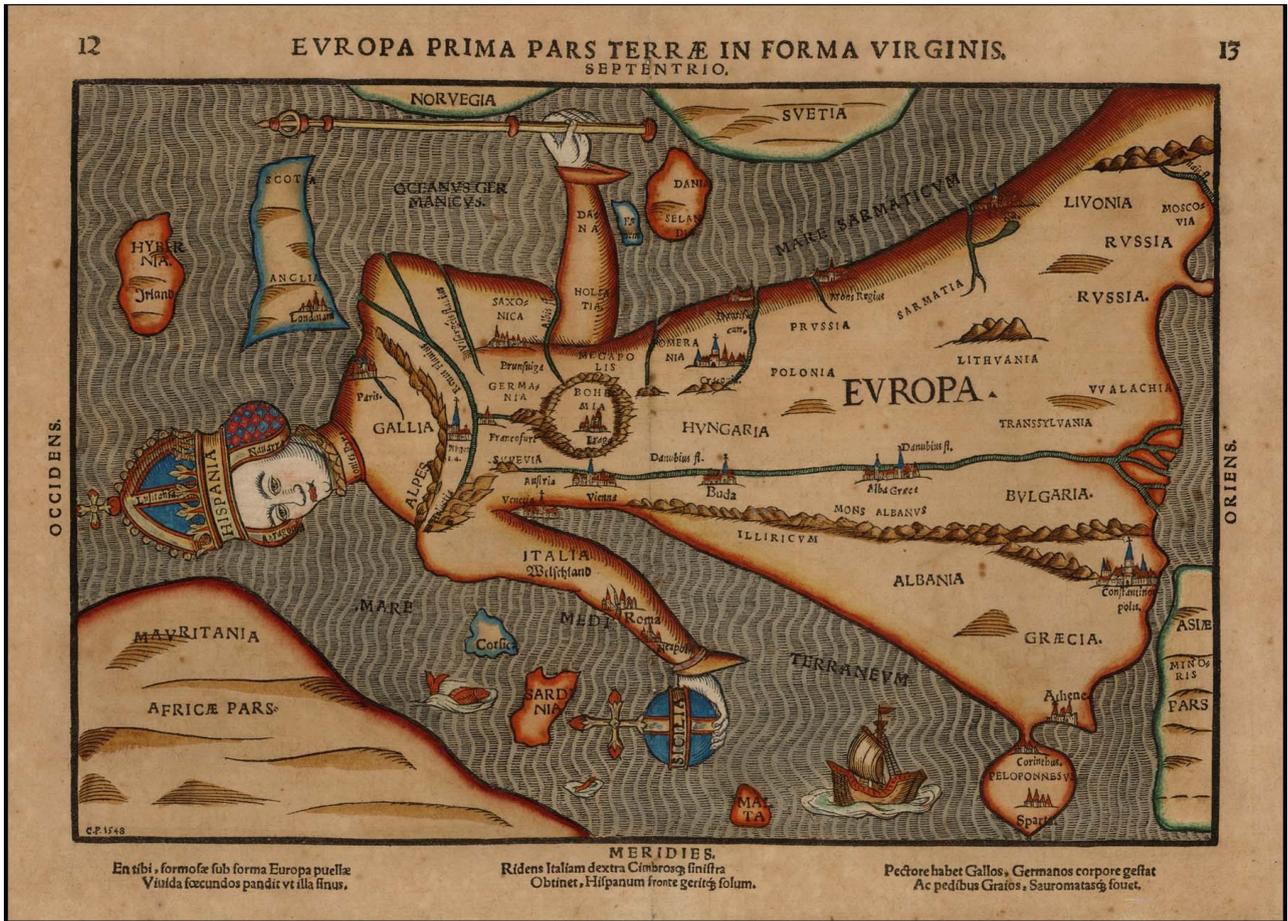
下の画像は、ブルゴーニュ公国 (535 頁参照) のジャン・マンセル (Jean Mansel) が 1460 年頃に作成した世界図で、前出の『エプストルフの世界図』と同様に、エルサレムを中心とし、上半分にはアジア、右下にはアフリカ、左下にはヨーロッパが描かれている。『エプストルフ』に比べると、シンプルであり、構成が分かりやすい。



ジャン・マンセル『世界図』(1460年頃)¹⁰⁹¹

¹⁰⁹¹ Jean Mansel, *La Fleur des Histoires*, Valenciennes, 1459-1463, manoscritto, penna, inchiostro e colori su pergamena, Bibliothèque Royale de Belgique.

女王レギーナをモチーフにしたヨーロッパの地図は、その後、多くの者によって制作されている。下の画像は、1587年、ドイツの神学者ハインリヒ・ビュンティング (Heinrich Bünting) が1581年に描いたものである。構成はオリジナルと異ならず、現チェコ西部のボヘミアが中心になっている。



ハインリヒ・ビュンディング『オイローパ・レギーナ』(1587年) 1092

¹⁰⁹² Heinrich Bünting: Itinerarium sacrae scripturae, Band 1, aus einer Ausgabe ab 1587. pp. 12-13.

【補説】ヨーロッパの中世と近代

ヨーロッパの中世は西ローマ帝国が崩壊してから東ローマ帝国が滅亡するまでの期間、つまり、476年から1453年までと捉えることができる¹⁰⁹³。古代と近代に挟まれた中世はキリスト教が人々の生活や社会全般に大きな影響を及ぼした時代であった（中世盛期について、328頁参照）。10世紀頃より世俗の封建国家が出現し、教会を支えた。聖職者は土地を寄進され、世俗の領主となる。なお、中世は騎士の時代でもあった。彼らは主君のために戦う傍ら、封土として与えられた土地を管理し、農奴（不自由な身分の農民）を支配した。教会も騎士を公認し、彼らは宗教のために戦っている（十字軍の遠征について、417頁参照）。

騎士とは文字通り馬に騎乗し戦う兵士を指す。古代ローマの時代には「エクイテス」と呼ばれていたが、当時の主戦力は歩兵であった。金属製の鎧を身に着けた騎士が現れるのは中世に入ってからであり、732年、フランク王国の宰相カール・マルテルは重装騎兵軍を編成し、イスラム教徒を撃退した（329頁参照）。孫のカール大帝の時代、歩兵よりも機動力のある騎士は広大な領土を守ることに貢献する。

彼らは馬や金属製の鎧・武器を自分で調達する必要があり、それを可能にするため、国王や主君から封土や農奴を与えられた。また、各地に騎士の居城が建てられる。なお、騎士は世襲制ではなく、主君から叙任され、騎士としての身分・称号を得た。こうして封建的な主従関係が生まれ、小規模な領主である騎士は家臣のような存在になる。

12世紀になると教皇から教会のために武器を持って戦うことが認められた騎士階級が誕生した。彼らは騎士団を組織し、国ないし地域を治めるとともに、十字軍にも参加している（119頁の注338参照）。

中世後期、騎士は称号ないし高い身分とみなされ、国王も自らを騎士として捉えるようになった。吟遊詩人として宮廷愛や十字軍について歌いながら各地を遍歴する者もいた。武勇、高潔、教会や弱者の守護、女性への貞節等、騎士が持つべきとされた徳目は**騎士道精神**（chivalry）と呼ばれた。

十字軍遠征が失敗に終わると、騎士は活動の場を失っていき、15～16世紀、鉄砲の開発によって戦法が変わると姿を消した。右の画像は最後の騎士と目されているマクシミリアン1世（577頁参照）の鎧である¹⁰⁹⁴。



これに対し、中世は東ローマ帝国の崩壊ではなく、ローマ・カトリック教会の権威を失墜させた**宗教改革**（1517年）で終わると捉える説もある¹⁰⁹⁵。中世とはローマ・カトリック教会が権勢を誇った時代区分であり（ただし、常にそうであったわけではない）、その権威は宗教改革によって失われたため、また、近代とは人間中心の合理的な思想が広まった時代区分であり、宗教改革者による学校教育や勤労の奨励は社会・経済の近代化に貢献しているため（351頁参照）、この立場は説得力に富む。それによると、近代は50年以上、遅く始まることになるが、以下に挙げるように、その後も中世の要素が存在し続けた。

- ① 近代の初期（**近世**、後述参照）、封建制はますます隆盛し、絶対王政が確立する。人々の自由・平等、宗教からの解放を柱とする啓蒙思想が発展したのは18世紀に入ってからである（358頁参照）。また、人権思想は第2次世界大戦後ようやく確立した。なお、キリスト教の信条である天動説がコペルニクスやガリレオによって否定されたのは17世紀であり、この世紀は「科学の世紀」と呼ばれている。ダーウィンが進化論を提唱したのは19世紀中頃である（258参照）。
- ② 経済面では19世紀後半に第2次産業革命が起きるまで、中世的な手工業中心の産業構造が主流であった。また、

¹⁰⁹³ Brockhaus, 2001. Die Enzyklopädie in 24 Bänden, Studienausgabe (Bd. 15), 20. Auflage, Leipzig. 異なる説について、326頁を参照されたい。

¹⁰⁹⁴ 出典 https://fr.wikipedia.org/wiki/Fichier:MET_Armures.jpg（画像は著者により切り抜いてある）。

¹⁰⁹⁵ 小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦編著『大学で学ぶ西洋史 [近現代]』（ミネルヴァ書房 2011年）はこのように見解に基づいている。

農業が主たる産業であり続けた。

- ③ 人々の生活面では 19 世紀に入っても中世的な風習が残存し、それが近代化したのは第 1 次世界大戦での敗戦を機に諸帝国が崩壊してからである (383 頁参照)。

左下の絵画はフランスの画家ギュスターヴ・カイユボットが 1877 年に制作した作品『パリの通り、雨』である。当時の最新ファッションに身を包み、パリを歩く上流階級の様子が描かれているが、まだクラシカルな出で立ちである。服装が、現在、我々が身に着けているようなスタイルに変わるのは第 1 次世界大戦の終結後、つまり、帝国主義の時代が終わってからであり (383 頁参照)、ココ・シャネル (Coco Chanel 1883~1971) の影響が強いと言われている¹⁰⁹⁶。



ギュスターヴ・カイユボット
(Gustave Caillebotte 1848~1894)
『パリの通り、雨』 (1877 年作)



女性の権利向上を訴える人々 (1900 年頃のヘルシンキ)
1906 年、フィンランドは、欧州諸国の先陣を切り、女性に参政権を与えた。
なお、日本で婦人参政権が保障されるようになるのは 1945 年である。

◎ 近代化と「ヨーロッパの没落」

前述したように、第 1 次世界大戦を機にヨーロッパの諸帝国は崩壊し (383 頁参照)、社会は近代的になったが、これは「ヨーロッパの没落」として捉えられるようにもなった。オズヴァルド・シュペンゲラーが終戦年に発表した『西洋の没落』は大きな注目を集めた。

退廃的な雰囲気が出る中、1920 年代になると、スウィング・ジャズに代表されるアメリカの大衆文化がヨーロッパの諸都市で流行し、活気に溢れるようになるが、その裏では、戦後のヴェルサイユ体制に対する不満が渦巻いていた。労働者の利益を擁護する共産主義が台頭する中、それを敵視するファシズムも勢力を増していき、1939 年、ヨーロッパは 2 度目の世界大戦に襲われる。

◎ 近世と近代

中世が終わると、合理的で人間中心の時代区分、つまり、近代が始まる。ヨーロッパで「近代」は “Modern Era/Neuzeit” と呼ばれており、これは「モダンになった時代」「新しい時代」という意である。「近代」という訳からは必ずしも明確にならないが、この時代、国家体制、社会、思想、人々の生活は「モダンで、新しく」なった。もっとも、ある時点から全てが変わったわけではなく、近代になっても中性の要素は存続した (前頁参照)。むしろ、封建制は強化され、絶対王政が確立する。国家体制や社会が劇的に変わるのは産業革命やフランス革命の後、つまり、19 世紀に入ってからであり、それまでの近代は「初期近代」(Early Modern Era/Frühere Neuzeit) と呼ばれている。なお、我が国では「初期近代」を「近世」と捉えることが多い¹⁰⁹⁷。「初期近代」ないし「近世」は 18 世紀末まで続き、19 世紀から第 2 次世界大戦までは「近代」、その後は「現代」と呼ばれる。

19 世紀初旬 (1804 年)、ナポレオンが帝政を開始したフランスは近代国家の象徴となる。また、前世紀、フランス人の啓蒙思想家 (358 頁参照) が唱えた理念が実を結び、この国の近代化に貢献した。ナポレオンの軍事侵攻を通じ、近代化の波は諸国にも波及する。

古代	中世	初期近代 近世	近代	現代
----	----	------------	----	----

¹⁰⁹⁶ 女性のパンツスタイルを生み出したのはシャネルであった。Sibylle Fritsch, Mode: Kleidungsstile und welchen Sinn sie haben, in <https://www.sn.at/145167112>

¹⁰⁹⁷ 小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦編著『大学で学ぶ西洋史 [近現代]』(ミネルヴァ書房 2011 年) 2 頁参照。

9. 宗教改革



カトリックの総本山である**聖ピエトロ大聖堂** (251 頁参照) は、326～360 年頃、聖ペテロの墓があったとされる場所に建てられた教会を起源とする。ルネサンス期に大改築が行われており、その費用を捻出するため、1515 年、教皇レオ 10 世が神聖ローマ帝国内で**贖宥状** (免罪符、258 頁の注 806 参照) を大量に販売すると、**マルティン・ルター** (1483 年～1546 年) によって厳しく批判されることになった。1517 年、帝国北部のザクセンで神学教授を務めていた彼は教会の門扉に『**九十五カ条の論題**』を貼り付け、贖宥状を買うと救われるという教皇の主張は誤っており、人は信仰によってのみ救われると説いたとされている。もっとも、当時の人々の大半は文字を読めず、その上、『論題』はドイツ語ではなく、ラテン語で書かれたため、抗議文が掲示されたとする説明は疑わしい。1521 年、教皇はルターを異端者とみなし、破門したため、ルターは新しい教派を立ち上げることになった。この神学者の活動をきっかけとするキリスト教の改革運動を**宗教改革**と呼ぶが、単に「改革」(Reformation) とすること多い。

ルターの祖国ドイツ (当時は神聖ローマ帝国) では彼を支持する諸侯も現れる一方、ローマ・カトリック教会の守護者でもある神聖ローマ皇帝の**カール 5 世** (576 頁参照) は教皇の側に立ち、ルターに改心を求めた。彼はそれに応じなかったため、国外追放処分を受けるが、ザクセン選帝侯の保護を受け、その領土内のヴァルトブルク城に身を隠した (1521～1522 年)。そして、ギリシア語で書かれていた『**聖書**』をドイツ語に翻訳する。活版印刷技術が発明された恩恵に与り、独語による経典が広まると、宗教改革が進展した (次頁参照)。

ルターの宗教改革と並行し、スイス地方では**ツヴィングリ** (1484 年～1531 年) がより徹底した改革運動を行っている。これが**カルヴァン** (1509 年～1564 年) に引き継がれ、新しい教派が西ヨーロッパに広まった (457 頁参照)。

このように、16 世紀には教会や教皇の権威を否定し、神の教えを記した『**聖書**』を信仰の基盤に据える改革運動が起きた。それに基づき新たに発足した教会をプロテスタント諸教会と言う。これに対し、教皇を首長とする従来の教会はローマ・カトリック教会ないしローマ教会と呼ばれる (243 頁参照)。

ルター派やカルヴァン派が独自の教会を設立し、カトリック教会から分離すると、西ヨーロッパは宗教的に 2 元化しただけでなく、国体や人々の生活が劇的に変わった。つまり、宗教改革は社会改革をもたらした (次頁参照)。また、教派の対立は戦争に発展し、17 世紀には最初のヨーロッパ大戦 (**30 年戦争**、355 頁参照) が勃発する。

◎ 宗教改革に対するローマ・カトリック教会の反応

15 世紀後半、つまり、ルター、ツヴィングリ、カルヴァンが宗教改革を始める前から教会内では改革運動 (教皇の権威の限定、聖職者への裁判等) が行われており、スペインのカトリック両王が主導した (485 頁参照)。次世紀の前半、改革が進展し、混乱・対立が生じると、1545 年、両王の孫にあたる**カルロス 1 世**は北イタリアのトリエント (39 頁参照) で公会議を開き、事態の收拾を試みた。なお、彼はルターを始めとする改革者が活動した神聖ローマ帝国の皇帝でもあり、皇帝としては、カール 5 世と名乗った (576 頁参照)。

公会議は 1563 年まで 18 年間、継続した。当初は改革派との和解が模索されていたが、途中で激しい**宗教戦争** (**シュマルカルデン戦争**、351 頁参照) が勃発し、末期には対立姿勢、つまり、反宗教改革といった性質が強まる。なお、ルターが糾弾した贖宥状の販売は改められたが、聖ピエトロ大聖堂の改築工事は続けられた。『**聖書**』も改訂されたが、カトリックの教義は維持される。また、改革者が禁止した聖母子像の使用や教会内の華やかな装飾は意図的に継続されたため、新教との違いが鮮明になった。このように旧教は伝統を重んじたが、美術様式は新しいスタイル (バロック) を奨励し、教会の威厳を回復するために利用した (139 頁参照) ¹⁰⁹⁸。

※ ルター派の教会とカトリック教会の違いについて、260 頁を参照されたい。

なお、1534 年、スペイン人のイグナティウス＝ロヨラは教皇に絶対服従を誓う**イエズス会**を立ち上げ、改革派と対立した。すでに 13 世紀初旬に創設されている**ドミニコ会**も異端者を排撃し、反宗教改革の先頭に立った。

¹⁰⁹⁸ Axel Gotthard, Konfession und Kultur, in <https://www.bpb.de/235718>; Historisches Lexikon der Schweiz, Katholische Reform, in <https://hls-dhs-dss.ch/de/articles/017177/>

◎ 宗教改革とヨーロッパの近代化

改革者が重視していたのは『聖書』に基盤を置く信仰であったが、当時、庶民は文字を読むことができなかった。このような状況を改善するため、学校教育制度が整備される。フィリップ・メランクトン（1497～1560年）に代表される改革派の聖職者は教育者としても名を揚げた。なお、ギリシア語で書かれていた『新約聖書』をドイツ語に訳したのはルターが最初と言われることもあるが、実際にはすでに多数の翻訳が存在した¹⁰⁹⁹。彼の功績は数多くの方言が話されていた神聖ローマ帝国において、標準的なドイツ語を確立し、それで『聖書』を翻訳したことである。活版印刷が開発され、大量印刷が可能になったこととあいまって、キリスト教の経典は広く読まれるようになった¹¹⁰⁰。彼が翻訳したドイツ語版の聖典は『ルター聖書』（Lutherbibel）と呼ばれ、現在でもルター派教会で使用されているが、カトリック教会は独自に翻訳を行い、それを用いている。

宗教改革は人文主義（113頁参照）の思想に合致していたため、大半の人文主義者は新教に改宗した。また、彼らが説いていた人間の自由、つまり、キリスト教や教会の権威からの解放、平等、寛容の理念が改革とともに広まっていく。もっとも、ルターは特権階級に与しており、農民の諸侯・領主に対する蜂起を批判した。また、改革派は異教の信仰に寛容であったわけではなく、ルターも反ユダヤ主義者であった。

このように宗教改革はヨーロッパを部分的にはあるが、近代的にした。そのため、この改革によってキリスト教や教会が支配的であった中世は終わり、近代（近世）が始まったと捉えることがある（348頁参照）。なお、今日、広く浸透している資本主義の労働理念も改革派によって生み出されている。それまで人々は生活に必要な物資を得るために働き、それ以上の労働を行う習慣はなかったが、カルヴァンは精励を神を敬うことと捉え、怠慢や何もせず過ごすこと悪とみなした。ルターが特権階級による支配を支持し、農民を抑圧したように、カルヴァンの思想は労働者の搾取につながった¹¹⁰¹。

10. 宗教戦争

16世紀の宗教改革に端を発する新旧教徒間の武力抗争を**宗教戦争**と呼ぶ。この戦いは新教にもルター派、ツヴィングリ派、カルヴァン派等、種々の教派があるが、何れも旧体制を批判する政治権力と結びついて領域支配を実現する一方で、カトリック教会側も政治権力と結束し、宗教改革の進展を食い止めようとしたために発生した。新教徒側からすると、信仰の自由を獲得するための戦いであったが、カトリック教国からの独立を目指す国家建設運動にもなる。

宗教戦争の例としては神聖ローマ帝国（ドイツ）の**シュマルカルデン戦争**、フランスの**ユグノー戦争**、**オランダの独立戦争**、スペインの無敵艦隊（アルマダ）とイギリス海軍の戦い、初期の**30年戦争**等が挙げられる。

1) シュマルカルデン戦争（1546年7月～1547年5月）

1521年、神聖ローマ皇帝の**カール5世**（576頁参照）はルターを断罪し、彼の著作の頒布・閲読を禁止する決定を下したが（**ヴォルムス勅令**）、帝国全土でそれを執行する権限を持っていなかったこともあり、実施されなかった。しかし、1530年、ルター派が教義をまとめて帝国議会に提出すると、皇帝はそれを採択しないばかりか、ヴォルムス勅令の施行を発表した。新教徒の諸侯は処刑されるおそれがあったため、彼らはザクセン選帝侯の呼びかけに応じて、シュマルカルデン¹¹⁰²に集まり、団結して皇帝の攻撃に備えることを決めた。1531年2月、18人の諸侯が結成したのが**シュマルカルデン同盟**であり、その設立をもって新教は広まっていく。

同盟が設立された1530年代、皇帝はフランスとの戦争やオスマン帝国の脅威（424頁参照）に備えなければならなかった。そのため、同盟と対戦する余裕はなかったが、同盟の結成から15年が経過した1546年、討伐に乗り出す。すると、それを察知した同盟が先に攻撃をしかけ、戦争の火蓋が切られた。

¹⁰⁹⁹ Evangelische Kirche Deutschland (EKD), Martin Luthers Bibelübersetzung, in <https://www.ekd.de/martin-luthers-bibeluebersetzung-71551.htm>.

¹¹⁰⁰ See ntv, Was geht uns die Reformation noch an?, in <https://www.n-tv.de/20108439.html>

¹¹⁰¹ Ibidem.

¹¹⁰² シュマルカルデン (Schmalkalden) とはドイツ中央部にある町で、中世よりヘッセンに属す。

当時、皇帝はスペイン王を兼ねており(576 頁参照)、スペイン軍を投入して戦いを優位に進めた。1547 年 4 月、ミュールベルクの戦いで大勝利を収めると、シュマルカルデン同盟は事実上、崩壊する。

戦いを制したことで皇帝の権勢は頂点に達した。しかし、内部から離反者が出たため、ルター派を弾圧する試みは失敗し、1552 年 8 月、カール 5 世は新教を容認するに至った。

1555 年 9 月、帝国議会はルター派の信仰を認めるとともに、諸侯には教派を選択する自由を、また、領民には領主を選び移住する自由を保障する決定を下した。これは議会在帝国南部のアウグスブルクで開催されたことにちなみ、**アウグスブルクの和議**と呼ばれているが、成立させたのはカール 5 世ではなく、弟のフェルディナント(577 頁参照)である。翌年、カール 5 世は生前退位し、弟に帝位を譲った。なお、この和議は**ヴェストファーレン条約**(579 頁参照)で確認され、帝国内の諸邦は教派単位で形成されることになる(君臣信教一致の原則)。

2) ユグノー戦争(1562 年 3 月～1598 年 4 月)

ユグノー(Huguenot)とはフランスにおけるカルヴァン派(457 頁参照)の新教徒を指す。1562 年、旧教派が彼らを殺害すると、教派間の対立が激化し、**ユグノー戦争**と呼ばれる内戦に発展した。戦いは 36 年も続き、状況を有利に展開するため、要人の一人である**アンリ 4 世**¹¹⁰³は改宗を繰り返すことになった。

フランス国王は新教に対し長く曖昧な態度をとってきたが、フランソワ 1 世(在位 1515～1547 年、ヴァロワ朝)の治世末期より反プロテスタントの方針が出始めた。跡を継いだアンリ 2 世(在位 1547～1559 年)は、1551 年、シャトールブリアン¹¹⁰⁴の勅令を出し、新教徒への弾圧を強化した。国王が変わり、1562 年、一転して新教の信仰を認める勅令が出されると¹¹⁰⁴、旧教徒が反発し、日曜礼拝に集まっていたユグノー 74 名を殺害する事件が発生する(ヴァシーの虐殺)。これを機に両教徒間の対立は激化し、フランスは内戦状態に陥った。

戦争は 1562 年から翌年までを第 1 次とし、第 8 次まで続いた。「三アンリの戦い」¹¹⁰⁵と呼ばれる最後の会戦では、国王のアンリ 3 世が彼を見限った旧教徒に暗殺される事件が発生する。1589 年、彼の親族で、新教徒のアンリが新国王**アンリ 4 世**として即位するが(**ブルボン朝**の開始)、新教に対する反発は根強く、とりわけ、パリの住民は新教徒の国王を受け入れなかった。1593 年、彼はカトリックに改宗し、ようやく首都に入ることができた。その 5 年後、彼が**ナントの勅令**を出してプロテスタントの信仰を認めると、ユグノー戦争は終わった。

なお、両教徒間の対立はその後も続いた。また、新教の信仰を認めた国王への反発も根強く残り、アンリ 4 世は、1610 年、狂信的な旧教徒に殺害された。これを受け、長子のルイ 13 世が 8 歳半で即位した。

1627 年、新国王の宰相を務めていたリシュリーは、ユグノー弾圧を再開した(その一方で、フランスは、ハプスブルク家に対抗するため、新教徒側について 30 年戦争に参加する)。また、1685 年、ルイ 14 世がナントの勅令を廃止すると、数 10 万のユグノーがプロイセン、イングランド、オランダ等に逃れた。

◎ ベルリンの「フランス聖堂」と「ジャンダルメン広場」

1961 年から 28 年間、ベルリンはコンクリートの「壁」で東西に分断されていた(404 頁参照)。現在でも、この都市の中央部に残されている検問所(チェックポイント・チャーリー)は観光スポットとして、当時とは全く異なる自由の雰囲気を訪れる人々に与えている。その脇に建てられている教会も「自由都市」¹¹⁰⁶

¹¹⁰³ 彼は**ナバラ王国**の君主としてはエンリケ 3 世(アンリ 3 世、新教徒)と名乗り、親族のフランス国王アンリ 3 世(旧教徒)が暗殺されると、新しいフランス国王となり、旧教に改宗した(注 1105 参照)。なお、ナバラ王国とはフランスとスペインの国境沿いにあった小国である。本文中で述べたように、1589 年、国王のエンリケ 3 世がフランス国王アンリ 4 世(ブルボン朝の始祖、460 頁参照)として即位し、フランスに併合された。

¹¹⁰⁴ アンリ 2 世の死後、長男のフランソワ 2 世(在位 1559～1560 年)が即位したが、翌年、死去すると、3 男のシャルル 9 世(在位 1560～1574 年)が跡を継いだ。シャルル 9 世は 10 歳で即位したため、母親のカトリーヌ・ド・メディシスが摂政を務めており、本文中で挙げた新教の信仰を認める勅令は彼女によって出されている。

¹¹⁰⁵ 「三アンリの戦い」(1585～1589 年)という名称は、①フランス国王のアンリ 3 世(カトリック)、②カトリック同盟の首領アンリ、③ナバラ国王のアンリ(プロテスタント)と、3 人のアンリが対立したことに由来する。

¹¹⁰⁶ 「自由都市」とは、一般に、中世、ローマ・カトリック教会の大司教ないし司教から自治を許されていた都市を指すが(531 頁参照)、ここでは「自由を象徴する都市」という意で用いられている。

ベルリンを象徴する建築物の一つにあたり（下掲の画像の右）、その原型は今から 300 年以上前の宗教戦争期、フランスから移り住んだユグノーによって建てられた。

1685 年 10 月半ば、ナントの勅令が廃止されると、その 10 日後、ベルリンを治めていたフリードリヒ 3 世（注 1108 参照）はユグノーの受入れを表明した。これは彼が新教徒であったこともあるが、30 年戦争（355 頁参照）で激減した人口を回復させるためでもあった。約 2 万のフランス人が彼の領地に移住し、その 3 分の 1 はベルリンに新天地を求めた結果、この都市の住民の 5 人に 1 人はフランス人になる¹¹⁰⁷。

当初、移住してきた新教徒は現地の教会で祈りを捧げていたが、1705 年、独自の教会を建設し、「フランス・フリードリヒシュタット¹¹⁰⁸教会」と名付けた。また、1785 年、前出のフリードリヒ 3 世の孫によって丸屋根の付いた塔が増設されると、「フランス・ドーム」と呼ばれるようになる¹¹⁰⁹。なお、「ドーム」(Dom)とは「丸屋根」という意であるが、ヨーロッパでは通常、「聖堂」を指す。

ベルリンのフランス聖堂は第 2 次世界大戦中、連合軍の空爆を受け、破壊されたが、東ドイツ時代に再建されている。また、ドイツ統一後に大規模な修築が行われ、現在に至る。礼拝はドイツ語で行われるが、毎月 2 日曜日の礼拝ではフランス語が併用される。

聖堂はドイツ人の教会と同じ歴史を歩んでおり、その向かいにはルター派の「ドイツ聖堂」が、また、両聖堂の間には「コンサートホール・ベルリン」(Konzerthaus Berlin) が建てられており、これらの建物に囲まれた「**ジャンダルメン広場**」(Gendarmenmarkt) は古代ギリシアとローマの建築様式が融合した歴史的空間になっている（**新古典主義**、140 頁参照）。広場はクリスマス・マーケット（ほとんどのクリスマス市とは異なり、入場は有料）が開設されることでも知られている。なお、フランス聖堂の正面はこの広場の反対側にあり、下の画像（右の建物）に写っているのは背面である。他方、現在、ドイツ聖堂は博物館として使用されており、礼拝は行われていない。

「ジャンダルメン」という広場の名称は「武装した男性達」(Gens d'armes) という意のフランス語に由来しており、18 世紀前半、「ジャンダルメン」と呼ばれる騎兵隊の厩舎がこの広場に設置されていた。当時、プロイセン（26 頁参照）は絶対王政が頂点に達していたフランスをモデルにしながら軍隊を整えており、「ジャンダルメン」を強化したフリードリヒ・ヴィルヘルム 1 世（1688～1740 年）は「軍人王」の異名を持つ。彼の 3 男で跡を継いだフリードリヒ 2 世（1712～1786 年）はフランスからヴォルテール（358 頁の注 1117 参照）を招聘してプロイセンの近代化や中央集権化を図り、列強の仲間入りを果たす。



ベルリンの旧東ドイツ地区にあるジャンダルメン広場 (Gendarmenmarkt) のパノラマ写真

※実際には「コの字型」で並んでいる。

左より、ドイツ聖堂、コンサートホール・ベルリン、フランス聖堂

画像出典 <https://www.gendarmenmarkt.de/>

¹¹⁰⁷ Tobias Sauer, Hugenotten in Berlin, G/GESCHICHTE 6/2015 „Die Hugenotten“.

¹¹⁰⁸ 「フリードリヒシュタット」(Friedrichstadt) とはベルリンの中央部にある市街地である。ブランデンブルク選帝侯のフリードリヒ 3 世（1657～1713 年）にちなみ名付けられ、「フリードリヒの市」という意を持つ。彼はプロイセン公国の君主も同時に務めており、スペイン継承戦争（487 頁参照）で神聖ローマ皇帝の側についたため、その報償として、1701 年、「プロイセンにおける王」という称号の使用を許された。同年、彼は即位し、フリードリヒ 1 世と名乗った。これを機に、プロイセンは公国から王国に変わり、同君連合を結成していたブランデンブルクはプロイセン王国の一部として目されるようになる。See Monika Wienfort, Geschichte Preußens, Beck 2008, p. 7.

(参考) 歴代のプロイセンの王

フリードリヒ 3 世 (フリードリヒ 1 世) → フリードリヒ・ヴィルヘルム 1 世 → フリードリヒ 2 世

¹¹⁰⁹ Französische Kirche, Geschichte, in <https://www.franzoesische-kirche.de/de/ueber-uns/geschichte>.

3) オランダ独立戦争 (80年戦争 1568年～1648年)

1568年、ネーデルラント北部(現オランダ、54頁参照)の新教徒は旧教国スペインの弾圧に反発し、蜂起した。途中で12年の休戦があったが、スペインが独立を承認するまで80年を要したため、この戦いは**80年戦争**とも呼ばれる。

※ スペインがネーデルラントを支配した経緯について、576頁参照

商工業が栄え、リベラルな気風の強いネーデルラントの北部では、カルヴァン派(457頁参照)の新教が広まったが、1556年、**カルロス1世**(神聖ローマ皇帝としてはカール5世)が引退し、長男の**フェリペ2世**(468頁参照)が跡を継ぐと、新教徒は弾圧を受けるようになった。カトリックの国王は都市の自治権を制限し、重税を課したため、旧教徒の中からも反発が起き、1566年、民衆運動に発展する。

1568年、フェリペ2世は弾圧を強化し、旧教への改宗を強制したため、**ヘーゼン**と呼ばれる新教徒は反発を強め、**オラニエ公ウィレム**¹¹¹⁰を擁立して蜂起した。国王軍の反撃にあったウィレムは国外に逃れるが、逃亡先から戦闘を続けた。その成果もあり、1572年、新教徒はホラント州(Holland)とゼーラント州の占拠に成功し、**ウィレム**を統領として迎え入れた。

勢いに乗った新教徒は、1576年、ネーデルラント全域の制圧に成功したが、旧教徒の多い南部の10州(アラス同盟)はスペインと和平を結んで離反したため、1579年、北部7州(469頁の注1362参照)で**ユトレヒト同盟**を結成し、戦闘を続けた。また、1581年、ウィレムを初代オランダ総督に任命し、スペイン国王による統治を否定するに至った。これは実質的な独立宣言であるが、スペインはそれを認めず、戦争を継続した。

戦況が膠着する中、1584年、ウィレムがカトリック教徒に暗殺される事件が発生する。指導者を失った新教徒は国教会を立ち上げ、ローマ・カトリック教会から独立していたイングランドに支援を要請することになった。エリザベス1世がそれに応じると、この国の海賊行為に手を焼いていたスペインは、イングランド討伐の好機と捉え¹¹¹¹、海軍を派遣したが、無敵艦隊は苦戦を強いられた上、嵐に遭って壊滅した(1588年7～8月の**アルマダ海戦**)。なお、「アルマダ」(Armada)とはスペイン語で「海軍」という意で、当時、世界最強を誇っていた。

その10年後(1598年)、フェリペ2世が71歳で亡くなった。さらに約10年後(1609年)、跡を継いだ息子のフェリペ3世が休戦に応じると、オランダは実質的に独立を達成し、**ネーデルラント連邦共和国**が成立する。しかし、1621年に休戦期間が終わると、戦闘が再開された。オランダは神聖ローマ帝国からの独立も求めて**30年戦争**に介入し、1648年まで戦った。この年に結ばれた講和条約においてスペインは独立をようやく承認したため(579頁参照)、80年も続いた戦いは**オランダ独立戦争**と呼ばれているが、新教徒は信仰の自由を求めて蜂起したため、オランダでは「独立戦争」として捉えられることはあまりない¹¹¹²。



Cornelis Kruseman 制作(1797-1857)

1559年、ネーデルラントに到着し、ウィレム(右)を非難するフェリペ2世
ホラント州総督のウィレムは新教徒側に立ってスペインへの反乱を指揮していた。

¹¹¹⁰ **オラニエ公ウィレム1世**(沈黙公 1533～1584年)はドイツ中西部に所領を持つ**ナッサウ家**の出身である。1544年、父方の従兄のルネ・ド・シャロンよりオラニエ公(仏語ではオランジュ公)の家督を相続した。なお、オラニエ公は南フランスの**オランジュ公国**を所領とし、代々、**ブルゴーニュ公**に仕えていた。後者の本領はフランス北東部にあったが、15世紀後半、ネーデルラントも支配するようになる。ところが、その数年後、当主は敗死し、家督はハプスブルク家に移った(535頁参照)。その結果、ウィレムはハプスブルク家に仕えることになる。

11歳でオラニエ公となったウィレムはハプスブルク家領のネーデルラントで育った。1559年には、スペイン国王(ハプスブルク家出身で、**ブルゴーニュ公**を兼ねていた)の**フェリペ2世**によってホラント州の総督に任命されるが、フェリペ2世が新教徒への弾圧を強めると、彼らの側に立って反乱を起こした。また、1579年には**ユトレヒト同盟**を結成し、スペインと戦った。1581年、ウィレムはフェリペ2世の統治を否定し、初代オランダ総督に就任するが、独立を達成する前の1584年、暗殺された。しかし、実質的な初代国王とみなされている。

なお、彼の代、ナッサウ家は家名を**オラニエ=ナッサウ家**に改めており、現オランダ国王は後者の当主である。

¹¹¹¹ エリザベス1世は、1587年、自らを頼ってきたスコットランド女王で、**旧教徒**のメアリー・ステュアートを処刑しており(503頁の注1436参照)、これもフェリペ2世がイングランドに攻撃をしかける理由になる。

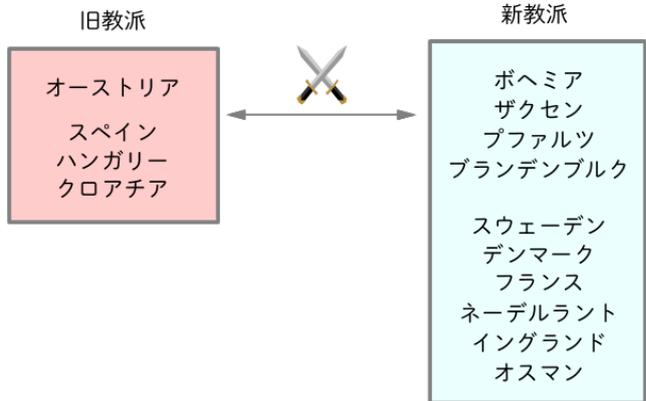
¹¹¹² この点について、森田安一(編)『スイス・ベネルクス史』(山川出版 1998年) 265～266頁を参照されたい。

4) 30年戦争 (1618年～1648年)

30年戦争とは1618～48年、神聖ローマ帝国を主戦場として行われた宗教戦争の総称であり、多数の国・諸邦が参戦したため、最初のヨーロッパ大戦と目されている。

オーストリア領ボヘミア¹¹¹³では、すでに15世紀初旬、つまり、宗教改革の100年前、神学者のフスが教会改革運動を行っている。彼は主張を曲げなかったため、処刑されたが、ボヘミアではフス派の新教が広まった(337頁参照)。

17世紀初旬、ボヘミア国王のフェルディナント2世(1619年には神聖ローマ皇帝にもなった)が国民に旧教への改宗を強制すると、新教徒は反乱を起こした。彼らの蜂起は短期間の内に神聖ローマ帝国全土に広がり、30年戦争が勃発する。事態は新教国のデンマークが1625年、スウェーデンが1630年、さらには旧教国のフランスが1635年、何れも新教徒側(ボヘミア、ザクセン等)に立って参戦する状況にまで悪化した。なお、フランスが新教徒に加担したのは神聖ローマ帝国の帝位を独占していたオーストリア=ハプスブルク家に対抗するためである。その結果、戦争後期には宗教戦争としての性質が失われ、ルイ14世の権勢が誇示されることになった。



30年にも及ぶ戦争の舞台となった神聖ローマ帝国では農村も軍隊による略奪の被害を受け、国全体が荒廃した¹¹¹⁴。そのため、1644年、皇帝が譲歩し、領内西部のヴェストファーレン¹¹¹⁵地方で講和会議を開くと、4年後、**ヴェストファーレン条約**(ラテン語読みでは**ウエストファリア条約**)が締結され、戦争はようやく収束した。多数の国が当事者となったこの条約は「近代国際法の祖」とされており、それによって、フランスはアルザス地方(594頁参照)を、また、スウェーデンはブレーメンを含む北ドイツの主要地を獲得した。信仰の自由を求め、スペイン(スペイン=ハプスブルク家の国王フェリペ2世)と戦っていたオランダも会議に参加し、その独立が承認された。なお、神聖ローマ帝国における教派の対立は、新教徒にも信教の自由を保障することで収まった(アウグスブルクの和議の再確認、352頁参照)。



講和会議が開かれたミュンスター(現ドイツ西部)に向かうオランダ大使のアドリアン・ポー(Adriaan Pauw) 会議には16ヶ国、140の神聖ローマ帝国内の諸邦、その他の38勢力が参加した。なお、この地域に山はない。

¹¹¹³ ボヘミア(ベーメン)は現在のチェコ西部にあたる地域である(512頁参照)。

¹¹¹⁴ 30年戦争により、ドイツ地方の人口は3分の1近く減ったとされている。See Generaldirektion der Staatlichen Archive Bayerns, Menschen im Krieg, Die Oberpfalz 1618 bis 1648, München 2018, p. 43.

¹¹¹⁵ ヴェストファーレン(西ファーレン Westfalen ラテン語音訳はウエストファリア)とはドイツ西部にある地域で、ミュンスター、オスナブリュック、ケルン、アーヘン、ドルトムントといった都市がある。なお、第2次世界大戦後、ヴェストファーレン地域と北ライン(ノルトライン)地域が合併して「北ライン=西ファーレン州」が成立し、現在に至る。

11. 絶対王政の確立と市民革命

◎ 「17世紀の危機」と「科学の時代」

前述した**30年戦争**は神聖ローマ帝国を主戦場とし、多くの国を巻き込んだ。同じ頃、つまり、17世紀前半、イングランドでは**清教徒革命**が起き、王政は崩壊する。その後、10年も絶たない内に王政は復活したが、1688年、新たな革命（**名誉革命**）が発生し、立憲君主制が確立していく（503頁参照）。他方、フランスでは、30年戦争後の1648年から1653年にかけて、「**フロンドの乱**」が勃発し、王政を揺るがした（後述参照）。また、ヨーロッパ全土で**魔女狩り**¹¹¹⁶がピークに達し、過激さを増す。政治や社会が不安定になったこの現象は「**17世紀の危機**」と呼ばれている。ルネサンス終了直後のこの時代、ニュートン、ガリレイ（258頁参照）、ケプラー、デカルト等が従来の理論を覆す新説を立て、自然科学が発展したため、「**科学の世紀**」とも言われている。

芸術面では、**バロック**が流行し、ルネサンス期の調和のとれた美術様式から脱却した新しい建築、音楽、絵画が人気を博した（139頁参照）。

宗教戦争（ユグノー戦争）末期の1589年、フランスの王朝は**ヴァロワ朝**から**ブルボン朝**に変わり、絶対王政が確立していく。王は何者にも屈さないという体制は17世紀後半から18世紀前半にかけて絶頂期を迎え、ブルボン朝第3代目の君主であるルイ14世は対外的にも神聖ローマ皇帝ないしオーストリア＝ハプスブルク家に対抗し、「太陽王」の威光を示した。前述した**30年戦争**への参加も、この抗争の一つであるが、当時の国王は先代のルイ13世であり、国内では宰相のリシュリーが新教徒を弾圧した。

父親で、ブルボン朝の始祖であるアンリ4世が過激な旧教徒に暗殺されたため、ルイ13世は8歳半で即位したが、彼の長子のルイ14世は4歳で跡を継いでおり、母親、つまり、ルイ13世の後であるアンヌ＝ドートリッシュと宰相のマザランが実権を握った。マザランは30年戦争の講和会議を優位に導き、アルザス地方を獲得しているが（594頁参照）、この戦争は国家財政を圧迫した。その対策として高等法院の法務官は給与を切り詰められることになる。彼らがデモを起こすと、逮捕されることになるが、政府への反発は収まらず、1648年8月、重税に苦しんでいたパリ市民が法務官の抗議に便乗して蜂起すると、「**フロンドの乱**」と呼ばれる内戦に発展した。なお、フロンド（fronde）とは当時、流行していた投石器を指し（右図参照）、市民がマザランや支持者の邸宅に向かって石を放ったことから、闘争は「フロンドの乱」と呼ばれた。1650年には王政に反発する貴族も参戦し、国王軍と戦ったため、マザランは亡命を余儀なくされたが、1653年2月、パリに戻り、内乱を鎮めた。貴族や市民の反発を抑えつけることに成功した国王の権威は高まり、フランスは絶対王政に入る。



これに対し、イングランド（後のイギリス）では**市民革命**（**清教徒革命**と**名誉革命**、503頁参照）が起き、絶対王政に揺らぎが生じた。

¹¹¹⁶ **魔女狩り**とは魔女とされる人々を摘発して裁判にかけ、処刑、投獄、拷問、追放といった様々な罰を科す行為である。犠牲になった人々、つまり、魔女は悪魔と性交することによって魔力を身につけ、子供を食べたり、人畜に危害を加えたりすると考えられ、不条理な迫害を受けた。なお、この魔女信仰は、キリスト教が広まる前からヨーロッパには存在した。また、12世紀頃から、特に、フランスやドイツ地方で、異端審問と合わせ、魔女狩りが行われた。15世紀前半には、フランスを救ったジャンヌ・ダルクも、イングランドによって裁かれ、犠牲になる（338頁参照）。魔女狩りは16世紀中頃から17世紀中頃にかけてピークに達し、ヨーロッパ全土で、4～6万人が処刑されたと考えられている。なお、「魔女」には女性だけではなく、男性や身体や精神に障がいを持つ者も含まれた。特に、北ヨーロッパでは男性も被害にあった。See Sönke Lorenz and H. C. Erik Midelfort, Hexen und Hexenprozesse, Eine Einführung, in <https://langzeitarchivierung.bib-bvb.de/wayback/20190716081447/>

【参考】絶対王政期の君主

イギリス (イングランド)	フランス	神聖ローマ帝国
ジェームズ 1 世 (在位期 1603～1625 年) チャールズ 1 世 (1625～1649 年) 清教徒革命 オリバー・クロムウェル (1653～1658 年) リチャード・クロムウェル (1658～1659 年) 王政復古 チャールズ 2 世 (1660～1685 年) ジェームズ 2 世 (1685～1688 年) 名誉革命 メアリー 2 世 (1689～1694 年)・ウィリアム 3 世 (1689 年～1702 年) アン (1702～1714 年) * 1707 年 イギリス発足 (504 頁参照) ジョージ 1 世 (1714～1727 年) ジョージ 2 世 (1727～1760 年)	ルイ 13 世 (1610～1643 年) ルイ 14 世 (1643～1715 年) ルイ 15 世 (1715～1774 年) ルイ 16 世 (1774～1792 年) * フランス革命 (1789 年) ナポレオン 1 世 (1804～1814、1815 年)	 フランツ 1 世 (1745～1765 年) ※ マリア・テレジアの夫 451 頁参照 ヨーゼフ 2 世 (1765～1790 年) レオポルト 2 世 (1790～1792 年) フランツ 2 世 (1792～1806 年) * 1806 年 神聖ローマ帝国崩壊

18 世紀中頃、ヨーロッパの列強は海外でも対戦しており、これを制したのは英蘭戦争でオランダを、また、7 年戦争でフランスを倒したイギリスである。こうして日本の面積の 3 分の 2 に過ぎないこの島国は世界各地に領土を持つ巨大な植民地帝国に発展するが、後にアメリカを失った。その独立を支援したのはフランスであるが、アメリカ独立戦争への加担は財政状況を悪化させ、**フランス革命**の遠因となる (後述参照)。

12. 啓蒙思想、アメリカ独立戦争、フランス革命とその後のナポレオン体制、産業革命

中世、人々は学識を持たず、迷信や宗教上の教えに囚われていたが、18世紀、フランスではそのような人々の目を開かせる**啓蒙思想家**が（夜明けを告げる雄鶏のように）現れる。彼らの思想はフランス革命の基盤にもなり、絶対王制を倒した。革命後、ヨーロッパは一連の戦争に見舞われる。そのような状況下、軍人出身の**ナポレオン**が頭角を現し、フランス皇帝の座に上り詰めた。新たな独裁者が軍力でヨーロッパの広い範囲を支配すると、自由・平等というフランス革命の理念が諸国に浸透していき、ヨーロッパは近代化する。

12.1. 啓蒙思想

18世紀に入ると、絶対王政を批判すると同時に、無知や迷信に囚われている人々に真の世界を示し、批判的な精神を養わせようとする**啓蒙思想家**が現れた。その代表例として、『哲学書簡』を著した**ヴォルテール**¹¹¹⁷や、『法の精神』を発表した**モンテスキュー**（144頁参照）が挙げられる。彼らが唱えた社会契約説や三権分立はフランス革命をもたらし、絶対王政を崩壊させた。また、ヨーロッパのアイデンティティや基本的価値の形成に貢献する（142頁参照）。

フランスの啓蒙思想家はすでに市民革命が起き、近代化されていたイギリスの議会制度を評価していた。そのイギリスでは**ロック**が**王権神授説**（144頁の注395参照）を批判する一方、人民主権を主張し、植民地アメリカの独立に大きな影響を与えた。

12.2. アメリカ独立戦争（アメリカ独立革命）

18世紀中旬、イギリスは一連の戦争（英仏植民地戦争、7年戦争、フレンチ＝インディアン戦争）で勝利を収め、覇権を拡大する一方、度重なる戦いで財政は悪化していた。歳入を増やすため、植民地アメリカで課税が強化されると、植民地側は反発し、1773年12月、ボストン茶会事件¹¹¹⁸を起こした。それによって本国政府の締め付けが厳しくなると、植民地側は、1774年9月、大陸会議を開き、本国製品の輸入・販売をボイコットするようになった。

両者間の関係が緊張する中、1775年4月、アメリカ北西部のレキシントンとコンコードで本国軍と植民地民兵が衝突し、**アメリカ独立戦争**（独立革命）が勃発する。

開戦当初、**ジョージ・ワシントン**を司令官とする植民地軍は劣勢に立たされた。そのため、大陸会議では独立を訴える愛国派と本国との和解を望むロイヤリスト（王党派）の対立が深まるが、イギリスの哲学者トマス・ペインが著書『コモ



Daniel Chodowiecki 作（1791年）
地球上のあらゆる宗教の信者に知識の光を与える**ミネルヴァ**（ローマ神話上の知恵の女神）

なお、ミネルヴァはギリシア神話の**女神アテナ**と同一視されている（131頁参照）。

¹¹¹⁷ **ヴォルテール** (Voltaire) とはフランソワ＝マリー・アルエ (François-Marie Arouet 1694～1778年) のペンネームである。フランスの裕福な家庭に生まれた彼は若い頃より作家として活動した。1726年、貴族と対立した罪でバステューユ牢獄 (359頁参照) に収監されるが、釈放後、立憲君主制が始まっていたイギリスを訪れ、フランスとの違いを痛感する。また、ロックやニュートンといったイギリスの哲学者に感銘を受ける。1734年には『哲学書簡』を刊行し、イギリスから故国の友人に送る手紙という形式で、絶対王政を糾弾している。また、1763年に発表された『寛容論』でカトリック教会によるプロテスタント弾圧を批判し、宗教上の寛容性を訴えた。

ヴォルテールの影響を受けたプロイセンのフリードリヒ 2世は啓蒙専制君主と呼ばれており、1740年に即位すると、宗教寛容令や拷問禁止令を出している。また、自らを「国家第一の僕」と呼び、自国の改革や発展に努めた。彼の下でプロイセンは国力を高め、オーストリアとドイツ内の覇権を争うようになる（26頁参照）。

¹¹¹⁸ ボストン茶会事件とは、本国政府が1773年4月に茶法（茶条例）を制定したことに反発し、植民地人がボストン港に停泊していた東インド会社の商船に侵入して茶箱を海に投棄した事件である。これを受け、本国政府はボストン港を封鎖した。また、強圧的諸条例を制定し、植民地支配を強化するに至ったが、植民地を弾圧することはできず、さらなる反発を招いた。

ン・センス』で、アメリカの独立は人間として当然の権利であると主張したことも後押しされ、愛国派が巻き返す。1776年7月4日、大陸会議は『独立宣言』を採択した。

その後も植民地軍は苦戦を強いられたが、1778年2月、フランスが支援するようになると、スペインとオランダもこれに続き、情勢は逆転する。1781年10月、ヨークタウンの戦いでアメリカ・フランスの共同軍がイギリス軍を破ると、6年前に始まった戦争は事実上、終わった。約2年後の1783年9月、パリで和平条約が締結され、アメリカの独立が承認された。

12.3. フランス革命、ナポレオン1世の即位

新大陸の独立は本国イギリスの王政（なお、すでに立憲君主制に移行していた）ではなく、アメリカを支援したフランスの絶対王政を崩壊させることになった。その遠因となったのは、アメリカ独立戦争に参加することでフランスの財政が一段と悪化し、増税が計画されたことである。貴族に対する課税に彼らが反発し、三部会¹¹¹⁹の開催を要求すると、同議会への参加が認められる市民階級の活動が高まり、革命につながった。彼らは議決方式をめぐって聖職者や貴族と対立すると、自分達が国民であると主張し、国民議会（なお、三部会ではない）の開設を国王に求めた。また、アメリカの独立で浸透した自由主義や啓蒙思想が国民の間に広まり、絶対王政に対する反発が強まった。

当時、王政に逆らった政府高官や学者等はパリ市内にあるバステュー牢獄に収監されており、この施設は絶対王政の象徴になっていた。前述した啓蒙思想家のヴォルテールも、僅か5歳で即位したルイ15世の摂政を中傷し、投獄されているが、収監されたのは専ら上流階級であり、牢獄とは呼べないほど設備が整っていた。

1789年7月14日、この施設に弾薬や火薬が保管されているという噂を聞きつけた市民は、国王軍との戦闘に必要な軍資を調達するため、そこへ詰めかけたが、司令官にはねつけられた。両者の交渉が難航し、司令官が発砲すると、市民は激怒し、後に「バステュー牢獄襲撃」と呼ばれるようになる騒乱を起こす。これは全国に波及し、各地で農民が領主を襲ったため、フランスは「大恐怖」に見舞われた。



民衆に襲撃されたバステュー牢獄（1789年7月）

絶対王政の象徴であった牢獄への襲撃を機に、10年にも及ぶ**フランス革命**が始まったが（461頁参照）、直ちに王政が崩壊したのではない。革命が起きた当時、国民議会を動かしていたのは王党派の貴族で、彼らは立憲君主制への移行を目指していた。なお、この動きは周辺国の君主より警戒されることになる。

1791年9月、フランス史上初の憲法が制定されたが、その一月前、オーストリアとプロイセンの君主はフランスの王政を復活させるため武力を用いて直ちに行動するという声明（ピルニッツ宣言）を出し、フランスを震撼させた。この宣言を最後通牒と捉えた革命政府は、1792年4月、先に攻撃をしかけるが¹¹²⁰、撃退され、状況はますます悪化する。こう

¹¹¹⁹ **三部会**とは聖職者（第1身分）、貴族（第2身分）、市民（第3身分）の三つの身分で構成された議会で、1302年、フランス国王のフィリップ4世が聖職者への課税を承認させるために招集したのが始まりである（336頁参照）。1614年、ルイ13世が同会議を廃止すると、1789年5月まで開催されなかった。本文中で述べたように、第2身分の貴族が召集を要求すると、第3身分である市民の政治活動が活性化し、フランス革命につながる。

¹¹²⁰ 1792年7月、この戦争のため、フランス南東部のマルセイユからパリに参上した義勇兵が『ライン川軍のための軍歌』（Chant de guerre pour l'armée du Rhin）に乗せて行進すると、この軍歌は人気を博し、1795年7月、フランスの国歌に指定された。なお、この歌はライン川沿いの都市ストラスブール（63頁参照）に駐留する「ライン川軍」のために作成されたため、『ライン川軍のための軍歌』と名付けられたが、マルセイユ兵が使用し、広まったため、現在でも『ラ・マルセイエーズ』（La Marseillaise）と呼ばれている。See Fordham University, Internet Modern History Sourcebook La Marseillaise, <https://sourcebooks.fordham.edu/mod/marseill.asp>

なお、『ラ・マルセイエーズ』は軍歌であり、「国民よ、武器を取れ。[敵の]汚れた血が我らの田畑を潤すまで」といった一節が含まれているが、現在でもフランスの国歌として歌われている。また、世界中で最も人気のある国歌の

した中、ルイ 16 世は諸外国と内通しているという噂が流れ、国民の怒りを増幅させた。8 月、パリ市民はテュイルリー宮殿を襲撃し、国王を監禁する。この事件は「8 月 10 日の革命」と呼ばれており、翌月、王政は廃止された。

その 4 ヶ月後 (1793 年 1 月)、ルイ 16 世が革命政府によって処刑されると、ヨーロッパの君主達は革命の余波が自国に及ばないようにするため、軍事同盟 (**対仏大同盟**、581 頁参照) を結成し、フランスと対戦した。国王処刑前の 1792 年から 1799 年まで続いた一連の戦争を **フランス革命戦争** と呼び、軍人の **ナポレオン・ボナパルト** が頭角を現していく。一連の戦争で対仏大同盟を倒し、国民の英雄となった彼は、1799 年 11 月、クーデター、つまり、新たな革命を起こして新しい政府 (**統領政府**) を立ち上げると、その第 1 統領に就任する。また、国民投票で圧倒的な支持を受け、1804 年 5 月、「フランス人民の皇帝」として即位した¹¹²¹。これによってフランスの国政は独裁に戻ることになる。なお、革命によって王政が崩壊したフランスとは対照的に、ナポレオンは支配した地域に君主国を建て、自らが君主となるか、身内を即位させ、フランスの威厳を示した (583 頁参照)。



大陸支配という (従前のフランス国王よりも大きな) 野望を抱き、諸国と戦ったナポレオンはヨーロッパ各地を支配したが、イギリス、スウェーデン、ポルトガル、バルカン半島南部、シチリア島、サルデーニャ島等は含まれない (582 頁参照)。また、プロイセンとオーストリアをドイツ内で孤立させるため、その他のドイツ諸邦に **ライン同盟** を結成させると、1000 年 (または 840 年) の歴史を持つ **神聖ローマ帝国** は崩壊した (534 頁参照)。

王族でない者が皇帝になり、諸国・地域を支配したことも、ヨーロッパ史上、画期的なことであったが、1814 年にナポレオンが失脚すると、君主は神より選ばれた特別な人間であるという思想の下、諸国の君主は神聖同盟を結成するとともに、フランスで王政を復活させた。なお、当時のヨーロッパ諸国のほとんどは君主国であった。

ナポレオンは血統を手に入れるため、宿敵であり、ヨーロッパ随一の家柄を誇っていたオーストリア=ハプスブルク家から后を迎えているが、10 年に亘る独裁期、彼は中央集権化を進めるとともに、諸制度を刷新し、改革者として名を揚げた。また、立法者としても精力的に活動し、後世に残る多くの法律を制定した (461 頁参照)。これは諸国にも大きな影響を与え、諸制度は近代的になる。また、フランス革命の理念である自由・平等が諸国にも広まり、特に、イギリスでは徒弟制の廃止 (1814 年)、カトリック教徒の解放 (1829 年)、奴隷制の廃止 (1833 年) 等が実施された。

ナポレオンに支配された国や地域では、彼に対抗するため「上からの改革」や民族主義運動が勢いを増す¹¹²²。また、アメリカの独立やフランス革命で強固になった自由・平等の理念が中南米に波及し、独立運動 (スペインやポルトガルからの独立) が起きた¹¹²³。ギリシアも長年に亘るオスマン帝国の支配から脱し、1830 年、独立を達成する (426 頁参照)。

一つである。1917 年のロシア革命後には、短期間であるが、ロシア国歌のメロディーとして使用された。

¹¹²¹ 「フランス人民の皇帝」という表現には古代ローマ皇帝との連続性を否定する意図が含まれている。成聖式ないし戴冠式は、同年 12 月、パリのノートル・ダム大聖堂 (64 頁参照) で行われた。ヨーロッパの皇帝は教皇から皇帝の冠を授かる習わしがあり、教皇ピウス 7 世も式典に参列したが、教会による支配をきらったナポレオンは自ら冠をかぶったとされている。See Britanica, The Coronation of Napoleon, <https://www.britannica.com/topic/The-Coronation-of-Napoleon>

¹¹²² スペインでは立憲君主制を採用した憲法が制定され、ナポレオン支配からの独立運動が展開された (487 頁参照)。プロイセンでは哲学者の **ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテ** (1762-1814) が『ドイツ国民に告ぐ』(Reden an die deutsche Nation) と題する連続講演を行い、ドイツ人の文化は優れており、ドイツ人はそれを認識すべきであること、また、ドイツ文化をさらに発展させるため、教育を改善する必要があることを訴えた。なお、前出のように、彼の演説は『ドイツ国民に告ぐ』と訳されているが、演説が行われた 1807~1808 年、ドイツと呼ばれる国はまだ成立していない (演説はナポレオン軍が占領する **プロイセン王国** の首都ベルリンで行われた)。そのため、「ドイツ国民」と呼ばれる国民もまだ存在しなかった。彼が用いた“deutsche Nation”という表現は、「ドイツ国民」ではなく、「ドイツ民族」「ドイツ人」という意である。“Nation”という語の意味について、441 頁を参照されたい。

¹¹²³ 中南米諸国の独立は、1804 年、ハイチの独立を皮切りに始まったが、ハイチは、1697 年、スペインからフランスに割譲されていた。つまり、カリブ海上のイスバリーヨナ島西部を領土とするこの国はフランスから独立した。なお、黒人の革命指導者 **トゥーサン・ルーヴェルチュール** は、1800 年、独立を宣言したが、1803 年、ナポレオンに捕らえられ、処刑された。翌年、彼の遺志を継いだ者が独立を達成した。

12.4. 産業革命

植民地アメリカでは独立革命（独立戦争）が、また、ヨーロッパ本土ではフランス革命が勃発した 18 世紀後半、イギリスでは世界に先駆け**産業革命**が起きた。なお、この革命は農業から工業へと社会の基軸が移行したことを指し、木綿工業で機械化が進んだが、大規模工場における大量生産が始まったわけではない。それから 100 年近く経過した 19 世紀半ばにおいても大量生産は繊維部門でのみ見られ、小規模な作業場における手作業（職人技）が主流であった。なお、機械のエネルギー源は石炭であり、産業革命と並行して蒸気機関車が実用化され、鉄道が普及した。

当初、イギリス政府は経済的優位性を維持するため、紡績機や織布機の輸出を禁止していた。それが解禁され、ベルギーを始めとする他のヨーロッパ諸国に産業革命が広まったのは 1830 年代に入ってからである。なお、同年、ベルギーはオランダからの独立を宣言している（476 頁参照）。

イギリスでは産業革命と並行し、農業の生産性を高めるため、「土地の囲い込み」（エンクロージャー）が行われた。「囲い込み」は 16 世紀、牧羊の効率を上げるために実施されており、これを「第 1 次囲い込み」と呼ぶ¹¹²⁴。当時は領主や富農層が非合法に行ったのに対し、産業革命期の「第 2 次囲い込み」は議会が制定した法に基づき実施され、農民は大規模農場経営者と賃金農民に分離した（農業分野における資本主義の発達）。

19 世紀に入り、産業革命が進展すると、経営者・労働者間で貧富の差が拡大した。また、経済的弱者である工場労働者は酷使され、不健康な生活を強いられるようになった。この世紀の中頃、マルクスやエンゲルスが労働者の解放を訴えると、諸国に大きな影響を与え、大変革をもたらすことになる（368 頁参照）。

13. ウィーン体制とフランス二月革命

ナポレオンの失脚後、ヨーロッパ諸国はウィーンで会議を開き、平和の確立を目指した。かつてない大規模な国際会議では外交を通じた和平実現の精神が芽生える。諸国は君主制を維持することでも連携し、フランス革命で生まれた自由・平等の理念を押さえつけたが、政体は絶対王政から近代的な立憲君主制へと変わっていく。唯一の例外は帝政ロシアで、「ヨーロッパの憲兵」として台頭した（517 頁参照）。

ウィーン体制と呼ばれる新秩序の下でフランスが制裁を科されることはなかった。同国では王政が復活し、イギリス、オーストリア、プロイセン、ロシアと共に列強としての地位を維持する。しかし、1848 年、再び革命（**二月革命**）が起きると国王は失脚し、1852 年、ナポレオンの甥が帝政を敷いた。なお、この革命の波は周辺国にも及び、ウィーン体制の崩壊につながった（586 頁参照）。

19 世紀前半、イギリスでは**産業革命**が進展し、工場で働く人が増える一方（蒸気機関車も開発された）、大陸ではまだ農業が主たる産業であった。もっとも、社会は近代的になり、市民は文化活動や子供の教育にも熱を入れるようになる。マンチェスター、パリ、フランクフルト、ハンブルクといった大都市に人々が集まり、「市民の時代」が幕を開けた。

13.1. ウィーン体制

諸国との戦争（1796 年～1814 年の**ナポレオン戦争**）で勝利を収めたナポレオン 1 世はヨーロッパを広い範囲で支配し、「フランス人の時代」を築いたが、1812 年 5 月に開始したロシア遠征に失敗した頃から運気が下がり、追い込まれていった（462 頁参照）。1814 年 4 月、オーストリア、プロイセン、イギリス等からなる対仏大同盟軍がパリを攻略すると、ナポレオンは部下によって退位させられ、翌月、イタリア半島とコルシカ島¹¹²⁵の間に浮かぶエルバ島に流された。

1808 年、ナポレオンがスペインを征服すると（487 頁参照）、運動は加速し、1811 年にはパラグアイが、また、1816 年にはアルゼンチンがスペインから独立した。それを組織したのは南米で生まれた白人で、クリオーリョ（criollo）と呼ばれている。

¹¹²⁴ イングランドのトマス・モアは『ユートピア』（367 頁参照）の中で当時の状況を「羊が人間を食べている」という趣旨の言葉で表現しているが、この名著が発行された 1516 年、エンクロージャーはまだ進展していなかった。

¹¹²⁵ ナポレオンはコルシカ島を治めていた貴族ボナパルト家の出身であり、1769 年 8 月、この島で生まれている。

なお、当時、この島はフランス領であり（現在はイタリア領）、ナポレオンの所領となる。

フランスから解放された諸国は、1814年9月、ウィーンで会議を開き、ナポレオン戦争後の国際秩序について協議した。会議にはヨーロッパの15名の王、200名の大公、126名的外交官が参加し、終始、お祭り気分で進展しなかった（右の画像参照¹¹²⁶）。そのため、「会議は踊る、されど進まず」と揶揄されているが、1815年3月、ナポレオンがエルバ島を脱出し、パリに戻ったとの知らせが入ると、下記の点を決め、6月に解散した。なお、フランスは制裁を科されず、イギリス、オーストリア、プロイセン、ロシアと共に列強の地位を維持することができた。



- ・ ドイツ諸邦の連合体であるライン同盟を解散させ、新たに**ドイツ連邦**を結成し、オーストリアがその盟主を務める（442頁参照）。また、ナポレオンが占領していたライン川流域はプロイセンやバイエルン等で分割する。
- ・ 流動的であったフランスの北側の国境を確定するため、旧オーストリア領ネーデルラント（474頁参照）と旧ネーデルラント連邦共和国を合併し、**ネーデルラント王国**を建設する。また、フランスから解放されたベルギー地方をこの王国に併合する（470頁参照）。
- ・ ルクセンブルクはドイツ連邦に加盟するものとする。なお、ルクセンブルクの君主（大公）にはネーデルラント国王をあてる（ネーデルラントとの同君連合の創設）。
- ・ ワルシャワ大公国を消滅させた後、**ポーランド立憲王国**を発足させ、ロシアの支配下に置く。
- ・ 北イタリアに**ロンバルド＝ヴェネツィア王国**を樹立し、オーストリア・ハプスブルク家が治める（369頁の注1143参照）。
- ・ イギリスはマルタ（旧フランス領）やケープ植民地（旧オランダ領¹¹²⁷）を獲得する。また、新たに発足したイオニア諸島合衆国（旧ギリシア領）の宗主権を得る。
- ・ スウェーデンはフィンランドをロシアに譲る一方、デンマークからノルウェーを獲得する（83頁参照）。
- ・ スイスを永世中立国として承認する。
- ・ 教皇領を復活させる（248頁参照）。

¹¹²⁶ 画像出典 Der Standard v. 19. Februar 2015, Wiener Kongress: Stelldichein der Fortschrittsgegner, Foto ÖNB.

¹¹²⁷ アフリカ大陸最南端に位置する**ケープ植民地**は、1806年、イギリス軍がバタヴィア共和国（469頁参照、現オランダ）から奪い、占領を開始した地域である。1815年に開かれたウィーン会議でイギリスの植民地として了承された。なお、その起源は、15世紀末頃、ポルトガルの貿易拠点が建設されたことに遡る。1652年には、オランダが東インド会社の補給基地として、ケープタウンを建設したが、1795年、同国がフランスに倒された隙を狙い、イギリスが占領を開始した。1803年、イギリスはオランダ（バタヴィア共和国）に返還するが、3年後、再び占領し、植民地化を進めた。同国の植民地支配が終わるのは、1910年、南アフリカ連邦が建設されたときである（375頁参照）。



1815年（ウィーン会議後）のヨーロッパ¹¹²⁸

フランスの領土は革命が勃発する前の状態に戻った¹¹²⁹。また、ナポレオンによって勢力をそがれたオーストリアは北イタリア（ロンバルド・ヴェネツィア王国）の支配権を得た。プロイセンはフランスが占領していたライン川流域に所領を獲得し、南西ドイツへの進出を果たす。その結果、この隣国を警戒させることになる。

なお、当時、ドイツ、イタリア、ベルギーはまだ成立していない。上の地図では示されていないが、オーストリアを含むドイツ諸邦はドイツ連邦を創設した（442頁参照）。

ポーランドは復活したが、プロイセンに遮られ、北海に接しない内陸国となる。

イタリア半島の北部には教皇領が復活し、教皇はヨーロッパで最も長い歴史を誇る君主として復権した。

バルカン半島の大部分は依然としてオスマン体制下に置かれる一方、その北部（クロアチア、スロベニア等）やハンガリーはオーストリア＝ハプスブルク家体制に組み込まれていた。他国に先駆け、ギリシアが独立したのは1830年である。

アイルランドはイギリスと合併し、「グレートブリテンおよびアイルランド連合王国」と呼ばれていた。

¹¹²⁸ 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Europe_1815_map_de.png (著者により周囲を削除してある)。

¹¹²⁹ フランスは、ワーテルローの戦いの後、首相を務めていた王党派のタレーラン＝ペリゴール (Talleyrand-Périgord) をウィーン会議に派遣し、国の解体を阻止した。彼は「各国の領土は正統な君主のものである」と主張し、諸国に認めさせたが、これを正統主義と言う。

ウィーン会議は、ヨーロッパ諸国の大半が君主国であることを浮き彫りにした。なお、1813年10月、諸国民の戦いでナポレオン軍を倒した対仏大同盟は、翌年4月、フランスで王政（ブルボン朝）を復活させていた（463頁参照）。

各国の君主はフランス革命が起こる前の絶対主義の復興を希求しており、フランスを解体せず、その国境は革命前の状態に戻すことで合意した。また、旧体制を維持するため、自由主義やナショナリズム運動を封じ込めることで協力する。諸国は外交によって均衡を保ち、40年近く、大きな戦争の勃発を回避しており、これを**ウィーン体制**と呼ぶ。

この体制を牽引したのは、イギリス、オーストリア、プロイセン、フランス、ロシアである。これらの5大国の中で最も勢力を伸ばしたロシアがオスマン帝国の支配地域に侵攻し、**クリミア戦争**（1853～1856年の**露土戦争**、425頁参照）を引き起こすと、体制は崩壊した。なお、この戦争にはロシアの南下政策を警戒するイギリスとフランス（ナポレオン3世の統治下の帝政フランス）も参加し、ロシアを撃退している。1856年、パリで講和会議が開かれ、戦争の舞台となったバルカン半島を戦前の状態に戻すことが決まった。

※ ウィーン会議で決定された点や**ウィーン体制**について、585頁以下を参照されたい。

13.2. フランス二月革命、ナポレオン3世の即位

ナポレオン1世の失脚後、フランスでは王政が復活するが、1848年2月、新しい革命が起き、国王は失脚した（463頁参照）。これを最後に、フランスでは現在まで王政は復活していない。

二月革命はヨーロッパ各地に飛び火し、オーストリア、プロイセン、ポーランド、ハンガリー、チェコ、ロンバルディア（ミラノ）等では、翌月、旧体制の打破を目指す暴動が発生した。これを**三月革命**と呼ぶが（454頁参照）、短期間の内に広まった自由主義運動は収束も早く、同年の秋までには旧体制派によって押さえつけられた。そのため、フランスのように君主制が崩壊する革命は起きていない。なお、同年2月、マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』を発表し、労働者に革命を呼びかけており（368頁参照）、より大きな革命、つまり、共産主義革命の理念を作った。

◎ 民族の復興 (National revival)

1848年、フランスで発生した**二月革命**は、すでに1700年代からヨーロッパ各地で芽生えていた**民族主義**を高めることになり、支配者である他の民族から独立し、独自の国家を建設する運動に発展した。旧体制の打破を目指す**三月革命の背景**には、このような民族主義の思潮もあった。後世、チェコの歴史家のMiroslav Hrochは、独自の国を持たないものの、言語や伝統を共通するに人々が同一の民族としての意識を強め、（他国から国家として認識されるようになるため）独自の国家を建設する現象を“National revival”（民族の復興・再生）と呼んだ¹¹³⁰。これはオーストリア帝国やオスマン帝国が広い地域を支配していた東欧でみられ、第1次世界大戦後、チェコスロバキアやユーゴスラビアが独立を達成している（513、542頁参照）。なお、両国は民族の一体性が強調され、建設されたが、「連帯性」が失われていき、冷戦終結後に「新たな民族の復興」が隆盛すると解体された。その後、ユーゴスラビアでは民族の違いが強調されるようになる。

諸国で三月革命と呼ばれる自由主義運動が起きたのとは対照的に、フランスではナポレオン1世の甥にあたる**ナポレオン3世**¹¹³¹が国民の圧倒的支持を集めて皇帝になり、帝政を復活させた。彼がヨーロッパ内外で覇権を強めると（463頁参照）、イタリアやドイツでは彼に対抗する形で**ナショナリズム**が高揚する。両者は、それぞれ1861年および1871年、国家統一を実現した（371頁参照）。

¹¹³⁰ Miroslav Hroch, *Social Preconditions of National Revival in Europe. A Comparative Analysis of the Social Composition of Patriotic Groups Among the Smaller European Nations*, translated by Ben Fowkes, Cambridge University Press 1985.

¹¹³¹ ナポレオン1世と皇后マリー・ルイーゼ（オーストリア皇帝フランツ2世の長女）との間に生まれた男子を**ナポレオン2世**（ナポレオン・フランソワ 1811～1832年）と呼ぶ。彼は父である1世によってローマ王に叙されたが、父の失脚後は母の実家であるオーストリア＝ハプスブルク家で過ごし、21年の生涯を閉じた。

14. 第2次産業革命、帝国主義、社会主義、世界分割

19世紀後半、ヨーロッパでは第2次産業革命が起き、重化学工業が発展した。とりわけ、19世紀末にかけて新しいエネルギー源である石油の利用が伸び、自動車や飛行機も開発される。欧州全域で経済が上向く状況はそれまでなく¹¹³²、この地域は新しい時代に入った。人口も大幅に増えている。

社会・経済の発展を受け、大都市ではブルジョワジー（有産階級）が自由を謳歌するようになった。とりわけ、1890年代から1914年に第1次世界大戦が勃発するまでの華やかな時代は「ベル・エポック」（良い時代 Belle Époque）と呼ばれた。それと同時に貧富の差も拡大し、労働者階級、とりわけ、女性の惨状が露呈される。

文化的には古代ローマの庶民文化が再評価され、「ロマン主義」と呼ばれる様式が人気を博す（140頁参照）。音楽ではワーグナー、文学ではゲーテ、ユーゴー（587頁参照）等が活躍した。

政治・思想的には帝国主義や社会主義が台頭する。イタリアやドイツが国家統一を達成し、ヨーロッパの国際秩序に大きな影響を与えている。なお、両国では「上からの改革」が進められ、「上からの民族主義」が高まったが、これは両国に特有の現象であり、その他に新しい国家は建設されていない¹¹³³。

19世紀後半、プロイセンが台頭し、ヨーロッパの勢力図は大きく変わる。フランス（ナポレオン3世）はこれに対抗したが、1870年に勃発した普仏戦争に敗れ、プロイセンによるドイツ帝国の創設を阻止することができなかった。それから1914年に第1次世界大戦が勃発するまでの帝国主義時代、プロイセンの主導下でヨーロッパには平和がもたらされた（ビスマルク外交について、587頁参照）。

ドイツ統一過程でライバル関係にあったドイツとオーストリアは同盟を結び、バルカン半島に進出した。これは半島に住むスラブ人やロシアと衝突し、第1次世界大戦を引き起こすことになる（381頁参照）。

14.1. 第2次産業革命と帝国主義

産業革命は18世紀後半、イギリスで始まり、次世紀の前半（1830年代以降）、ベルギーを始めとする他のヨーロッパ諸国に広まった。その対象になったのは木綿工業、つまり、軽工業であったが、19世紀後半（1870年代）になると、ドイツや米国で鉄鋼、電気、化学等の重化学工業が急速に発展し、企業の規模・収益が拡大した。これを**第2次産業革命**と呼ぶ。17世紀にオランダで制度化された株式会社もこの時期に普及している。

やがて企業は他者との競争を避けて利益を確保するため、また、1873年の大不況や景気変動を乗り切るため、生産・資本を集中・集約するようになった。こうして独占資本が形成されていく。同時に預金者から集めた多額の資金を運用して利潤を得る銀行資本や、それと産業資本が結合した金融資本も成立する。

国内市場の開拓が進み、国内で利益を上げることが難しくなると、金融資本は新たな投資先や原料供給地・製品市場を求めて国外に進出するようになった。また、列強8ヶ国（欧州のイギリス、フランス、ドイツ、ロシア、ベルギー、イタリアと日米）は植民地や従属国の獲得を求め、アジアやアフリカに進出しており、このような資本主義諸国の体外膨張・植民地支配体制を**帝国主義**と呼ぶ。

◎ 帝国主義時代

帝国主義とは勢力拡大や植民地獲得を目指した列強の体制ないし政策方針を指し、1870～1880年から1918年頃にかけて出現した。この時代は「帝国主義時代」と呼ばれるが、「帝国主義」という概念自体は16世紀にも使われており、当時、フランスでは、オーストリア＝ハプスブルク家体制を「帝国主義」（impérialisme）と呼ぶことがあった。後世、19世紀初旬のナポレオン体制も「帝国主義」と見なされるようになるが、紀元前1世紀後半におけるカエサル軍の軍事体制もそれにあたる¹¹³⁴。

¹¹³² Jürgen Osterhammel, 1880 bis 1914, Informationen zur politischen Bildung Nr. 315, bpb 2012, pp. 56-81, 39-42.

¹¹³³ Osterhammel, 1850 bis 1880, Informationen zur politischen Bildung Nr. 315, op. cit., pp. 30-55, 43-44.

¹¹³⁴ Dieter Groh, Cäsarismus, Otto Brunner and others eds., Geschichtliche Grundbegriffe, Band 1, Klett-Cotta 2004, pp. 726-771, 731-732.

なお、19世紀後半の帝国主義は資本主義と結びついていた。レーニンが1916年に公刊した『帝国主義論』において独自の定義を示し、共産主義の立場から批判している。

◎ 帝国との相違点

一般に、帝国主義は君主（皇帝）を中心とする中央集権体制、つまり、帝政を柱とするが、帝国の創設を伴うわけではない。帝国とは複数の国・地域や民族を従える国家であり、この意味において、ローマは帝政が始まる前から「帝国」であった。実際に、共和政期より“Imperium Romanum”（ローマ帝国）として捉えられていた¹¹³⁵。もっとも、紀元前1世紀後半、アウグストゥスが初代皇帝として即位した後も、つまり、一般に「ローマ帝国」と呼ばれている国が成立した後も、政体は共和政であった。また、実態は帝国であるが、そのように記されない国もある。特に、フランク王国は「帝国」と呼ばれていない。ただし、カロリング帝国という呼称が使用されることがある¹¹³⁶。また、神聖ローマ帝国として捉えることも少なくない（524頁参照）。なお、国号で「帝国」という語が用いられないこともある¹¹³⁷。さらに、訳語上の問題もあり、神聖ローマ帝国は、日本語では、一般に「帝国」と呼ばれているが、原語は必ずしも「帝国」という意ではない（527頁参照）。

11世紀前半、クヌート（223頁参照）がデンマーク、ノルウェー、イングランドの王になると、北海帝国が創設された。大航海時代（342頁参照）にはポルトガル、スペインを始めとするヨーロッパ諸国が海外で領土を獲得し、帝国となる。1721年にはロシア帝国（517頁参照）が発足したが、デンマーク、オランダ、スウェーデン、ベルギー、イタリアのように、国号に帝国は付かないものの、実体的には帝国であった国も少なくない。

なお、イングランドのヘンリー8世（261頁参照）のように、教皇に対抗する目的で、王が皇帝を名乗り帝国となった例もある。1931年、大英帝国は名称を英連邦（コモンウェルス）に変更し、現在に至る（505頁参照）。

帝国は皇帝によって治められ、帝国独自の機関・組織（例えば、構成国の議会・裁判所とは異なる帝国の議会や裁判所）を持つが¹¹³⁸、そうではない場合もある。帝国主義時代のフランスは共和政であった。なお、古代、中国、西アジア、エジプトには広大な帝国が建てられ、皇帝が強力な権限を持っていたが、ヨーロッパでは例外的な国体であった。

◎ 植民地帝国

18世紀後半から19世紀初旬にかけて続いた帝国主義時代、列強は海外で植民地を獲得し、富を築いていったため、植民地帝国とも呼ばれた。当時のフランスは共和政で、皇帝は存在しなかったが、イギリスに次ぐ植民地帝国となる。イギリスはヨーロッパ内にも植民地を持っていた（アイルランドの植民地化）。なお、フランスは革命によって絶対王政が崩壊する前も海外に植民地を持ち、特に北米でイギリスと覇権を争っていたが、王政の終焉後は近隣のヨーロッパ諸国を併合し、数年後にナポレオンが名実ともに帝政を敷いた。

¹¹³⁵ 一般に“Imperium Romanum”はローマ帝国と訳されているが、必ずしも帝国という意ではない（318頁参照）。

¹¹³⁶ 小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦編著『大学で学ぶ西洋史 [近現代]』（ミネルヴァ書房 2011年）190～199頁（五十嵐修）。ただし、カロリング帝国（Karolingerreich）の「帝国」は必ずしも「帝国」を意味するわけではなく、「国」と捉えることも可能である。神聖ローマ帝国の「帝国」について、527頁を参照されたい。

¹¹³⁷ ローマ帝国は Senatus Populusque Romanus（元老院とローマの市民）を国号とした。また、395年の東西分離後も、二つのローマは従来の国号を使用し続けたが、東ローマは「ローマ人の王国」（Βασιλεία τῶν Ῥωμαίων/Res Publica Romana）という国号も用いていた。なお、実際にはギリシア化されることになり、西方からは「ローマ性」ないし「ラテン性」の喪失が指摘された。

¹¹³⁸ 一般に、神聖ローマ帝国は国王カールまたはオットー1世の戴冠（それぞれ800年、962年）に成立し、ロシア帝国はピョートル1世の戴冠（1721年）によって成立したと捉えられている。

14.2. 社会主義思想

資本家が富を集中して豊かになるにつれ、労働者の立場は弱まり、劣悪な条件で働かされる者が急増した。19世紀に入ると、このような状況を批判する**社会主義思想**が強まる。例えば、フランスの**サン・シモン**（1760～1825年）は貧富の差の原因は自由競争にあるとし、計画的に管理された社会の実現を訴えた。

スコットランドのニュー・ラナークで紡績工場を経営したイギリス人の**ロバート・オーウェン**（1771～1858年）は労働者用の住宅を建て、福祉の向上に努めた。また、9歳未満の子供の労働を禁止する工場法の制定に貢献する。なお、9歳以上の子供は1日最長で12時間、働かされた。オーウェンの構想には反対者も多かったため、彼はアメリカに渡り、ニュー・ハーモニー村と呼ばれる理想的共同体を建設したが、村民の対立により成功しなかった。



オーウェンは、1810年頃、ニュー・ラナークの工場に学校を併設し（上図）、昼間は幼稚園と小学校、夜間は青少年と成人が学べる場にした。なお、幼稚園は、1840年、ドイツのフレーベルが Kindergarten（幼稚園）を創設するよりも早い。

渡米前、スコットランドで行っていた工場経営は軌道に乗り、オーウェンは財を築いたが、人道主義に基づく社会主義は概して非現実的であったため、**空想的社会主義**ないし**ユートピア社会主義者**と呼ばれ、懐疑的な見方をされた。前出のシモンも空想的社会主義者の一人である。

なお、「ユートピア」(Utopia)とは300年も前のルネサンス後期ないし宗教改革期（1516年）、イングランドのトマス・モア（1478～1535年）¹¹³⁹が発表した著書『ユートピア』¹¹⁴⁰で書かれている架空の島の名称である。高級官僚であった彼は、住民は私有財産を持たないが、国によって生活が保障されているため幸福であり、全ての者が全ての者のために働く共産制社会について著した。また、このような共同体を「ユートピア」と呼んだ。これは彼が造った単語であり、「どこにも存在しない場所」という意であるが、転じて、空想的社会を指す意味で用いられるようになった。我が国では「理想郷」とも訳されているが、トマス・モアが描いたのは「パラダイス」ではなく、共産制に基づく共同体、つまり、共産主義社会であり、**カール・マルクス**よりも300年以上も早く、資本主義社会の矛盾や不正を指摘している。

フランスの空想的社会主義者である**シャルル・フーリエ**（1772～1837年）は協同組合的理想社会（ファランジュ）の建設を提唱し、今日の生協（生活協同組合）の発足にも影響を及ぼした。同じくフランス人の**ルイ・ブラン**（1811～1882年）は母国の二月革命後に発足した臨時政府に参加すると、労働時間を制限する国立作業所を建て、労働条件の改善に努めた。

これらの社会主義者は、国や社会は労働者を保護するため企業活動を規制すべきであると説いたのに対し、フランスの社会哲学者**ピエール＝ジョゼフ・プルードン**（1809～1865年）は国家の無い自由な社会を求めた（無政府主義・アナキズム）。彼は著書『財産とは何ぞや』の中で「財産とは盗みである」と述べ、私有財産制を否定している。

¹¹³⁹ 法律家のトマス・モアは、宗教改革期、イングランド国王のヘンリー8世（261頁参照）に仕えるまで出世したが、国王の離婚やイングランド国教会の創設に反対したため、反逆罪を問われ、1535年7月、処刑された。

¹¹⁴⁰ なお、ラテン語で書かれた同書の正式名称は“Libellus vere aureus, nec minus salutaris quam festivus, De optimo rei publicae statu deque nova insula Utopia”であり、『共和国の最善の状態と新しいユートピア島に関する愉快で有益な黄金の小冊子』と訳することができる。

ドイツの**カール・マルクス** (1818~1883年、写真左) は前掲の空想的社会主義者や無政府論者の影響を強く受けながらも、資本主義や社会主義を科学的に分析した。彼は自らの理論を科学的社会主義と呼び、空想的社会主義と区別している。また、1867年以降に刊行された『資本論』において、私有財産と自由競争を絶対とする資本主義が共有財産と計画経済に基づく社会主義に移行することは不可避的であると述べた。

マルクスが社会主義に傾倒するようになったのは、同郷の**フリードリヒ・エンゲルス** (1820~1895年、写真右) に出会った1842年以降、つまり、前述した『資本論』を発表する25年も前のことである。エンゲルスは資産家の出身であるものの、イギリスの工場で働く労働者の惨状を見聞し、社会主義を支持するようになった。1848年2月、つまり、フランスで新たな革命が起き、王政が倒れた月 (463頁参照)、両者は『**共産党宣言**』を刊行し、「万国の労働者よ、団結せよ」と訴えている¹¹⁴¹。

なお、「人類の歴史は階級闘争の歴史である」という命題に基づくこの呼びかけは議会政治と両立するものであり、政党を組織して民主的に社会主義を実現すべきという解釈がなされる一方で、暴力による実現も辞さないと捉える立場もあった。後者の流れをくむロシアのボリシェヴィキは、1917年11月、社会主義革命を起こし、政権顛覆を実現している (518参照)。

マルクスが科学的に実証・体系化した社会主義や、それをさらに進めた共産主義は、19世紀以降の歴史に大きなうねりを与え、ヨーロッパ社会に甚大な影響を及ぼした。

※ ファシストの台頭について、387頁を参照されたい。

また、冷戦について、395頁を参照されたい。



ドイツ・ベルリンに設置されているマルクス (左) とエンゲルスの像

¹¹⁴¹ なお、当時、イギリスではすでに工場働く労働者が増えていたのに対し、大陸ではベルギー、フランス、スイス北部、スペイン・カタルーニャ地方等で見られる現象に過ぎなかった。Jürgen Osterhammel, 1850 bis 1880, Informationen zur politischen Bildung Nr. 315, bpb 2012, pp. 30-55, 21.

14.3. イタリア統一 (イタリア王国の建設)

1) 第1次イタリア統一戦争 (オーストリア=ハプスブルク家との戦い)

1848年2月、フランスで二月革命が起き、王政が再び倒れた(463頁参照)。その原動力となった自由主義運動は諸国に広まり、旧体制に対する暴動が発生した。

多くの君主国が建てられ、そのほとんどはオーストリアやスペインに支配されていたイタリア地方では¹¹⁴²、両国を排除し、祖国統一を目指す動きが強まる。北イタリアのロンバルディア=ヴェネツィア王国(右図内の Kingdom of Lombardy-Venetia)では¹¹⁴³、二月革命の翌月(1848年3月)、市民が統治者であるオーストリア=ハプスブルク家に対して蜂起し、共和国の創設を宣言した。西隣のサルデーニャ王国(Kingdom of Sardinia)¹¹⁴⁴はこれを支援し、第1次イタリア統一戦争(1848年3~8月)を勃発させたが、撃退され、ハプスブルク家の勢力を排除することはできなかった。1849年にはロンバルディア=ヴェネツィアの暴動も制圧され、共和国は短命に終わる。



19世紀のイタリア半島

出典：https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Italia_1843-fr.png#/media/File:Italia_1843-en.svg

2) 第2次イタリア統一戦争

その後、イタリア語で「リソルジメント」(Risorgimento)と呼ばれる統一運動は収まるが、10年後、サルデーニャの首相カヴ

¹¹⁴² 例えば、南イタリアの両シチリア王国 (Kingdom of the Two Sicilies) はスペイン=ブルボン家の、北部のトスカナ大公国 (Grand Duchy of Tuscany) はオーストリア=ハプスブルク家の統治下に置かれていた。これに対し、サルデーニャ王国 (Kingdom of Sardinia) はイタリア人の王が、教皇領 (Papal States) は教皇が統治者であった。

¹¹⁴³ 697年、ヴェネツィア共和国が成立したが(208頁の注632参照)、1797年、カンポ・フォルミオの和約によって消滅し、オーストリア領となる(453頁参照)。1805年、オーストリアがアウステルリッツの会戦でフランスに敗れると、フランス領に変わったが、1815年、ウィーン会議の決定に基づき、ロンバルディア=ヴェネツィア王国 (ロンバルディア=ヴェネツィア王国) が誕生し、再びオーストリア領となる。なお、ヴェネツィアの西隣のロンバルディア (中心都市はミラノ) は、1714年、ラシュタット条約に基づき、スペイン=ハプスブルク家領からオーストリア=ハプスブルク家領に変わっていた(487頁参照)。

1851年、ロンバルディア (ミラノ) とヴェネツィアに分割されたが、従来の国号が存続する。1859年に起きた第2次イタリア戦争でオーストリアは敗れ、ロンバルディアを失った (ロンバルディアはサルデーニャ王国の領土となる)。また、1866年の普墺戦争で敗北し、ヴェネツィアもサルデーニャ王国に併合されると、ロンバルディア=ヴェネツィア王国は消滅した。

¹¹⁴⁴ サルデーニャ王国は北イタリアのピエモンテ (中心地はトリノ) を治めていたサヴォイア家が建てた王国である。同家は、1416年、神聖ローマ皇帝のジキスメントより爵位を与えられ、サヴォイア公国を興した。また、1701年に勃発したスペイン継承戦争(487頁参照)で勝利を挙げ、スペインからシチリア島 (シチリア王国) を奪うと、1720年、この島をオーストリア領のサルデーニャ島と交換した。これを機に国号はサルデーニャ王国に変わったが、王国の中心地は、その後も、北イタリアのピエモンテ地方であった。

ールがフランスと組み、再燃させた。彼はこの隣国を見方につけるため、当時、サルデーニャ領であったサヴォイア¹¹⁴⁵とニースの割譲をナポレオン3世に約している(1858年7月のプロンビエールの密約)。

1859年4月、オーストリアの宣戦により**第2次イタリア統一戦争**が勃発すると、サルデーニャ・フランスの連合軍は大きな犠牲を払いながらも、ロンバルディア(ミラノ)を攻略したが、7月、ヴェネツィアに攻め入る前に、ナポレオン3世がオーストリア皇帝(フランツ・ヨーゼフ1世)と休戦協定を結び撤退したため、イタリア統一を実現することなく、戦争は終わった¹¹⁴⁶。その後、フランスはオーストリアとの合意に従い、ロンバルディアがサルデーニャ領になることを認める一方、サルデーニャとの密約に基づき、サヴォイアとニースを獲得した¹¹⁴⁷。

3) イタリア半島中部の併合

第2次イタリア統一戦争勃発時、イタリア半島中部にはトスカーナ大公国(596頁の注1642参照)、パルマ公国、モデナ公国が建てられており、オーストリア・ハプスブルク家によって治められていたが、戦争が勃発すると、これらの国でも反乱が起き、ハプスブルク体制は倒された。なお、これによって共和政に移行するわけではない。終戦の翌月(1859年8月)、3国と教皇領のレガツィオーネは中央統合諸州を編成するが、翌年3月、住民投票の結果に基づき、サルデーニャ王国に併合された。

4) イタリア王国の成立

当時、イタリア南部には**両シチリア王国**が建てられており、スペイン・ブルボン朝の支配下に置かれていた。1860年5月、ニース出身の軍人**ガリバルディ**はシチリア島の占領に成功すると、9月、ナポリを攻略して両シチリア王国を滅ぼし、奪った土地をサルデーニャ国王に献上した。これによって、ヴェネツィア、ローマ等を除くイタリア半島の統一が実現し、1861年3月、**イタリア王国**が成立する。サルデーニャ国王のヴィットーリオ・エマヌエーレ2世が初代国王に、また、カヴールが初代首相に就いた。

なお、19世紀中頃まで教皇はイタリア半島に広大な所領(教皇領)を持っていたが(前頁の地図参照)、イタリア統一の過程で奪われていった。聖都ローマもイタリア人に狙われていたため、カトリック教徒の多いフランス(ナポレオン3世)が駐留し、侵略から守っていた。



初代国王となった
ヴィットーリオ・エ
マヌエーレ2世

Andrea Bestighi 作
(1860年)

5) ヴェネツィアとローマの併合

1866年6月、プロイセンとオーストリアの間で**普墺戦争**(454頁参照)が勃発すると、イタリアはプロイセンの側に立って参戦しており、これを**第3次イタリア統一戦争**と呼ぶことがある。王国はこの戦争で勝利を収め、同年10月、ヴェネツィアを獲得した。また、1870年9月、普仏戦争で苦境に立たされたフランス軍がローマから撤退すると、この都市を併合し、翌年7月、フィレンツェから首都を遷す。これによって教皇領は廃止され、その後、60年も続くカトリック教会との争いが発生することになる(248頁参照)。

なお、これで王国はイタリアの全域を領有することになったわけではない。北部には、まだハプスブルク家領が残されており、「**未回収のイタリア**」と呼ばれた。イタリアが第1次世界大戦でオーストリアを倒し、ドイツ語が話されていた地域まで「回収」すると対立が生じた。両国間の争いが収まるのは1990年代に入ってからである(38頁参照)。

¹¹⁴⁵ サヴォイアはサルデーニャの王室(サヴォイア家 Savoia)に縁のある地域であるが、1860年、本文中で述べたプロンビエールの密約が実行に移され、フランスに編入された。現在、仏語でこの地域は「サヴォア」(Savoie)と呼ばれている。

¹¹⁴⁶ 1859年7月、ナポレオン3世がヴィラフランカの和約を結び、撤退したのは、前月、ソルフェリーノの戦いで勝利を収めたものの、多数の死者を出しただけではなく、プロイセンがオーストリア側について参戦する動きがあったためと考えられている。イギリス、ロシアはイタリア統一に関心を示さず、戦争の終結を促していた。Paulus Andreas Hausmann, Friedenspräliminarien in der Völkerrechtsgeschichte, ZaöVR 1965, pp. 657-692, 679-682.

なお、当時、カール・マルクス(368頁参照)はこの休戦協定を批判する文書を発表している。Karl Marx, Der Vertrag von Villafranca, in http://www.mlwerke.de/me/me13/me13_423.htm

¹¹⁴⁷ 編入に先立ち、1860年4月、サヴォイアとニースでは住民投票が行われ、ほぼ全ての投票者がフランス編入を支持した。H. Ménabréa, Guichonnet pour la Savoie, Conseil Général des Alpes-Maritimes.

14.4. ドイツ統一（ドイツ帝国の創設）

1) 統一論争

19世紀半ば、ドイツ地方には約40の君主国や自由都市が存在し、それらは**ドイツ連邦**（442頁参照）の下で緩やかにまとまっていたが、1848年2月、フランスで新たな革命が発生し、王制が倒れると、翌月、ドイツでも民衆が蜂起し、君主制の存続を脅かした。**三月革命**（436頁参照）と呼ばれる、この自由主義運動を抑えるため、諸邦は国民議会を招集し、新しい国家体制について審議させることにした。なお、連邦制の国を建設することは決まっており、1848年5月、議会の発足とともに連邦国家が成立する。争点は大勢の非ドイツ人（例えば、ハンガリー人やボヘミア人）を抱えるオーストリアの扱いであった。白熱した議論の末、オーストリアを排除する決定を議会が下すと（28頁参照）、同国が反発し、統一論争は紛糾した。当時、この国は、ドイツ内でプロイセンに次ぐ第2の規模を誇り、とりわけ南ドイツで大きな影響力を持っていたが、ウィーン会議で北イタリアを獲得し、その統治に力を入れた結果、ドイツ諸邦とのつながりは薄れるようになっていた。他方、プロイセンは諸邦との経済統合を進め、ドイツ統一を牽引した。

プロイセンとオーストリアの対立が激しくなり（26頁参照）、ドイツはむしろ分裂の危機に立たされる中、議会は諸邦を束ねるため、プロイセン国王をドイツ皇帝に選んだ。しかし、国王が即位を拒んだため（その理由について、444頁参照）、議会運営は完全に行き詰まることになる。このような状況下、諸邦では旧体制を復活させる動きが強まり、三月革命は押さえ込まれた。1849年5月、議会が自主的に解散すると、統一運動は収束した。

2) 北ドイツ連邦の創設

1860年代初旬、イタリア統一が実現する中、プロイセンでは**ビスマルク**（447頁参照）が首相に就任し、ドイツ統一運動は盛り返すようになる。彼の下で富国強兵を図ったプロイセンは1864年の**デンマーク戦争**に次いで、1866年の**普墺戦争**でも勝利を取ると、翌年、周辺の北ドイツ諸邦と共に**北ドイツ連邦**（444頁参照）を創設した。なお、この連邦は主権国家であり、その建設により北ドイツの統一が実現する。それに南ドイツ諸邦を加えた祖国統一を達成するため、ビスマルクはフランスを共通の敵に仕立て上げた。

当時、フランスでは**ナポレオン3世**が帝政を敷いており、プロイセンの南下に備え、ルクセンブルクの併合、つまり、この小国を「砦」として利用する計画が進められていた。ビスマルクはそれを了承したが、フランスとルクセンブルクに隣接する南ドイツ諸邦が反発したため、後に撤回する。これを裏切りと感じたナポレオン3世はプロイセンへの敵対心を露わにし、一触即発の事態に陥ったが、イギリスの仲介により、戦争は回避された（1867年の**ルクセンブルク危機**について、480頁を参照されたい）。

このような状況下、プロイセン国王（ホーエンツォレルン家）の縁戚にあたるレオポルトがスペイン国王¹¹⁴⁸になる話が持ち上がった（1869年）。これが実現すると、フランスは北と南の両側からプロイセンに挟まれることになるため、ナポレオン3世が強く抗議すると、1870年7月12日、レオポルトは即位を辞退した。こうしてフランスは外交的勝利を取ることができたが、それに満足せず、翌日、大使をプロイセン国王の元に派遣する。そして、身内からスペイン王を出さないことをプロイセン国王に約束させようとしたが、国王は応じなかった。

この経緯を国王から知らされたビスマルクは、フランスの傲慢な要求に国王は立腹し、再度の引見を断つたと解釈できる文面を作成し、新聞社に流した（**エムス電報事件**）。これが報道されると、南ドイツでも反仏感情が高まる。他方、ナポレオン3世も自らの要請に応じなかったプロイセン国王に対する怒りを取ることができず、1870年7月19日、プロイセンに対して宣戦布告した。



1870年7月13日、ドイツ南西部の温泉療養地エムスに滞在中のプロイセン国王ヴィルヘルム1世（左）を訪ねるフランス大使のベネデッティ伯爵

この日の朝、プロイセン国王はフランスの要請を強い口調で退けている。なお、この時点で国王はレオポルトがスペイン国王への即位を辞退したことを認識していなかった。その知らせを受けた後、国王は仏大使に再度、引見する意志はないことを官吏を通じて伝えさせた。この伝令役が大使と同等の地位を持つ者ではなかったため、大使は侮辱されたとフランスは感じるようになる¹¹⁴⁹。

¹¹⁴⁸ 1868年9月、スペインでは革命が起き、女王のイザベル2世はフランスに亡命していた（488頁参照）。

¹¹⁴⁹ David Bellos, *Is That a Fish in Your Ear?*, Farrar Straus & Giroux 2012, p. 315.

3) 普仏戦争とドイツ帝国の建設

こうして始まった戦争は「**普仏戦争**」と呼ばれ、「普」はプロイセンを指すが、厳密にはプロイセンが盟主を務める北ドイツ連邦とフランスの戦いであった。また、南ドイツ諸邦も参戦したため、「**独仏戦争**」とも呼ばれる。

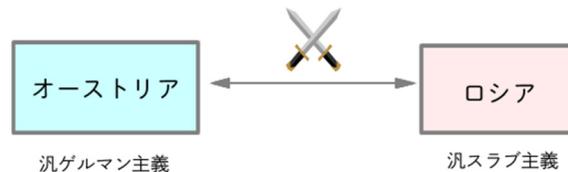
軍備に勝るドイツは開戦から僅か1ヶ月半後の9月2日、ナポレオン3世を戦場で拘束し、捕虜にした。フランスは国防政府を立ち上げ、戦争を続行したが、ドイツ軍の優勢は変わらなかった。1871年1月28日、パリが陥落し、休戦協定が結ばれた。

フランスを共通の敵とすることで団結力を増したドイツ人は、1871年1月1日、ドイツ帝国を創設し、南ドイツ諸邦を含む祖国統一を達成した(446頁参照)。また、同月18日(つまり、停戦協定が結ばれるよりも早く)、敵地フランスのヴェルサイユ宮殿でドイツ皇帝の戴冠式を挙行しており、ドイツへの敵対心や復讐の念をフランス人の心に植え付けることになる(588頁参照)。

同年5月、フランクフルトで講和条約が締結され、フランスは賠償義務を負わされた。また、アルザス・ロレーヌ地方(594頁参照)をドイツに割譲することになった。

14.5. 三帝同盟、三国同盟と三国協商

ドイツ帝国はプロイセン王国が中心となって成立し、プロイセン首相の**ビスマルク**(447頁参照)が帝国宰相を兼ねた。彼はドイツ統一過程でオーストリアを排除したが、その後は関係を改善し、軍事同盟を結成した。また、フランスの復讐を恐れ、オーストリア、ロシアと共に**三帝同盟**を立ち上げたが、**汎ゲルマン主義**を掲げ、バルカン半島へ進出するオーストリアと**汎スラブ主義**を掲げ、同半島へ進出するロシアが対立するようになったため、同盟には**綻び**が出る。



汎ゲルマン主義とはドイツ、オーストリアといったドイツ人の国を統合するだけでなく、中世以降、ドイツ人が住む東欧やバルカン半島を含めたドイツ統一を目指す思想である。19世紀後半から20世紀初頭にかけて主張され、汎スラブ主義と対立した。ただし、18世紀後半にはバルカン半島への進出を目指すロシアと半島の分割について秘密裏に取り決めている。

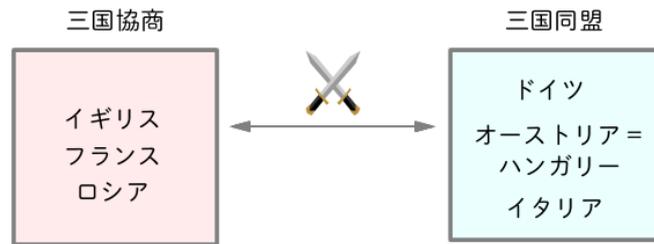
汎スラブ主義とはスラブ人(226頁参照)の独立と統一を目指す考えである。14世紀後半よりバルカン半島のスラブ人はオスマン帝国に支配されており、19世紀、スラブ人の一部族であるロシア人はスラブ人の解放を訴え、同半島に進出した。なお、すでに18世紀より、ロシアは南下政策を掲げて黒海方面に進出し、オスマン帝国と対立するようになっていた(425頁参照)。

イギリスもロシアの南下を警戒するようになると、ビスマルクは諸国の利害調整に乗り出した。1878年6月、彼は「誠実な仲介人」を称し、帝都ベルリンで国際会議を開くが、実際にはイギリスやオーストリアに加担しており、ロシアのバルカン半島進出を阻む条約を成立させた。これに反発したロシアは三帝同盟から脱退するが、ビスマルクの巧みな外交手腕によって、1881年6月、同盟は復活した。

翌年、ビスマルクはドイツ、オーストリア、イタリア間で**三国同盟**を発足させた。その後、再び**露露**の関係が悪化し、三帝同盟が崩壊すると、ビスマルクは**独露再保障条約**を結び、ロシアとの関係を維持した。その結果、「**光栄ある孤立政策**」を採るイギリスと、孤立を強いられたフランスを除き、ヨーロッパの列強はドイツと同盟関係を結ぶことになった。ビスマルクの巧みな外交戦術によって構築された国際秩序を**ビスマルク体制**と呼び(587頁参照)、ロシアの覇権を弱めることで諸国の均衡は維持された。しかし、1888年3月、初代ドイツ皇帝のヴィルヘルム1世が死去し、6月、孫¹¹⁵⁰の**ヴィルヘルム2世**が29歳で即位すると(168頁および448頁参照)、すでに70代に入っていたビスマルクは若き皇帝と対立し、辞任に追い込まれる。こうして彼が築いた体制は崩れていった。

¹¹⁵⁰ ヴィルヘルム1世が1888年3月に死去すると、同月、長男のフリードリヒ3世が56歳で即位したが、6月、3世は死去し、その長男のヴィルヘルム2世が第3代皇帝になる。

ヴィルヘルム 2 世は世紀をまたいで国を治め、多くの逸話を残す君主となった。植民地獲得にも積極的に乗り出し、帝国主義や世界政策を推進したが、海上進出はイギリスとの対立を招くことになるため、陸路でペルシア湾まで進出することを策定する(ヴィルヘルム 2 世は従兄弟であるイギリス国王との対立を避けようとした)。具体的には、首都ベルリン、ビザンティオン(現トルコ・イスタンブール)、バグダード(現イラクの首都)を結ぶ鉄道の建設を計画した。これは 3 都市の頭文字を取り「**3B 政策**」と呼ばれ、それを実現するため、ドイツはオスマン帝国からバグダード鉄道敷設権を獲得した。なお、これはイギリスの「**3C 政策**」¹¹⁵¹と衝突することになった。また、ロシアの南下政策とも抵触した。そのため、ドイツが独露再保障条約の更新を見送ると、ロシアはフランスに接近し、同盟関係を結んだ。また、1904 年には英仏協商、1907 年には英露協商が締結されたため、英仏露は直接、協定を締結したわけではないが、**三国協商**と呼ばれる同盟、つまり、ドイツ包囲網が成立する。



こうして帝国主義最盛期の 20 世紀初頭、三国協商と三国同盟の対立関係が生まれ、第 1 次世界大戦を引き起こすことになる。なお、イタリア・オーストリア間には「未回収のイタリア」(38 頁参照)という領土問題があったため、三国同盟の結束力は強くなかった。南チロルやトリエステを獲得する好機と考えたイタリアは第 1 次世界大戦中の 1915 年 5 月、同盟から脱退し、オーストリアに宣戦布告した。そして勝利を取めると、両地域を併合するに至った(40 頁参照)。

14.6. 世界分割

大航海時代(342 頁参照)、スペインとポルトガルは新大陸アメリカを植民地化し、原住民を奴隷として働かせた。16 世紀に奴隷が減ると、アフリカ大陸から新大陸に黒人奴隷を送るようになる¹¹⁵²。

【参考】アメリカの南北戦争(1861~1865 年)

1803 年、デンマークは大西洋上の奴隷貿易を禁止する最初のヨーロッパの国となった(377 頁の注 1153 参照)。1807 年、イギリスがこれに続き、1833 年には奴隷制度そのものが廃止されるが、米国では、この世紀の後半になっても維持されており、奴隷解放をめぐる対立は内戦に発展した(1861~1865 年の**南北戦争**)。史上初の近代的戦争とされる内戦の後半、リンカーン大統領は奴隷解放宣言を出す(1863 年 1 月)。また、自らが属する北軍が勝利を取めると、奴隷解放を実現したが、黒人が社会的・経済的に解放されることはなかった。人種差別も撤廃されず存続する。

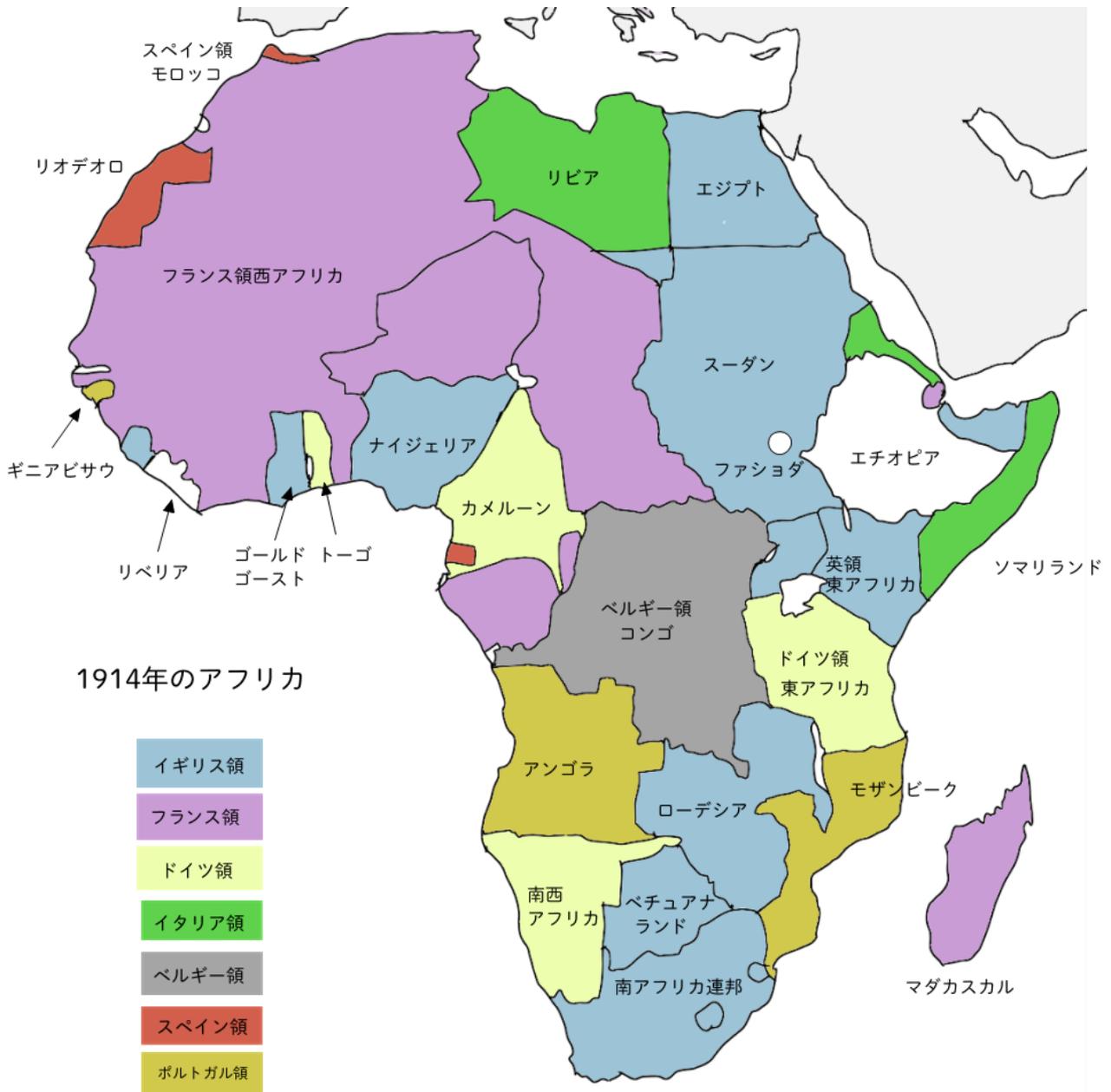
アメリカで南北戦争が起きていた頃、イギリスを始めとするヨーロッパの列強は**帝国主義**(365 頁参照)を推進し、アジアやアフリカの植民地支配を強化していた。なお、中南米のスペイン領では、すでに 19 世紀初旬、スペインの国力衰退に乘じ、次々と独立を達成している(360 頁の注 1123 参照)。

19 世紀中旬、アフリカ探検が進み、大陸内部には資源が豊富にあることが明らかになると、列強のアフリカ進出が加速した。まだ植民地を持っていなかったベルギーはアフリカの奥地まで進み、最深部のコンゴの獲得に乗り出したが、フランスもコンゴの植民地化を狙っていたため、両国は衝突する。これがイギリスやその他の西洋諸国を巻き込む国際問題に発展すると、ビスマルクは、1884~1885 年、再びベルリンで国際会議を開き、列強の利害調整に乗り出した。

¹¹⁵¹ 「3C 政策」とは、①カイロ(エジプト)とカルカッタ(インド)を結ぶ中東・南アジアと、②カイロとケープタウン(南アフリカ)を結ぶ東アフリカに勢力圏を確立するイギリスの帝国主義政策である。なお、②はアフリカ縦断政策と呼ばれるが、フランスのアフリカ横断政策と衝突し、1898 年にファショダ事件が発生した(375 頁参照)。

¹¹⁵² なお、アフリカから本国ポルトガルへの奴隷貿易はすでに 14 世紀より行われていた。

この会議で、最初に占領した国がその地域の領有権を獲得する（先占権）^{せんせん}ことが決まると、植民地獲得競争はさらに激しくなり、アフリカ大陸で独立を維持したのはエチオピアとリベリアのみとなる。なお、西欧列強による植民地獲得が本格化した19世紀最後の30年は「世界分割の時代」と呼ばれている。



1) イギリス

アフリカ縦断政策を掲げるイギリスは、1875年、財政難に陥っていたエジプトよりスエズ運河の株式を買い取り、近東政策の拠点にした。翌年、エジプトは財政破綻し、英仏等の管理下に置かれるが、1881年、エジプトのウラービー大佐が植民地化に反発し、蜂起すると（ウラービーの反乱）、イギリスは軍隊を派遣して制圧した。これを機にイギリスはエジプトを単独で支配するようになった。また、1885年、スーダンで発生したマフディーの乱を鎮圧すると、アフリカ大陸を南下し、勢力を拡大した。

なお、大陸最南端のケープ植民地は、1652年、オランダが東インド会社の中継基地として開発していたが、18世紀末、イギリスはこの地域を占領し、1814年のウィーン会議で英領として正式に認めさせた（362頁の注1127参照）。

1890年、ケープ植民地の首相となったローズはヴィクトリア女王（505頁参照）よりイギリス南アフリカ会社設立の特許状を与えられ、大陸中央部を開発した。この地域は彼の名にちなみに、ローデシア（現ザンビア、ジンバブエ）と名付けられた。

1886年、オランダ移民の子孫（ボーア人、ブール人）が興したトランスヴァール共和国で金鉱が発見されると、イギリスはケープ植民地への併合を画策するようになった。トランスヴァールは同じボーア人が建てたオレンジ自由国と結束し、戦争に備えた。1899年、イギリスとの戦争（南アフリカ戦争）が実際に勃発すると、徹底して抗戦したが、1902年、制圧された。1910年、両国はケープ植民地に編入され、南アフリカ連邦が発足した。

こうしてアフリカの植民地化でも諸国を圧倒したイギリスは世界陸地面積の4分の1を支配するまでになった。

2) フランス

アフリカ横断政策を掲げるフランスは、すでに19世紀前半より占領していたアルジェリアを拠点として植民地獲得に乗り出し、1881年、チュニジアを保護国とする。その後、サハラ砂漠一帯の西アフリカを植民地に加えると、スーダンを経て、ジブチ、マダガスカルに進出した。

イギリスとフランスは、1898年9月、スーダンのファショダで衝突したが、国政を揺るがすドレフュス事件（464頁の注1351参照）が発生していたフランスが譲歩し、スーダンはイギリス領になる。

なお、当時のフランスは他のヨーロッパ列強とは異なり、君主国でなく、共和国であった（464頁参照）。

3) ドイツ、イタリア、ベルギー

1871年に国家統一をようやく実現したドイツはアフリカ進出で英仏に後れを取っていたが、1884年、トーゴ、カメルーン、ドイツ領東アフリカ（現タンザニア）、南西アフリカ（ナミビア）を植民地とした。しかし、第1次世界大戦で敗北すると、それらを全て放棄し、イギリス、フランス、ベルギーの植民地が変わった。

同様に、イタリアも諸国の後塵を拝していたが、アフリカ東部のエリトリアとソマリランドの獲得に成功した。1896年のアドワの戦いではエチオピアに敗れ、植民地化に失敗したが、1911～1912年に勃発したイタリア＝トルコ戦争で北アフリカのトリポリ、キレナイカをオスマン帝国から奪い、植民地とする。なお、古代ローマ時代（または、より古く、古代ギリシアの時代から）、アフリカ大陸は「リビア」と呼ばれており、イタリアは北アフリカに建設した植民地にこの名を付けた。現在、この地域には「リビア国」が建てられている。

ベルギー国王のレオポルト2世は、列強がまだ開拓していなかった奥地まで進み、コンゴ盆地を開拓させた。しかし、植民地化に政府が反対したため、1885年、自身の私領地とする。この所領はコンゴ自由国と呼ばれたが、原住民の酷使・抑圧が国際的批判を浴び、1908年、国が植民地評議会を通して管理するベルギー領コンゴに変わった。なお、その面積はベルギーの約70倍に達するほど巨大であり、アフリカ有数の工業地帯として本国の繁栄を支えた。ベルギーは第1次世界大戦でドイツが敗れると、その植民地であった東アフリカ（現タンザニア）をイギリスと分割し、自国領に加えた。

4) ポルトガル、スペイン

ポルトガルは、400年ほど早い大航海時代よりアフリカに進出しており（496頁参照）、15世紀後半にはモロッコを占領した。しかし、1580年、ポルトガルがスペインに併合されたのに伴い、モロッコはスペイン領に変わった。それから300年以上経過した1912年、モロッコはフランスの保護国となる。

16世紀、ポルトガルはアンゴラ、ギニアビサウ、モザンビークを植民地とした。

同様に大航海時代よりアフリカに進出していたスペインは、ベルリン会議の決定（373頁参照）に基づき、1884年、リオデオロ（西サハラ）を占領した。

なお、スペインとポルトガルは15世紀末以降、中南米に植民地を築いたが、19世紀初旬に独立している（360頁の注1123参照）。

※ オランダ

世界分割の時代（19世紀最後の30年）、オランダはアフリカで植民地を獲得していないが、アジアや南米に植民地を持っており、植民地大国の一角を占めていた（470頁参照）。

◎ アフリカ植民地の独立

第2次世界大戦後、アフリカで独立運動が活発になり、全ての植民地が独立を達成した。先陣を切ったのはリビアで、この世界大戦で本国イタリアが敗れると、英仏の統治が変わったが、1951年に独立を果たす。

1956年にはスーダンがイギリスから、また、モロッコとチュニジアがフランスから独立した。さらに、1957年にはガーナがイギリスから、1958年にはギニアがフランスから独立を達成している。1960年にはセネガル、コートジボワール、トーゴ、中央アフリカ、カメルーン、コンゴ、マダガスカル等を含む17ヶ国がフランス、イギリス、ベルギーから独立を果たす。

他方、ポルトガルとスペインの植民地の独立は、1970年代中旬になってようやく実現した。独立が遅れたのは両国では同年代半ばまで軍事独裁が続いていたためである。1974年、ポルトガルで革命が起き、独裁が倒れると(497頁参照)、同年から翌年にかけて、アンゴラ、ギニアビサウ、モザンビークが独立を達成した。

スペインは1975年までリオデオロ(西サハラ)を占領していたが、独裁者フランコは死去する直前、モロッコ、モーリタニアと条約を締結した。これに従い、リオデオロは両国間で分割され、スペインはこの地域から撤退した。

なお、諸国は独立後も旧本国の言語(英語、フランス語、スペイン語)を使用し続け、現在でも公用語に指定している。

◎ アイルランドの独立

1649年、イギリスは西隣のアイルランド島を植民地とした。つまり、イギリスはヨーロッパにも植民地を持っていた(後に、キプロスとマルタも英国の植民地となる)。なお、イングランド王がアイルランド王を自称したため、アイルランドは形式的に王国として存続することができた。また、1801年、イギリスと合併し、グレートブリテンおよびアイルランド連合王国を成立させた(507頁参照)。

その後もイングランドの圧政が続いたため、アイルランドでは独立運動が根強く行われた。第1次世界大戦後、世界各地で広まった民族自決の原則に後押しされ、独立派が勢いを増すと、1919年、独立戦争が勃発する。その他の植民地(特に、インド)への波及を恐れたイギリスは徹底抗戦で臨んだが、国際社会から厳しく批判されたため、3年後、休戦に応じた。こうして、1922年、アイルランド島の南部は「アイルランド自由国」として独立を達成する(他方、北部はイギリスに留まった)。その際、アイルランドは英連邦への加盟を継続したが、1937年、新憲法を制定し、英国王ではなく、大統領を元首とした。これを機にアイルランドは英連邦から離脱するが、正式に離脱したのは第2次世界大戦後の1949年である(508頁参照)。

【補説】帝国主義の清算

ヨーロッパ諸国による世界分割が本格化したのは19世紀最後の30年であるが、すでに15世紀初旬より、諸国はアフリカ、アメリカ、アジアに植民地を建設していた。また、16世紀、新大陸アメリカで奴隷が不足すると、アフリカから搬送する黒人奴隷貿易を開始した(15~18世紀の**大航海時代**について、342頁参照)。この貿易が禁止されるのは19世紀に入ってからである¹¹⁵³。

1. 旧植民地への文化財の返還

海外進出は経済(資本主義)を発展させ、それまで経済的に劣っていたヨーロッパを世界中で最も豊かな地域に変えるきっかけになった。諸国の繁栄を支えたのは植民地であり、ヨーロッパの征服者・侵略者は原住民を奴隷として働かせた。また、支配した地域の文化財を略奪し、本国に持ち帰り、博物館や美術館の所蔵物となる。まさに、それを展示するために文化施設が建てられることもあったが、後に財物の強奪が指摘されるようになる。2007年9月、国連総会が先住民の権利に関する宣言を採択すると、旧植民地から搬送された文化財の取扱いに関する議論が活性化した。

旧植民地の返還請求も強まる中、フランスのマクロン大統領は、2017年11月、植民地におけるヨーロッパ諸国の犯罪を認め、文化財を返還する方針を表明した。また、翌年11月、大統領の委託を受けた専門家によって報告書(“Rapport sur la restitution du patrimoine culturel africain”)が作成された。同報告書は他のヨーロッパ諸国における審議でも重要な資料として用いられている¹¹⁵⁴。

その後、フランスは国内法を制定し、2021年11月、西アフリカのベナン共和国に21点の文化財を返還した。ドイツも、翌年12月、公的機関が所有する文化財の所有権をナイジェリアに移しており、同国から借用する形で、文化財を展示している¹¹⁵⁵。

2. 帝国主義の象徴の撤去

2020年5月、米国で黒人男性が警察官に押さえつけられ、窒息死する事件が発生した(ジョージ・フロイド事件)。その警察官が白人であったことから、全米各地で人種差別を糾弾する抗議活動が起きると、ヨーロッパにも波及し、大きな社会問題に発展する。なお、アメリカでは“Black Lives Matter”(黒人の生命も重要である)という標語の下で人種差別の撤廃を求める運動が行われたのに対し、ヨーロッパでは黒人を奴隷とし、搾取していた帝国主義が批判の対象となった。

特に、イギリス南西部のブリストルでは、2020年6月、黒人奴隷貿易商人のエドワード・コルストン(1636~1721年)の像が倒され、港に投げ込まれる事件が起き、注目された。第2次世界大戦中、首相を務めていたウィンストン・チャーチル(608頁参照)の像にも「人種差別主義者」という落書きが付けられ、人物像が見直されることになる¹¹⁵⁶。同時期、彼と共に欧州統合を牽引した元ドイツ首相のコンラート・アデナウアーも、戦前、植民地政策に関与していたため、批判された¹¹⁵⁷。

2020年以降、ヨーロッパでは帝国主義時代を清算する試みが増えている。また、人種差別につながるものが撤去されるようになり、その一環として、建物、駅、通り等の名称が変更された。例えば、コルストンの名前を冠していたホールは「ブリストル・ビーコン」(Bristol Beacon)という名称に変わった。

¹¹⁵³ ヨーロッパで最初に大西洋上の奴隷貿易を禁止したのはデンマーク(1803年)で、イギリス(1807年)がこれに続いた。なお、1791年8月22日から翌日の夜にかけて、フランスの植民地サン・ドマング(現ハイチ)で奴隷解放運動が起き、それが大西洋奴隷貿易の禁止につながった(注1123参照)。これを記念し、ユネスコは8月23日を「奴隷貿易とその廃止を記念する国際デー」に指定している。

¹¹⁵⁴ TU Berlin, TIME zählt Bénédicte Savoy zu den 100 einflussreichsten Persönlichkeiten der Welt, in <http://www.tu-berlin/ueber-die-tu-berlin/profil/pressemitteilungen-nachrichten/time-benedicte-savoy>

¹¹⁵⁵ See taz v. 20. Dezember 2022, Rückgabe von Beutekunst, Auf dem Weg zur Aussöhnung.

¹¹⁵⁶ Deutschlandfunk v. 18. September 2020, Großbritanniens blinde Flecken.

¹¹⁵⁷ Deutschlandfunk Kultur v. 20. Juli 2020, Afrikaner verstehen die Debatte nicht. See also Lea Carstens and Moritz Heinrich, Koloniale Spuren in Bonn, 2019, p. 11.

ドイツも同様の問題を抱えているが、首都ベルリンの中央部に位置する「モーレン通り」(Mohrenstraße) は 25 年も前から議論の対象になっており、名称の妥当性は、近年、初めて取り上げられたわけではない¹¹⁵⁸。なお、「モーレン」とはアフリカ出身の黒人を指す¹¹⁵⁹。1700 年頃、つまり、帝国主義時代の 200 年前、アフリカ人の子供が連れて来られ、王室で働かされたことが「モーレン通り」の由来になったと考えられている¹¹⁶⁰。この道に接する地下鉄の駅も通りと同じ名称で呼ばれているが、2020 年 5 月、米国でジョージ・フロイト事件が起き、人種差別に対する批判が強まったことを受け、地下鉄を運営する会社は、7 月、駅名を「グリムカ通り」(Glinkastraße) に変更することを決めた¹¹⁶¹。「グリムカ」は、19 世紀前半、この駅の近くに住んでいたロシアの音楽家である。ところが、彼は反ユダヤ主義者であったことが判明し、新たな批判が噴出することになる。翌月、地下鉄運営会社は「アントン・ヴィルヘルム・アモ通り」(Anton-Wilhelm-Amo-Straße)¹¹⁶²という代替案を設け、行政側に通り名の変更を提案した。2021 年 3 月、当局はこの案を支持しているが、住民がこの決定の違法性を争い、裁判所に訴えたため、争いは法廷闘争に持ち込まれることになった。2023 年 7 月、裁判所は住民の訴えを退けたが、控訴が提起されたため、それから 2 年半が経過した 2024 年 7 月 1 日の時点でも、通りの名称は変わっていない。原告の一人である歴史家は、名称が付けられた 300 年前、人種差別を行う意図は存在せず、「モーレン通り」という名称は、むしろ、地域の多様性を高めていると述べている。また、通りの名称はベルリンの歴史の一部になっているため、抹消すべきではないとする¹¹⁶³。これに対し、多くの専門家は「モーレン」という単語には人種差別のニュアンスが含まれているため、使用すべきでないと反論している¹¹⁶⁴。

植民地政策の面影はその他にも存在する。例えば、ドイツ大手のスーパーマーケット“EDEKA”(エデカ)は“Einkaufszentrale der Kolonialwarenhändler”の略称であるが、それを翻訳すると「植民地商品取扱業者のショッピングセンター」になる。とりわけ、チョコレートは植民地で生産されたカカオを原料にしたため、パッケージには黒人のイラストが使われていた。これらに人種差別の意図はないが、現在は帝国主義時代の名残としてネガティブに捉えられることが多い。また、前述したように、多くの美術館・博物館はアフリカから持ち込まれた文化財を所有しており、大学も文化財の所有やアフリカの研究・開発を通し、植民地政策に関わったことが指摘されている¹¹⁶⁵。



ドイツの老舗メーカー Sarotti (ザロツティー) は、1870 年代、モーレン通りに店舗を構えていたことから、第 2 次世界大戦後、上掲左のロゴ¹¹⁶⁶を使用するようになった。ドイツでは非常に親しまれたロゴであったが、人種差別にあたるという批判を受け、右のロゴ(ザロツティーの魔法使い)に変わり、現在に至る。

なお、海外に植民地を持たなかったヨーロッパ諸国も他国の植民地貿易に投資し、物品を輸入していた。また、植民地で研究を行った過去を持ち、その清算が求められている¹¹⁶⁷。

2022 年 6 月、ベルギーのフィリップ国王はコンゴの首都キンシャサを訪問し、かつての植民地支配に対し遺憾の意を

¹¹⁵⁸ Berliner Entwicklungspolitischer Ratschlag, Mohrenstraße, in <https://eineweltstadt.berlin/publikationen/stadtneulesen/mohrenstrasse/>

¹¹⁵⁹ 現在は“Mohr”(複数形は“Mohren”)ではなく、“Neger”(英語では Negro ニグロ)という単語が使われている。

¹¹⁶⁰ Institut der Europäischen Ethnologie, FAQ zur Umbenennung der "Mohrenstraße" (im Folgenden: M*-Straße), in <https://www.euroethno.hu-berlin.de/de/das-institut/faq-zur-umbenennung>

¹¹⁶¹ BVG, Großer Bahnhof für Glinka, in <https://unternehmen.bvg.de/pressemitteilung/grosser-bahnhof-fuer-glinka/>

¹¹⁶² アントン・ヴィルヘルム・アモは、18 世紀初頭、ガーナで生まれた黒人で、オランダに奴隷として連れて来られたが、ドイツで学業を修めた人物である。See rbb24 v. 10. September 2023, Umbenennung der Mohrenstraße zieht sich weiter hin.

¹¹⁶³ Institut der Europäischen Ethnologie, ibidem.

¹¹⁶⁴ See rbb24 v. 6. Juli 2023, Mohrenstraße in Berlin-Mitte darf umbenannt werden.

¹¹⁶⁵ Lea Carstens and Moritz Heinrich, Koloniale Spuren in Bonn, 2019, p. 20. See also Stadt Köln, (Post)koloniales Erbe, in <https://www.stadt-koeln.de/leben-in-koeln/soziales/diversityvielfalt/postkoloniales-erbe>

¹¹⁶⁶ 画像出典 The British Candy Connoisseur, Sweet Spotlight: Dark History of the Sarotti Mohr (ft. Katzenzungen), in <https://thebritishcandyconnoisseur.wordpress.com/2022/02/09/sweet-spotlight-dark-history-of-the-sarotti-mohr-ft-katzenzungen/>

¹¹⁶⁷ Stadt Zürich, Koloniales Erbe Zürich, in https://www.stadt-zuerich.ch/portal/de/index/politik_u_recht/stadtrat/weitere-politikfelder/koloniales-erbe.html

表すとともに、両国の和解を呼びかける演説を行った。

3. コロンブスに対する評価

クリストファー・コロンブス (1451~1506 年) は帝国主義時代の人物ではなく、15 世紀末の大航海時代に活躍した航海士・冒険家である。彼はマルコ・ポーロ (421 頁参照) の『東方見聞録』に出てくる「黄金の国ジパング」に憧れ、アジアへの航海を計画した。すでにアフリカ進出を果たしていたポルトガル国王に経済的支援を求めたが、話がまとまらなかったため、スペインで支援者を探すと、国土回復を達成し、余力が出始めていた女王イザベルから支援を受けられることになった。

1492 年 8 月 3 日、インドを目指し出港したコロンブスは、10 月 12 日、現キューバ島への上陸を果たす。原住民から金銀・財物を略奪し、スペインに持ち帰ると、大きな歓迎を受け、宮殿で盛大な式典が開かれた。その後も新大陸への航海を繰り返し、植民地建設に関わった。こうしてスペインに黄金期をもたらしたコロンブスは、スペイン人ではないが (イタリア・ジェノヴァの出身である)、この国の英雄とされている。これに対し、南米では侵略者・虐殺者とみなされることも少なくない。

近年、彼に対する批判は強まっており、南米では彼の像が壊される事件が発生している¹¹⁶⁸。米国・ロサンゼルスでは、すでに 2018 年 11 月、原住民の長年に亘る抗議活動が実り、コロンブスの像が撤去されることになったが¹¹⁶⁹、2020 年 5 月にジョージ・フロイド事件 (前述参照) が起きると、記念碑をめぐる議論は激しさを増した¹¹⁷⁰。

なお、コロンブスがキューバ島に上陸した 10 月 12 日は、スペインでは「スペインの祝日」(Fiesta Nacional de España) に指定されており、首都マドリードでは国王も参加する軍事パレードが行われる。米国では「コロンブスの日」と呼ばれており、1970 年、この祝日は 10 月の第 2 月曜日に変わった¹¹⁷¹。他方、スペインの植民地であった南米では「人種の日」(Día de la Raza) と呼ばれていたが、現在は様々な名称に変更されている。例えば、アルゼンチンは、2020 年、「文化の多様性を尊重する日」(Día del Respeto a la Diversidad Cultural) に改め、諸民族のアイデンティティや文化の違いに関する認識を高める日とした¹¹⁷²。

【参考】クリストファー・コロンブス (Christopher Columbus) は英語による名称で、イタリア・ジェノヴァ出身の彼はイタリア語では「クリストフォロ・コロombo」(Cristoforo Colombo) と名乗っていた。スペインに移住すると、スペイン語風の「クリストバル・コロン」(Cristóbal Colón) に変更している。

イタリア語	Cristoforo Colombo	クリストフォロ・コロombo
スペイン語	Cristóbal Colón	クリストバル・コロン
ポルトガル語	Cristóvão Colombo	クリストボ・コロombo
英語	Christopher Columbus	クリストファー・コロンブス
ドイツ語	Christoph Kolumbus	クリストフ・コロンブス



コロンブスの記念塔
(高さ約 60m)
スペイン・バルセロナ
人差し指は新大陸の方角に
向けられている。

¹¹⁶⁸ Deutschlandfunk Kultur v. 19. Juli 2021, Warum Kolumbus vom Sockel geholt wurde.

¹¹⁶⁹ See euronews of 12 November 2018, Los Angeles topples its Christopher Columbus statue.

¹¹⁷⁰ Tagesspiegel v. 13. Juni 2020, „Symbol einer brutalen Vergangenheit“: Wo überall Kolonialismus-Denkmäler gestürzt werden.

¹¹⁷¹ Deutsche Welle v. 12. Oktober 2017, Umstrittene Erinnerung: Der Kolumbus-Tag.

¹¹⁷² See euronews v. 13. Oktober 2020, 12. Oktober - Spaniens Nationalfeiertag, aber in Lateinamerika?

15. 第1次世界大戦勃発前のバルカン情勢

14世紀後半よりバルカン半島の大部分はオスマン帝国に占領されていたが(410頁以下参照)、1830年、ギリシアが独立を達成した。約50年後(1878年)、ルーマニア、セルビア、モンテネグロが後に続き(427頁参照)、ブルガリアは1909年、アルバニアは1913年に独立する。マケドニア地方の分割をめぐり、諸国は争うようになるが、ロシア、オーストリア、ドイツといった列強も半島の分割を狙っていた。そのため、半島は一発触発の状況にあり、「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれた。



◎ バルカン戦争 (1912～1913年)

1) 第1次バルカン戦争 (1912年10月～1913年2月)

衰退が顕著になったオスマン帝国では、西洋式の近代教育を受けた若いエリート層が帝国の再建を目指し、活動するようになった。「青年トルコ」または「青年トルコ人」(Young Turks)と呼ばれた彼らは秘密結社「統一と進歩委員会」を立ち上げ、反政府運動を展開した。1908年7月には武装蜂起し、政権奪取に成功する(青年トルコ革命)。

若き指導者の下でオスマン帝国が復活することを恐れたブルガリアとセルビアは、1912年3月、**バルカン同盟**(Balkan League/Balkanbund)を立ち上げた。後に、ギリシアとモンテネグロも加わり、4ヶ国体制に発展する。非加盟のアルバニアでオスマン帝国に対する反乱が起きたのを機に、同盟が帝国に対し宣戦布告すると、**第1次バルカン戦争**が勃発した。兵士の数で圧倒的に優勢な同盟は帝国を降し、バルカン半島やエーゲ海・地中海域の領土を奪取する。半島における帝国領は東トラキア(11頁参照)のみとなり、500年続いた半島支配は実質的に幕を下ろした。

1913年5月、ロンドンで講和条約が締結され、アルバニアの独立が承認された。また、セルビアはアドリア海に面する地域を放棄する代わりに、コンボを獲得した¹¹⁷³。

なお、青年トルコ革命による混乱に乗じ、それまでオスマン帝国の自治領であったクレタ島はギリシアへの編入を一方的に宣言したが、オスマン帝国の解体につながりかねないため、ヨーロッパの列強は承認しなかった。この島は、その後も、オスマン領とされる一方で、列強の統治下に置かれたが、1913年、第1次バルカン戦争の講和会議で、ギリシアへの編入が決まり、オスマン帝国は領有権を放棄した(427頁参照)。

2) 第2次バルカン戦争 (1913年6月～8月)

この戦争でオスマン帝国はマケドニアも失うことになり、戦後、マケドニアはブルガリア、セルビア、ギリシアの3国で分割されることになった。これは「マケドニア問題」と呼ばれ、新たな火種となる(425頁参照)。

マケドニアの分割をめぐり、ブルガリアは他の2国と対立し、**第2次バルカン戦争**を引き起こすが、ブルガリアの台頭を警戒するルーマニア、モンテネグロ、オスマン帝国がセルビア・ギリシアの側に立って参戦したため、孤立した。2ヶ月の短期決戦で敗北を喫したブルガリアは第1次戦争で得た領土を失い、独逸に接近するようになる。なお、戦勝国にも不満が残り、第1次世界大戦の火種を作った。

1913年8月、講和条約(ブカレスト条約)が制定され、マケドニアの分割が確定した。なお、この地域はアレクサンドロス大王の祖国マケドニアの領土より広い(92頁参照)。その北部はセルビア領となり、後に同国が中心となり建設されたユーゴスラビア社会主義連邦共和国の一部になるが、冷戦終結後の1991年、マケドニア共和国としてユーゴスラビアから独立した(544頁参照)。これに対し、マケドニアの南部はギリシア領になり、ブルガリアには同国に隣接する小さな地域(ピリン・マケドニアと呼ばれる地域)のみ与えられることになった。

¹¹⁷³ オソン1世は、1862年、軍部のクーデターによって失脚し、翌年、デンマーク王子が新国王として迎えられ、ゲオルギオス1世(169頁参照)として即位した。

16. 第1次世界大戦と戦後のヴェルサイユ体制

16.1. 開戦 (1914年7月)

前述したように、1878年、セルビア、モンテネグロ、ルーマニアはオスマン帝国から独立する。これに対し、ボスニア・ヘルツェゴビナは帝国領に留まるが、すでに北方のクロアチアを支配していたオーストリア（厳密には、オーストリア＝ハンガリー帝国、454頁参照）が統治権を獲得した。こうして、ボスニア・ヘルツェゴビナはハプスブルク家体制に組み込まれ、近代化されていくが、30年後（1908年）、オスマン帝国で**青年トルコ革命**（380頁参照）が発生すると、その波及を恐れたオーストリアはこの地域の併合を宣言した。諸国がこれに反発し、戦争が危ぶまれる状況に陥ったが（**ボスニア危機**）、オーストリアがオスマン帝国に補償金を支払うことで領土問題は解決した¹¹⁷⁴。翌年（1909年）には、ロシア、セルビア、モンテネグロも併合を承認している¹¹⁷⁵。

1912年から翌年にかけて、バルカン諸国はオスマン帝国と戦火を交え、勝利を収めたが、帝国から奪ったマケドニアの領有をめぐる対立し、1913年6月、新たな戦争を勃発させた（第2次バルカン戦争、380頁参照）。この戦争は8月には終わるが、和平は訪れなかった。

一連の戦争や危機で緊迫した状況が続く中、翌年（1914年）6月、ボスニアの首都サラエボを訪問中のオーストリア皇位承継者夫妻¹¹⁷⁶が街頭で殺害される事件が発生した（**サラエボ事件**）。オーストリアはこれをセルビアの陰謀と捉え、セルビアに対して宣戦を布告すると、「ヨーロッパの火薬庫」には火が付き、7月、第1次世界大戦が始まった。

開戦当初は独逸同盟¹¹⁷⁷とセルビアを支援した三国協商（イギリス、フランス、ロシア）の戦いに過ぎなかった。つまり、一部のヨーロッパ諸国の戦争に他ならなかったが、オスマン帝国とブルガリアが同盟側に、日本、ルーマニア、ギリシア等が協商側について参戦すると、かつてない規模の大戦に発展した。

※ 1914年7月に第1次世界大戦が勃発した当時の英独露の君主について、168頁を参照されたい。



Achille Beltrame 作

イタリア紙『La Domenica del Corriere』
1914年7月12日付

なお、上掲の画像とは異なり、大公は後部座席の左側に、大公妃は右側に座っていた¹¹⁷⁸。

¹¹⁷⁴ Josef Matuz, *Das Osmanische Reich, Grundlinien seiner Geschichte*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1985, p. 252.

¹¹⁷⁵ Ljubomir Zovko, *Studije iz pravne povijesti Bosne i Hercegovine 1878–1941*, University of Mostar 2007, p. 26.

¹¹⁷⁶ 当時のオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世（454頁参照）とエリザベート皇后（愛称シシー）の間に男子は一人しか生まれなかった。1889年、この男子は30歳で亡くなったため、1世の弟が皇位継承者となるが、1896年に彼が病死すると、その長男である**フランツ・フェルディナント**が皇位承継者に指定された。

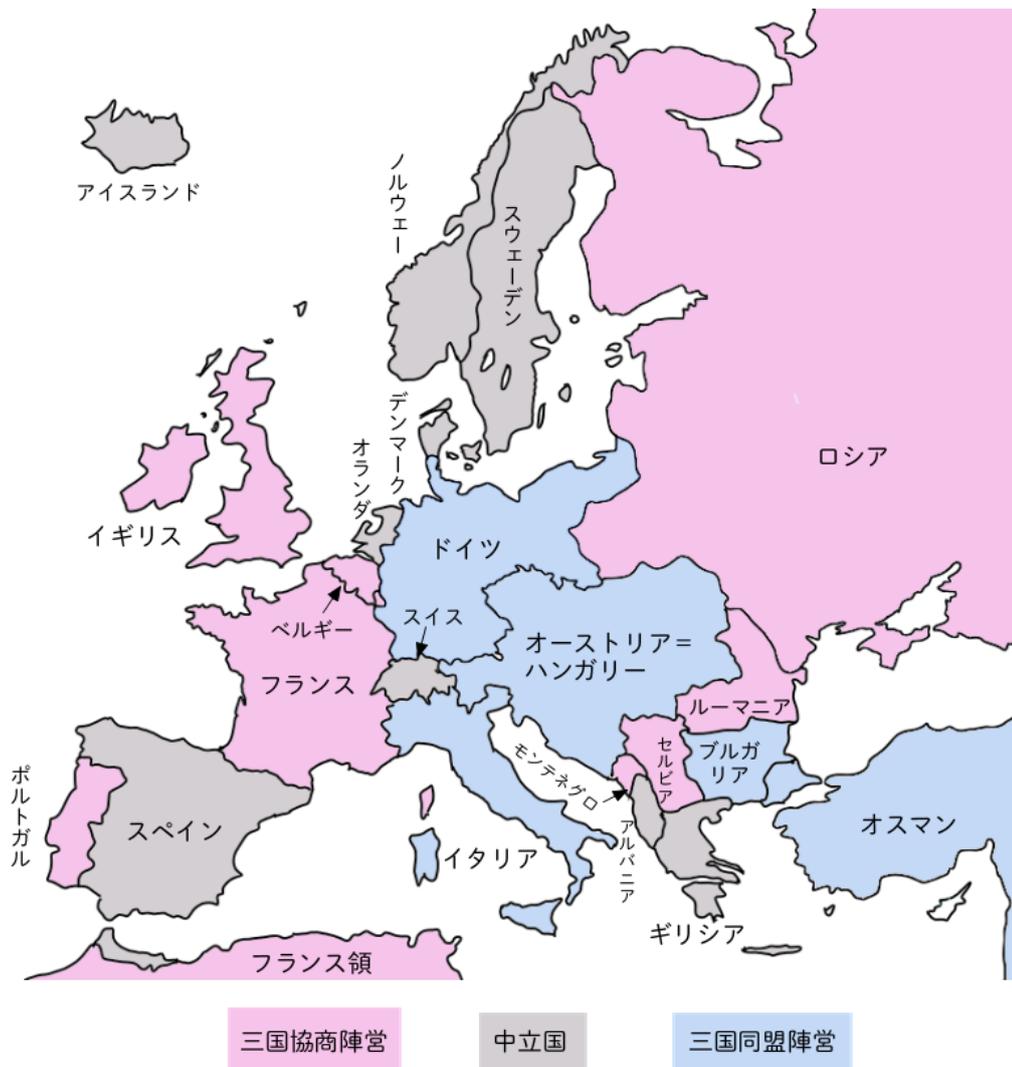
なお、フランツ・フェルディナントの暗殺を受け、彼の甥の**カール**が皇位承継者となる。1916年、彼は**カール1世**として即位するが、2年後、第1次世界大戦での敗戦を機に帝国は消滅し、彼は最後のオーストリア皇帝となった。

¹¹⁷⁷ ドイツ、オーストリア、イタリアが結成していた三国同盟では、同盟国が第3国と戦争を行うとき、他の同盟国は中立を守り、戦争に干渉しないことになっていた。そのため、イタリアはオーストリアが引き起こした戦争に加担しなかったが、「未回収のイタリア」（38頁参照）を奪還する好機とみると、1915年5月、敵側、つまり、三国協商側に回り参戦した。

¹¹⁷⁸ See Susanne Brandt, 28. Juni 1914: Beginn des Ersten Weltkrieges?, *APuZ* 45-46/2013, pp. 23-29, 25.

◎ 第1次世界大戦時のヨーロッパ諸国

三国協商陣営	中立国	三国同盟陣営
イギリス フランス ロシア セルビア モンテネグロ ルーマニア ポルトガル	オランダ スイス スペイン ルクセンブルク アルバニア ベルギー ギリシア ※ 上掲の2国は開戦後、三国協商側に回った。 ノルウェー スウェーデン デンマーク	ドイツ オーストリア=ハンガリー帝国 イタリア ※ イタリアは1915年5月、三国協商側に回り参戦した。38頁参照 オスマン帝国 ブルガリア



上掲の地図が示すように、第1次世界大戦期、ヨーロッパは現在のように細分化されていなかった。なお、この地図に記されていないが、オーストリア=ハンガリーの北にポーランド立憲王国が建てられており、ロシア皇帝が国王を兼ねていた(363頁の地図参照)。1863年1月、ポーランド人は独立を求め蜂起したが、鎮圧されると、弾圧はそれまで以上に厳しくなった(10頁参照)。

16.2. 米国の参戦 (1917年4月)

モンロー主義¹¹⁷⁹を掲げる米国は当初、ヨーロッパ諸国間の争いに干渉しなかった。しかし、1915年5月、多数の自国民が乗船していたルシタニア号がドイツの潜水艦攻撃を受けて沈没したことや、1917年2月、ドイツが無差別潜水艦攻撃を大西洋まで拡大したことを受け、同年4月、三国協商側に与し、参戦した。これはヨーロッパ外の列強がヨーロッパ情勢に大きな影響を及ぼす最初の事例になるが、大戦後、米国の影響力はさらに強まった (394頁以下参照)。

16.3. 終戦 (1918年11月)

① 帝政の崩壊

アメリカの参戦によって同盟国の敗戦は濃厚になる。1918年9月にブルガリア、10月にオスマン帝国が降伏したのに続き、11月、ドイツとオーストリア＝ハンガリー帝国が敗北を認め、戦争は終わった。また、以下のように、ヨーロッパの列強で帝政が崩壊した。

- ・ ロシアでは大戦中の1917年3月、貧困・物価高騰等を原因して革命が起き、帝政が倒された (518頁参照)。
- ・ 1918年10月、チェコ、スロバキアがオーストリア＝ハンガリー帝国から独立を宣言したのを皮切りに、翌月、ハンガリーが独立し、帝国は解体された。これを機に、オーストリアでは13世紀後半に始まったハプスブルク家体制が幕を下ろす。なお、12月には、クロアチアとスロベニアも独立し、セルビア人＝クロアチア人＝スロベニア人王国 (後のユーゴスラビア王国) を建設した (542頁参照)。
- ・ 1918年11月、ドイツでは皇帝が退位し、およそ半世紀前に成立したドイツ帝国は消滅する (437頁参照)。
- ・ オスマン帝国は1924年まで存続したが、敗戦を機に事実上、崩壊した (428頁参照)。

なお、戦勝国イギリスは大英帝国として存続したが、1931年、コモンウェルス、つまり、半ば独立した状態にある自治領 (ドミニオン) と緩やかに統合する「英連邦」に変わった (505頁参照)。

② 諸国の独立

ロシア帝国¹¹⁸⁰、オーストリア＝ハンガリー帝国、オスマン帝国の (実質的な) 解体に伴い、また、米国のウィルソン大統領が提唱した**民族自決の原則**¹¹⁸¹の下で、次に挙げる多くの国が成立した。

フィンランド、エストニア、ラトビア、リトアニア、ウクライナ、白ロシア、チェコスロバキア (513頁参照)、セルビア人＝クロアチア人＝スロベニア人王国 (後のユーゴスラビア王国、542頁参照)

また、1815年よりロシアに支配されていたポーランドは、1918年11月、主権を回復し、共和国になる。

中東欧におけるこれらの国の独立は敗戦国ドイツの覇権を弱めるとともに、社会主義革命が起きたロシア (後のソ連) に対する緩衝材または防衛線としての意義を持った。これに対し、戦勝国である英仏の支配下にあった地域や植民地の独立は認められず、民族主義は抑圧された。ただし、アイルランドは、1922年1月、アイルランド自由国として独立を果たしている (508頁参照)。

¹¹⁷⁹ 1823年12月、アメリカ合衆国第5代大統領のモンローは議会に送った教書の中で、①米国はヨーロッパ諸国の植民地の対象として考えられるべきではないことや、②自国はヨーロッパの政治に干渉しないという方針を示している。これを**モンロー主義**と呼ぶ。この考えに従い、アメリカは第1次世界大戦の開戦当初、中立を維持していた。

¹¹⁸⁰ 1917年11月、ロシアの革命指導者レーニンは「平和についての布告」を発表し、民族自決の原則と即時停戦を表明した。この理念に従い、フィンランドやバルト3国が独立している。

¹¹⁸¹ 民族自決の原則は米国大統領のウッドロー・ウィルソン (Woodrow Wilson) が1918年1月に提唱した「14ヶ条の平和原則」の中で示されている (その第10～13条が民族自決について定めている。385頁参照)。彼は翌年1～6月にパリで開催された講和会議でも主導的な役割を果たした。

◎ ポーランド共和国

第1次世界大戦の講和条約（ヴェルサイユ条約）でポーランドは独立が認められ、**ポーランド共和国**となった。なお、ウィーン決議に基づき成立したポーランド立憲王国は海に面さない内陸国であったが（363頁の地図参照）、共和国はドイツからバルト海に面する地域を得た。この一帯（幅は30～90km）は「**ポーランド回廊**」（ポメラニア）と呼ばれ、それをポーランドに割譲することで、ドイツは東西に分断されることになる。1939年、ヒトラーは「回廊」の自由通過を要求したが、却下されると、ポーランドに侵攻し、第2次世界大戦を引き起こした。



「回廊」に接するダンツィヒには大勢のドイツ人が住んでおり、ドイツは譲らなかったが、ポーランドも譲歩しなかったため、国際連盟が管理する自由都市になる。

なお、ポーランドとロシアの境界は後日、決定されることになった。これはソヴィエト政権（社会主義政権）が発足したロシア（518頁参照）は敵視され、講和会議に招待されなかったためであるが、1919年12月、戦勝国イギリスのジョージ・カーゾン外相によって国境案が示された。ポーランドは「**カーゾン線**」と呼ばれるこの境界を受け入れず、実力行使に出た。1920年4月、ロシアに攻撃をしかけ、ポーランド＝ソヴィエト戦争を起こすと、ロシアを降し、カーゾン線より200kmほど東に国境を設けることに成功する。1921年3月、リガ条約が締結され、白ロシア（ベラルーシ）とウクライナの西部はポーランド領となった。



1921年のヨーロッパ

16.3. ヴェルサイユ体制

1919年1月から翌年の8月にかけて、パリで第1次世界大戦の講和会議が開かれ、幾つか条約が制定された。特に、敗戦国ドイツとの間では1919年6月に**ヴェルサイユ条約**が、また、同じく敗戦国であるオーストリアとの間では同年9月に**サン＝ジェルマン条約**が締結されている。なお、サン＝ジェルマンとはパリ郊外にあるサン＝ジェルマン＝アン＝レー城（Château de Saint-Germain-en-Laye）を指しており、オーストリアとの条約調印は、この旧王宮で行われた。

ヴェルサイユ条約に基づき、ドイツは膨大な額の賠償金を30年に亘り支払う義務を負わされたが、戦争によって経済力は低下していた。そのため、1922年に賠償金の支払いが滞ると、翌年1月、フランスとベルギーは出兵し、ドイツ有数の工業地帯であるルール地方を占領する手段に出た（**ルール占領**）。両国はこの地方の石炭・鉄鋼業から賠償金を取り立てようとしたが、ドイツは官民が一体となって応酬し、生産活動を停止した¹¹⁸²。その結果、双方の対立は深まり、ルール占領は米国が提示した案に従い賠償問題が見直される1924年10月まで続いた。なお、この案は作成した委員会の議長にちなみ「**ドーズ案**」と呼ばれている。

その後、当事国の関係は改善し、1925年10月、ドイツ、フランス、ベルギーの相互不可侵を謳う**ロカルノ条約**が締結された。また、翌年、ドイツは国際連盟に加盟し、国際社会に復帰する。

1929年、この敗戦国の賠償責任は新しい案（作成した委員会議長にちなみ「**ヤング案**」と呼ばれる）に従い軽減されることになったが、同年、世界恐慌が発生し、支払能力は低下した。そのため、1931年、米国大統領のフーバーは戦争賠償金の支払いに1年の猶予を認めている。翌年、スイス・ローザンヌで開かれた国際会議で、旧敵国の賠償責任はさらに緩和されたが、1933年、ドイツ首相に就任したヒトラーは支払いを拒否し、債務を一方的に消滅させた。

第1次世界大戦後の国際秩序を**ヴェルサイユ体制**と呼ぶ（588頁参照）。戦勝国が設けたこの体制において、敗戦国ドイツは、前述したように、重い賠償責任を負った。英仏はこの賠償金を戦後復興に充てるとともに、植民地支配の維持を目指した。また、諸国はプロレタリア革命が実現したソ連を警戒し、 Kommunismusの拡大を防ぐため結束するようになった。

なお、ヴェルサイユ体制下において帝国主義時代の君主同盟は破棄された。また、ナポレオン戦争後のウィーン体制とは異なり、戦勝国（連合国）は**国際連盟**を設立し、集団安全保障体制の構築を試みた。しかし、提唱国であり、世界最大の影響力を持っていた米国が参加しなかったため、国連はその役割を果たせなかった。

◎ 国際連盟（League of Nations/Société des Nations）

かつてない大規模な戦争が勃発したことを受け、1920年1月、世界平和の確保と国際協調の促進を目的とする世界規模の組織がスイスのジュネーブに設けられた。日本語では「**国際連盟**」と呼ばれているが、公用語である英語と仏語による組織名に「国際」という語は入っていない（前掲参照）。直訳すると「国家リーグ」または「国家社会」になる。なお、世界規模の機関としては、すでに1889年、列国議会同盟（Inter-Parliamentary Union/L'Union Interparlementaire）が創設されていた。この組織は現在でも存在し、日本を含む加盟国の議員が会議に出席している。



国際連盟の規約はヴェルサイユ条約の中に盛り込まれており（第1条～第26条）、この講和条約を批准した約30ヶ国と約10の中立国が原加盟国（42ヶ国）となる¹¹⁸³。なお、提唱国であるアメリカは条約を締結したものの、批准しておらず、加盟していない。これに対し、敗戦国ドイツは加盟を許されなかった。革命によって帝政が崩壊したロシアは連合国に警戒され、講和会議に招かれていない。しかし、後に方針が改められ、それぞれ、1926年と1934年、加盟した（注1186参照）。

国際連盟は世界的な組織であったが、加盟国の大半はヨーロッパ諸国であったため、欧州の利益が優先される傾向にあった。設立を提唱したウィルソン米大統領の「**14ヶ条の原則**」でも、次のように、その大半はヨーロッパに関するものであった。なお、その第14条で国際機構の設立が謳われて

¹¹⁸² この対立期、ドイツではインフレ率が天文学的数字に達し、ドイツ経済は破綻する。1923年11月、政府の失策を批判するヒトラーはミュンヘンで一揆を起こし、政権転覆を狙ったが、失敗した。

¹¹⁸³ See bpb, Vor 100 Jahren: Gründung des Völkerbundes, <https://www.bpb.de/302479>

いる (1~5は省略)。

- ⑥ ロシアからの撤兵 (518頁の注1470参照) とロシアによる自国の政体の選択
- ⑦ ベルギーの主権回復 (477頁参照)
- ⑧ アルザス・ロレーヌのフランスへの返還 (594頁参照)
- ⑨ イタリアの国境の再調整 (38頁参照)
- ⑩ オーストリア=ハンガリー帝国 (454頁参照) 内の民族自治の保障
- ⑪ バルカン諸国の独立の保障 (542頁参照)
- ⑫ オスマン帝国領における民族自治の保障
- ⑬ ポーランドの独立 (384頁参照)

国際連盟には常設の裁判所が設置されていたが、軍隊を持たず、平和を乱す国に対し軍事制裁を科すことはできなかった (ただし、経済制裁は可能であり、1935年11月、エチオピアに侵入したイタリアに制裁を發動している)。また、総会の決議には全会一致の賛成を必要としたため、迅速性や実効性に欠ける面があった。特に、ナチス・ドイツの再軍備 (1935年3月)¹¹⁸⁴、イタリアのエチオピア侵入 (1935年10月)、ソ連のフィンランド侵攻 (1939年11月) 等を阻止することができなかった。ドイツとイタリアは、それぞれ1933年と1937年に脱退し、ソ連は1939年、除名処分を受けた。

もっとも、ザールラントの委任統治 (591頁参照)、ダンツィヒの管理 (384頁参照)、メーメル
の帰属決定等、ヨーロッパにおける平和維持に貢献している。

第2次世界大戦後の1945年10月、**国際連合** (United Nations, UN) が発足すると、国際連盟は使命を終え、1946年4月、解散した。

17. 戦間期

17.1. ソ連の発足

第1次世界大戦中の1917年3月、ロシアで革命が起き、帝政は崩壊した (518頁参照)。首都ペトログラードにはブルジョワジー主導の臨時政府が発足するが、同年11月、レーニンによって倒された。彼は世界初の社会主義革命を実現し、ソヴィエト政権を樹立した。また、翌年7月、**ロシア=ソヴィエト連邦社会主義共和国 (ロシア共和国)** を発足させた。なお、ソヴィエト (Совет/Совет) とは労働者が参加する「評議会」の意である。

ソヴィエト政権ないし社会主義 (共産主義) を基盤とする共和国はロシア以外にも旧ロシア帝国内の各地で発足した。それに反発する運動が各地で起きると、社会主義の拡大を恐れた連合国によって支持され、ロシアは一種の内戦状態に陥る。諸国が介入した結果、第1次世界大戦末期の1918年3月には**対ソ干渉戦争**に発展するが、ソヴィエト政権が赤軍を組織して対抗したため、諸国は撤退した (518頁の注1470参照)。

戦闘が収まった1922年12月、4つの共和国 (ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ザカフカース¹¹⁸⁵) は**ソヴィエト社会主義共和国連邦 (ソ連)** を結成し、世界初の社会主義国家を立ち上げた。

なお、社会主義の拡大を警戒した諸国はソ連を直ちに承認しなかった。また、1919年1月、パリで始まった第1次世界大戦の講和会議にロシアないしソヴィエト政権を招待していない。しかし、(一国社会主義を掲げる) ソ連が他国の社会主義化に加担しないことが明らかになると、警戒は弱まり、1924年、英仏はソ連を承認した。他国もこれに続いたが、アメリカの承認は1933年まで遅れ、その翌年、ソ連は (ヒトラー政権下のドイツと入れ替わるように¹¹⁸⁶) 国連加盟を果たした。

¹¹⁸⁴ なお、ドイツはすでに1933年10月に脱退していた (注1186参照)。

¹¹⁸⁵ 「**ザカフカース**」とはロシア語で「カフカス地方の向こう側」という意で、ジョージア、アルメニア、アゼルバイジャンが建てられている地域を指す。1917年3月のロシア革命後、これらの3国はロシア帝国から独立し、ザカフカース連邦を設立した。その後、民族対立によって分裂するが、1922年12月、ザカフカース社会主義連邦ソヴィエト共和国を立ち上げ、ソ連に加盟する。1936年、3国に分離し、共和国は消滅した。

¹¹⁸⁶ 1933年1月、ドイツ首相に就任したヒトラーはヴェルサイユ条約によって科されていた軍備制限の見直しを国際連盟に要請したが、却下されると、10月、国連から脱退した。

17.2. ファシストの台頭

1920年代、ヨーロッパの諸都市ではスウィング・ジャズに代表されるアメリカ文化が流行し、活気を取り戻した。米国で「狂騒の20年代」と呼ばれた社会現象はヨーロッパにも伝わったが、その陰ではヴェルサイユ体制に対する不満が増幅していた。また、社会主義ないし共産主義に対する警戒が強まり、ファシストが台頭した。

※ 社会主義と共産主義の違いについて、162頁を参照されたい。

1) イタリア

独裁者の中でも反共産主義を掲げる人物をファシスト (facist) と呼ぶ。1920年、北イタリアで労働者や農民が蜂起し、共産主義革命に似た状況を作り出すと、それに対抗する武装集団、つまり、ファシストの団体が生まれた。この組織が展開した反共産主義運動は実業家、地主、将校等の支持を集めて政治活動に発展し、1921年には**国家ファシスト党**が結成される。翌年、政権転覆を企む党員が首都ローマに進軍すると、国王は事態を收拾するため、党首のベニート・ムッソリーニに組閣を命じた。こうして1922年10月、ムッソリーニを首相とするファシスト政権が誕生する (これはヒトラーがドイツで独裁を開始するより10年も早い)。彼は共産主義だけではなく、議会制民主主義をも攻撃し、独裁を敷いたが、イタリアの敗戦が決定的になった1943年7月、ファシスト党内でクーデターが起き、失脚した。ムッソリーニは新政権によって幽閉されたが、2ヶ月後、ドイツ軍に救出され、イタリア社会共和国 (サロ共和国) の国家統領になる。しかし、1945年4月、イタリアの非正規軍 (パルチザン) に捕らえられ、処刑された (392頁参照)。

2) ドイツ

重い賠償債務を課されたドイツでは、ヴェルサイユ体制に対する不満が渦巻いていた (注1182参照)。1929年に発生した大恐慌によって社会・経済が混乱すると、国民の不満はますます大きくなる。このような状況下、**アドルフ・ヒトラー**はドイツ人の不幸はヴェルサイユ体制、共産主義、ユダヤ人に責任があると主張し、人気を獲得していった。1932年7月の総選挙で党首を務めるナチ党 (国家社会主義労働者党 NSDAP) が第1党に躍り出ると、翌年1月、首相に任命された。もっとも、国会で議席の過半数を獲得するには至らず、政権運営は不安定であった。そのため、翌月、ヒトラーは議事を解散させるが、選挙期間中、国会議事堂が放火され、全焼したことを口実に非常事態宣言を出し、野党の活動を取り締まった。特に、国内第3党の共産党は、党員が放火したという理由で徹底的な弾圧を受けた。3月、第2党の社会民主党 (SPD) の活動も封じ込められ、立法権を内閣に委ねる全権委任法が成立すると、議会制民主主義は実質的に廃止されることになる。1934年8月、ヒンデンブルク大統領の死去に伴い、ヒトラーは大統領を兼任する**総統**¹¹⁸⁷となり、全権を掌握した。このようにしてヴァイマル体制を葬った独裁者は言論・出版を制限する一方で、軍需産業や高速道路 (Autobahn) 建設を奨励し、国民の支持を固めていった。

ヒトラーが標榜する**ナチズム**はイタリアに起源を置く**ファシズム**には無い純血主義を採用しており、ユダヤ人を虐殺した (ユダヤ人の定義について、294頁参照)。ドイツ国籍を持つ白人であっても、ユダヤ人は純潔な白色人種ではないとみなされ、迫害 (**ホロコースト**、290頁参照) の対象となる。ユダヤ人に強制労働を課し、最終的に殺害するため、ドイツ国内や占領地域には収容所が建設された。その中でも、第2次世界大戦勃発後の1940年、アウシュビッツ (現ポーランド・オシフィエンチム) に建てられた絶滅収容所はホロコーストを象徴する施設となる。ドイツや周辺国から大量のユダヤ人が送られ、戦争終結までに130万人 (ヨーロッパ全体では600万人) が殺害されたと考えられている。なお、ユダヤ人だけではなく、ロマ (ジプシー)、障害者、同性愛者も迫害を受けた。

ヒトラーは第2次世界大戦末期の1945年4月、ソ連軍に首都ベルリンを包囲され自害するまで独裁を敷く。翌月初旬、ドイツが降参すると、ヨーロッパにおける第2次世界大戦は終わった。

◎ ナチズム、ファシズム、全体主義

ヒトラーが標榜した「**ナチズム**」は「**ナチオナル・ソシアリズム**」(Nationalsozialismus) の略で、「民族社会主義」ないし「国家社会主義」と訳される。政策的には極右であり、左派のマルクス主義を敵視した。また、ドイツ民族主義、ユダヤ人の血が交わらない白色人種 (アーリア人) の優越、ユダヤ

¹¹⁸⁷ 「総統」とは大統領と首相の両方の職を同時に務めたヒトラーの役職を指す。原語であるドイツ語の“Führer”には「指導者」というニュアンスがあるが、現在のドイツで、ヒトラーは「総統」ないし「指導者」としてではなく、「独裁者」とみなされている。

人の排斥、移民流入の阻止、植民地の拡大を訴えた。この政治原理に「社会主義」という語が含まれているのは、個人の利益よりも社会全体の利益を重視したこと、資産家ではなく労働者の利益を擁護したこと、また、国民の支持を得るため、福祉政策を拡充したことによる。生産手段を国有化しなかった点で、ソ連が推進した共産主義とは異なるが、それに同じく、民主主義を否定する要素を持っていた。なお、ヒトラーは共産主義を敵対視しており、それを根絶するため、1941年6月、ソ連との密約を破棄し、侵攻した¹¹⁸⁸。

ナチズムは、このように捉えることができるのに対し、ファシズムの定義は容易ではない。また、両者を全体主義として捉えることは必ずしも適切ではなく¹¹⁸⁹、共通しているのは極右で、民主主義を否定した点や、共産主義を敵視していた点に限られる。特に、反ユダヤ主義を採るかどうかで、ナチズムとファシズムは大きく異なる。ムッソリーニは公的には反ユダヤ思想を批判しており¹¹⁹⁰、ドイツから逃れてきたユダヤ人を受け入れている。しかし、ヒトラーとの提携が強まった1938年以降はユダヤ人を非ヨーロッパ人ないし非イタリア人と捉え、迫害するようになった¹¹⁹¹。

3) スペイン

1930年代、ファシストや独裁者はその他のヨーロッパ諸国でも現れ、スペインでは、1936年10月、ムッソリーニやヒトラーの支援を受けたフランコが独裁を開始した(488頁参照)。このように、スペインのファシスト独裁はイタリアやドイツよりも遅れて始まったが、第2次世界大戦に参加しなかったこともあり、フランコが1975年11月に死去するまで続いた。その結果、民主化はドイツやイタリアよりも20年、遅くなる。

戦間期、資本家や労働者は議会制民主主義を支持し、ファシズムに対抗した。イタリアやドイツでは押さえつけられたのに対し、スペインでは、1936年1月、左派政党が結束して**人民戦線**を立ち上げ、翌月の総選挙で勝利を収めると、ファシストが入閣していた政権を倒し、人民戦線政府を立ち上げた。なお、社会労働党や共産党は入閣せず、外部から協力した。

国政はその後も安定せず、1937年7月、フランコが巻き返して蜂起すると、内戦が勃発する(488頁参照)。人民戦線はソ連や国際義勇軍の援助を受けて対抗したが、ソ連国内で共産主義者が対立したように、スペインの共産主義者も内紛により分裂した。こうして左派が弱体化する中、ヒトラーやムッソリーニの支援を受けたフランコが内戦を制し、軍事独裁をスタートさせた。

17.3. ヒトラーによるヴェルサイユ体制の破壊と英仏の宥和政策

前述したように、第1次世界大戦で敗れたドイツは国際連盟の原加盟国になることは許されなかった。しかし、戦争賠償問題が解決し(385頁参照)、英仏との関係が改善すると、1926年9月、国連加盟を果たし、国際社会に復帰した。こうしてヨーロッパは友好的なムードに包まれていくが、この状況は長続きしなかった。ヒトラーによってヴェルサイユ体制は崩され、欧州は再び世界大戦の舞台になる。

1933年1月、合法的な方法で独首相に就任したヒトラーはヴェルサイユ条約によって制限されていた国防を回復するため、国際連盟に条約の見直しを求めたが、却下された。そのため、同年10月、国連を脱退し、1935年3月には徴兵制を復活させた。英仏伊は結束して非難したが、英国が仏伊両国に相談することなく、英独海軍協定を結ぶと、ヒトラーによる軍備拡張は事実上、容認されることになる。これを喜んだ独裁者は、1936年3月、ロカルノ条約で非武装地帯に指定されていたライン川流域(60頁参照)に国防軍を派遣し、フランスやベルギーを脅かす(**ラインラント進駐**)。ヒトラーは反撃を恐れたが、両国は対抗措置を講じず、事実上、黙認した。これは独裁者を勢い付けさせることになり、1938年3月、ナチス・ドイツはヴェルサイユ条約を無視してオーストリアを併合する。なお、ヒトラーはオーストリア出身で

¹¹⁸⁸ Michael Grüttner, Brandstifter und Biedermänner, Deutschland 1933–1939, Klett-Cotta 2015, p. 298.

¹¹⁸⁹ Wolfgang Wippermann and Michael Burleigh, The racial state. Germany 1933–1945, Cambridge University Press 1991, pp. 304–307.

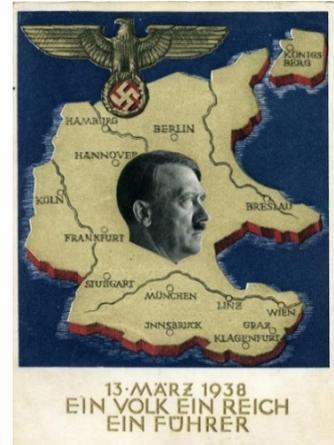
¹¹⁹⁰ Hugo Valentin, Antisemitenspiegel, Der Antisemitismus, Geschichte, Kritik, Soziologie, H. Glanz 1937, p. 72.

¹¹⁹¹ Ulrich Wyrwa, Italien, in Wolfgang Benz ed., Handbuch des Antisemitismus, vol. 1, Länder und Regionen, De Gruyter Saur 2010, p. 171.

あった。また、1918年11月、第1次世界大戦で敗れたオーストリアはドイツとの合併を計画したが、戦勝国によって阻止されたという経緯がある(455頁参照)。20年後、ヒトラーが強行した併合によりヴェルサイユ体制は崩壊するが、それでもなお英仏は独に寛容な態度をとり続けた。その背後には共産主義を敵視するドイツをソ連に対する防御壁として利用する大国の思惑が潜んでおり、自由主義国はファシズムと Kommunismus の両方に対処する必要性に迫られていた。

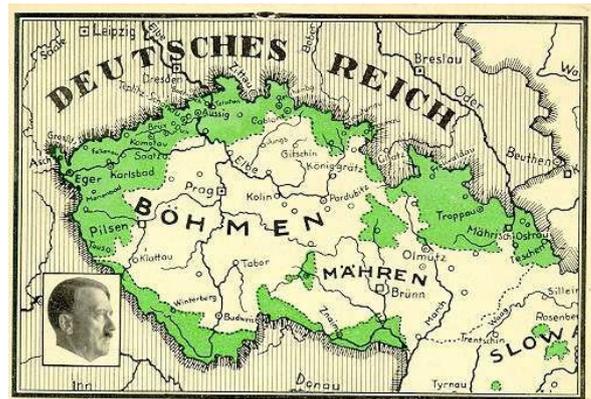
なお、ドイツ語の Anschluss (アンシュルス) は「接続」や「加入」という意の単語であるが、オーストリアの「併合」を指すことも多い。1933年以降、ナチスは「一つの国民、一つの国、一人の指導者」(Ein Volk, Ein Reich, Ein Führer) という標語を多用した。1938年の併合後、この理念は強化され、ドイツ人とオーストリア人は共通の歴史を持つ「自然一体的な民族」(ein natürliches Volk) とみなされるようになった(右の画像参照)。

英仏の宥和政策で図に乗ったヒトラーは、ますます過激な行動に出る。第1次世界大戦後の講和条約によって、ズデーテンラント(ズデーテン地方、右下図¹¹⁹²の緑色の部分がこの地域である)¹¹⁹³はチェコスロバキア領に変わったが、その後も、約300万のドイツ人が住んでいた。この地方を奪回するため、ドイツ軍がチェコスロバキアとの国境付近まで進むと、英仏は「これ以上、何も要求しない」というヒトラーの言葉を信じ、ズデーテンラントの併合を認めた(1938年9月のミュンヘン会談)。しかし、ヒトラーは約束を守らず、翌年、チェコの全域を占領した。また、スロバキアを保護国としたが、これによって第1次世界大戦後、オーストリア=ハンガリー帝国から独立したチェコスロバキアは消滅する(513頁参照)。



オーストリア併合の告知用
絵葉書¹¹⁹⁴

その後、ヒトラーはヴェルサイユ条約によって失ったダンツィヒの返還とポーランド回廊(384頁参照)の自由通行を要求するようになった。ソ連はヒトラーの強硬路線を警戒し、英仏と同盟結成を試みるが、失敗すると、ドイツに歩み寄り、1939年8月23日、独ソ不可侵条約を結んだ。両国は秘密裏にポーランドの分割でも合意した。こうして、ソ連と協力関係を築き、その脅威から解放されたドイツが、9月1日、ポーランドに侵攻すると、2度目の世界大戦が勃発する。



9月3日、英仏はそれまでの寛容的な態度を改め、ドイツに宣戦を布告したが、戦闘を開始することはなかった。また、ポーランドと相互援助条約を締結していたにも拘わらず、独軍の攻撃を受けたポーランドを支援することもなかった。これはヒトラーとの全面戦争を避けるためであり、英仏は宣戦布告したものの、戦わなかったため、「座り込み戦争」(Sitzkrieg) または「いかさま戦争」(Phoney War) と呼ばれた。

ドイツも1939年9月にポーランドに侵攻した後は戦闘を中断していたが、翌年4月、中立国のデンマークとノルウェーに侵攻すると、イギリスはようやく軍隊を派遣するに至った。しかし、独軍による北欧の占領を阻止することはできず、その責任を取って、5月、英国のネヴィル=チェンバレン首相は辞任した。なお、デンマークとノルウェーは1945年5月の終戦までドイツに占領されることになる。

1940年5月、ドイツがベネルクス3国とフランスに攻め入ると、西ヨーロッパでも戦闘が本格化した。

¹¹⁹² 出展: Schoolshistory.org.uk, Sudetenland, <https://schoolshistory.org.uk/topics/world-history/interwar-period-c1918-1945/sudetenland>

¹¹⁹³ ドイツ・オーストリアとボヘミアの境に位置するズデーテン地方には13世紀頃よりドイツ人が入植するようになった。1938年9月のミュンヘン会談後、ヒトラーはこの地方をドイツに併合したが、第2次世界大戦でドイツが敗れると、チェコスロバキアに復帰した。それに伴い、この地方に住んでいた約250万のドイツ人は土地を没収され、追放されることになり、大半はドイツ・バイエルン州に移った。なお、1993年1月、チェコスロバキアが分裂すると、ズデーテン地方はチェコ領になる。追放されたドイツ人は現在でも私財の返還をチェコに求め続けている。

¹¹⁹⁴ 画像出典 <https://www.dhm.de/lemo/kapitel/ns-regime/aussenpolitik.html>

18. 第2次世界大戦

18.1. 開戦 (1939年9月)

1939年9月、ドイツは隣国ポーランドに西側から侵攻する一方、ソ連は東から侵入し、ポーランドを分け合った。その後、ドイツは翌年4月まで戦闘を停止したのに対し、ソ連は、11月、フィンランドに兵を進めた。国連はこの侵略行為を非難し、翌月、ソ連を除名するが、スターリン (518頁参照) はひるまず戦闘を続けた。1940年3月、フィンランドは降伏し、カレリア地方をソ連に割譲することになるが、独立を保つことができた。他方、同年8月、ソ連に占領されたバルト3国 (エストニア、ラトビア、リトアニア) はソ連への加盟を強制され、独立国としての地位を失った。

◎ 第2次世界大戦時のヨーロッパ諸国

連合国とその同盟国	中立国	枢軸国とその同盟国
イギリス フランス ソ連 ※ 開戦当初、英仏はソ連と同盟関係になかった。 ポーランド ギリシア チェコ ユーゴスラビア ※ これらの4国とフランスはドイツに占領された。	スペイン ポルトガル スイス スウェーデン エストニア ラトビア リトアニア アイルランド モナコ リヒテンシュタイン サンマリノ アンドラ デンマーク ノルウェー オランダ ベルギー ルクセンブルク ※ これらの5ヶ国は中立を宣言していたが、ドイツに占領された。	ドイツ (オーストリアを併合) イタリア ※ イタリアは1943年10月、連合国側に回った。 ハンガリー スロバキア クロアチア ルーマニア ブルガリア フィンランド

1) 連合国の一員としてのソ連と対立構造 (民主主義 vs 独裁・ファシズム)

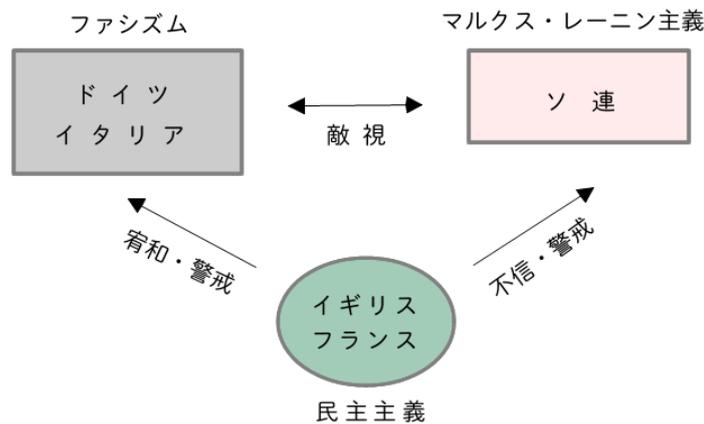
第1次世界大戦期、英仏露は三国協商を結成したが、ロシア帝国が崩壊し、ソ連が発足すると、英仏はこの社会主義国と対立し、距離を置くようになる。第2次世界大戦の開戦当初も、3国は同盟関係にあったわけではない。むしろ、ソ連はドイツと結託し、ポーランドを分割した。

しかし、かねてより共産主義を敵視していたヒトラーがスターリンとの密約を一方的に破棄し、攻撃をしかけると (次頁参照)、状況は一変した。共通の敵を持つようになった英ソは歩み寄り、翌月 (1941年7月)、軍事同盟を結成するに至った。なお、仏露間ではすでに相互援助条約が結ばれていたが、その当時、フランスはすでにドイツに占領されており、ロンドンに亡命政府が建てられていた。

英ソ軍事同盟が結成された時点で、米国はまだ参戦していなかったが¹¹⁹⁵、英ソ両国に武器を貸与した。また、同年(1941年)8月には大西洋上で米英首脳会談(ローズヴェルト=チャーチル会談)が開かれた。その後、戦争方針や戦後の体制について謳った『大西洋憲章』が出されると、ソ連は直ちに支持を表明し、ドイツ包囲網が確立されていった。

他方、ファシスト政権下のドイツとイタリアは、1936年11月、軍事同盟を結成していた¹¹⁹⁶。

このような対立構造を踏まえ、第2次世界大戦は「民主主義 vs 独裁・ファシズム」の戦いであったと指摘されることがあるが¹¹⁹⁷、スターリンが最高指導者を務め、共産党による一党独裁が敷かれていたソ連が民主主義国家であったかは検討を要する。むしろ、ソ連というマルクス・レーニン主義の全体国家(独裁)とドイツ・イタリアといったファシズム国家(独裁)が敵対する一方で、英仏を始めとする民主主義国は両方の独裁国家と対峙する状況にあった¹¹⁹⁸。



2) 戦争の経過

1939年9月、ポーランドに攻め入った後、ドイツは戦闘を停止していたが、翌年4月、北欧に兵を進め、デンマークの全ての港とノルウェーの港の一部を占領した。また、翌月、ベルギーとオランダに電撃戦をしかけ、攻略した。さらに、英仏軍をダンケルクに追いつめるが、イギリスは漁船も投入し、40万の兵士を生還させた¹¹⁹⁹。

6月下旬、フランスはパリを含む領土の5分の3がドイツ軍に占領され、降伏した。政府はイギリスに亡命し、フランス国内には親独のビシー政権が発足する(465頁参照)。

勢いに乗ったドイツは、8月から9月にかけて、イギリス本土へ大規模な爆撃をしかけたが、チャーチル政権下のイギリスが徹底抗戦で臨んだため、攻略できなかった。その後、ヒトラーは方向転換し、東部戦線に力を入れた。

11月、イタリアがギリシア侵攻に失敗すると、ドイツはハンガリー、ルーマニア、ブルガリアを自らの陣営に引き入れ、翌年(1941年)4月、バルカン半島に進出した。そして、ユーゴスラビアとギリシアを制圧すると、6月、独ソ不可侵条約を一時的に破棄し、各地から一斉に攻め入った。かねてよりソ連の壊滅を狙っていたヒトラーは、1941年夏、マルクス・レーニン主義の根絶を戦争の大義名分として掲げるようになる。

1942年7月、独軍はクリミア半島全域の占領に成功した。その勢いは止まらず、モスクワ攻略も視野に入ったが、11月以降はソ連軍の反撃と「冬将軍」にあい、撤退を余儀なくされた。1943年2月、スターリングラード(現ヴォルゴグラード)の戦いで敗れたドイツは劣勢になり、同年後半には攻守が逆転した。

¹¹⁹⁵ 米国が参戦したのは我が国による真珠湾攻撃の翌日、つまり、1941年12月8日である。

¹¹⁹⁶ なお、戦時中の1940年9月、日独伊は3国同盟を立ち上げている。

¹¹⁹⁷ フレデリック・ドルーシュ(総合編集)、木村尚三郎(監修)、花上克己(訳)『ヨーロッパの歴史』(東京書籍1994年)339頁参照。

¹¹⁹⁸ フレデリック・ドルーシュ編『ヨーロッパの歴史』(東京書籍1994年)341頁。

¹¹⁹⁹ 1940年5月19日、ドイツ軍はフランス北部の海岸を占領し、イギリス軍とフランス軍を海を背に包囲すると、イギリスは漁船、内航船、石炭船、ヨット等を含む、あらゆる種類の船を集め、ダンケルクから約40万人を奇跡的に撤退させた。これを**ダンケルクの戦い**または**ダンケルク撤退作戦**と呼ぶ。

1942年11月、英米の連合軍が北アフリカ上陸作戦を開始すると、ドイツ・イタリア軍はずるずると撤退し、翌年5月、北アフリカの戦いでも敗れた。7月、アフリカ北岸からシチリア島への上陸を果たした連合軍は、そこを足場にして、イタリア本土への侵攻を目指すようになる。敗戦色が濃くなったイタリアでは内乱が起き、同月（1943年7月）下旬、ムッソリーニは幽閉された¹²⁰⁰。代って発足したバドリオ政権は戦争の継続を表明したが、9月、連合軍が半島南部に上陸すると、直ちに降伏し、休戦協定を結んだ。これを受け、ドイツはイタリア半島に進軍し、ほぼ全域を支配下に収める。また、ムッソリーニを救出すると、半島北部にイタリア社会共和国（サロ共和国）と呼ばれる傀儡国家を建て、彼を統領に就けた。なお、翌月（1943年10月）、バドリオ政権はドイツに対して宣戦布告し、英米の側について戦うが、両国は後述するノルマンディー上陸作戦に備え、イタリアでの活動を弱めるようになった。

イタリアの三国同盟離脱後も、ドイツは東部戦線ではソ連と、西部戦線では米英連合軍と戦ったが、戦争の長期化で国力を消耗し、両方向から追い込まれていく。

1944年6月、連合軍はノルマンディーに上陸すると（223頁参照）、フランス内部へと進み、同年8月にはパリの解放に成功した。

同時期、ソ連軍は東欧諸国をナチズムから解き放ちながらドイツ領に攻め入った。1945年1月には、アウシュビッツ強制収容所を解放し、生き残っていた数千人のユダヤ人を救出する（292頁参照）。なお、ソ連はこの施設が建てられていたポーランド西部をナチズムから救う一方、ヒトラーと密約を交わし、この国の東部を占領していた（次頁参照）。赤軍が大きな犠牲を払いながらさらに西へ進み、4月25日、ベルリンを包囲すると、30日、ヒトラーは自害した。翌月8日、ドイツが降伏し、ヨーロッパは終戦を迎えたが、それは新しい戦争の始まりであった（冷戦について、396頁以下参照）。

18.2. 終戦（1945年5月）と戦後処理

ヨーロッパ諸国は日本よりも3ヶ月ほど早く終戦日を迎えた。その3ヶ月前（1945年2月）、米英ソの3国はクリミア半島のヤルタで首脳会談を開き、戦後処理問題について協議している（98頁参照）。7月、ベルリンに隣接する古都ポツダムで会合が再開され、終了後、「ポツダム協定」（8月2日）が発表された。この文書では戦犯国ドイツに対する対応が謳われているが¹²⁰¹、同国は経済的に一体とし、分割されないという点は、資本主義と共産主義の対立を背景に守られなかった。それどころか、イデオロギーの違いはドイツだけではなく、ヨーロッパを東西に分断させることになる（399頁参照）。協定の主な内容は以下の通りである。

- ・ドイツの民主化を図るため、同国は米英仏ソによって分割占領されるが（439頁参照）、4国による統治はできる限り統一する。首都ベルリンも4国によって分割占領される。なお、ドイツは経済的には分割されず、一つの経済地域とする。
- ・4国はその占領地域から戦争賠償を得る。
- ・ナチスの戦争犯罪は裁かれる（293頁参照）。また、戦後、この政党の構成員が公職に就くことを禁止する。
- ・独軍は解体され、再軍備や軍事産業は禁止される。
- ・ドイツの国境は後に締結される対独講和条約で定める。
- ・ポーランド、チェコスロバキア（389頁の注1193参照）、ハンガリーに住むドイツ人は追放される。

1946年7月、パリで講和会議が始まり、翌年2月、パリ条約が制定された。ヨーロッパ講和条約とも呼ばれるこの条約ではドイツ、オーストリアを除く敗戦国（イタリア、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、フィンランド）の国境、賠償責任、軍事制限、捕虜の扱い等が定められた。なお、ドイツに関する講和条約は戦勝国の見解がまとまらなかったため、制定されていない。オーストリアとの条約も難航したが、スターリン死亡後の1955年5月、ウィーンでオーストリア国家条約が締結され、同国の主権回復、永世中立、ドイツとの合併禁止等が定められた。

¹²⁰⁰ ムッソリーニは、1945年4月下旬、パルチザン（非正規軍）によって処刑された。

¹²⁰¹ なお、「ポツダム協定」と我が国に対して出された「ポツダム宣言」（7月26日）は異なる。

※ ポーランド人民共和国の発足 (旧称ポーランド共和国 1947年2月)

1939年9月1日、ドイツはポーランドに侵攻すると、短期間の内にポーランド西部を占拠し、同月27日には首都ワルシャワを攻略した。17日にはソ連もポーランド侵攻を開始しており、この国の東部を支配下に置いた。独ソに加え、リトアニアとスロバキアも領土を獲得した結果、1918年11月に建設されたポーランド共和国(384頁参照)は消滅する。なお、これは諸国による4度目のポーランド分割であり¹²⁰²、シコルスキ大将はロンドンに逃れ、亡命政府を建てた。

1941年6月、かねてから共産主義を敵視していたヒトラーがポーランド東部のソ連占領地域に侵攻し(バルバロッサ作戦)、独ソ戦が始まった。当初、優勢を誇った独軍はポーランド全域を占拠したが、1943年2月、スターリングラード(現ヴォルゴグラード)の戦いで敗れると、攻守が逆転する。1945年1月、ポーランド西部をドイツから解放したソ連は戦後もポーランドに駐留し続け、共産党勢力を支援した。

これに対し、米英はロンドンに建てられていた亡命政府を支持し、ソ連と対立した。両陣営はポーランドの領土についても激しく争い、ヤルタ会談(98頁参照)で話はまとまらなかった。最終的に、ソ連との国境は「カーゾン線」に戻すこと(384頁参照)、他方、ドイツとの国境は「オーデル＝ナイセ線」¹²⁰³にすることで決着する。その結果、ソ連の領土は拡大し(他方、ドイツは旧東プロイセン領を完全に失い、縮小した)、ポーランド領は西側に200km近く移動することになった。

1945年6月、亡命政府のミコワイチク首相が帰国し¹²⁰⁴、共産党系の国民解放委員会(1944年、亡命せずにポーランドに残った者が東部のルブリンで発足させた臨時政府)と共に挙国一致臨時政府を樹立した。ソ連が帰国した亡命政治家を逮捕し、内政に干渉すると、ソ連寄りのビェルト(国家評議会議長)やゴムウカ(労働党書記長)が主導権を握ることになる。なお、ゴムウカはソ連との安全保障体制の構築を重視する一方で、共産主義政党による一党独裁を否定し、西側とも友好関係を維持する「人民民主主義」を提唱したため、スターリンと対立し、1948年、失脚したが、1952年、復権した(400頁参照)。

1947年2月、ソ連の傀儡国家である「**ポーランド共和国**」が発足した。また、翌年、左派政党が統合してポーランド統一労働者党(PZPR)が成立し、一党独裁に移行する。1952年7月、共産主義憲法が制定され、国号は「**ポーランド人民共和国**」に変わったが、東欧の民主化が進んだ1989年12月、かつての「**ポーランド共和国**」に戻り、現在に至る(403頁の注1222参照)。

19. 冷戦

※ 396頁以下を参照されたい。

20. EU 統合

※ 606頁以下を参照されたい。

¹²⁰² **第1次ポーランド分割**は、1772年、プロイセン(フリードリヒ2世)、オーストリア(ヨーゼフ2世)、ロシア(エカチェリーナ2世)によって行われ、これらの3国は自国に接する地域を得た。特に、プロイセンは北海に面する地域を獲得した結果、東プロイセンは飛び地ではなくなる(26頁の地図参照)。1773年、領土を蚕食されたポーランド・リトアニア共和国は分割を承認した。

第2次分割は、ポーランド・リトアニア共和国が1792年に勃発したポーランド・ロシア戦争で敗れた結果、その講和条約に基づき、1793年に実施され、共和国はロシアとプロイセンに領土を奪われた。

第3次分割は、1795年、プロイセン、オーストリア、ロシアの間で行われ、ポーランド・リトアニア共和国は全ての領土を失った。これにより共和国は地図上から消失するが、1807年、ナポレオンは**ワルシャワ大公国**を興し、ポーランドを復活させた(583頁参照)。仏皇帝の失脚後はポーランド立憲王国が成立する。

¹²⁰³ 「オーデル＝ナイセ線」とはオーデル川とナイセ川を基準とするラインであり、現在でもドイツ・ポーランド間の国境を形成している。

¹²⁰⁴ なお、ミコワイチクは亡命政府の首相を辞任して帰国しており、亡命政府は存続した。同政府が本国内の政府を承認し、解散したのは冷戦終結後の1990年である。See John Coutouvidis and Jamie Reynolds, *Poland 1939-1947*, Holmes & Meier Pub 1986, p. 107



この資料は入稻福智著『地域研究ヨーロッパ～欧州の本質～』からの抜粋です。

全編（PDF A4 約 700 枚）は下の URL よりダウンロードすることができます。

ファイルのサイズは約 70MB と容量が大きいのので注してください。

<https://eu-info.jp/europe2025.pdf>

